特226
162

0050872000

0050872-000

特２２６－１６２

水戸学行城東の教育

国民訓育聯盟・著

第一出版協会

昭和１６

AHM

水戸城東の教育

4

水戸市
城東國民學校

412
12
特226
162

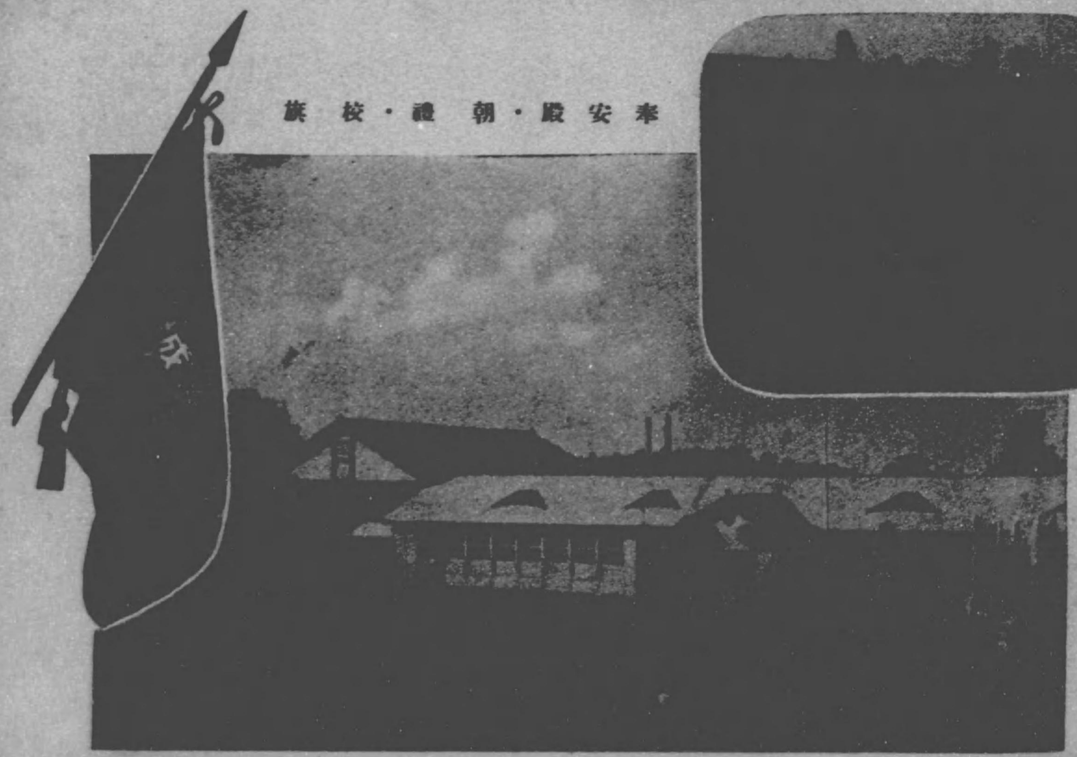
特226
162

の教育

所在道場

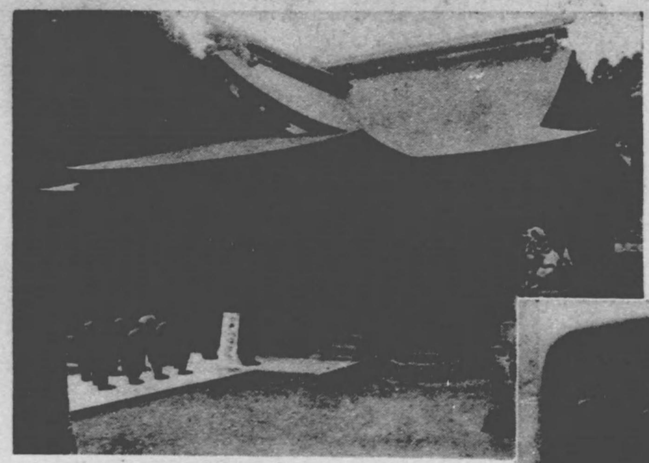
常春神社

梅里先生碑

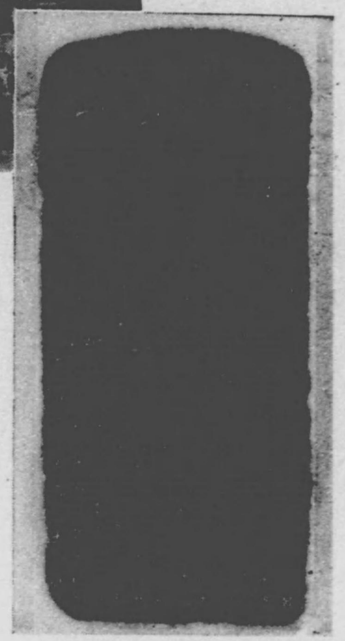


奉安殿・朝禮・校旗

所在道場

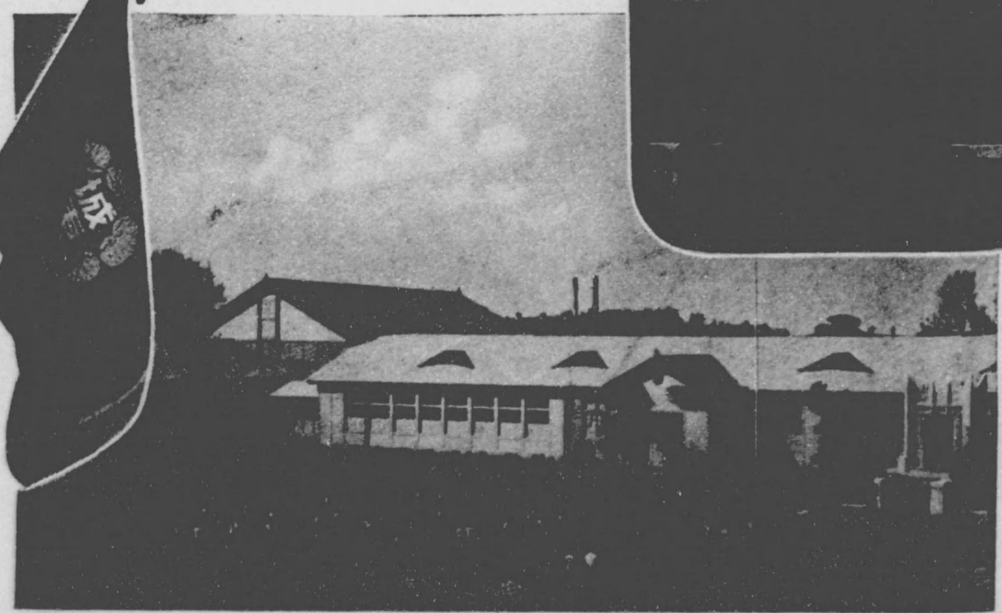


常磐神社



梅里先生碑

奉安殿・朝禮・校旗



行幸の姿

慰霊祭

愛國訓練

志向する教育

―ドにかへて―

學校教育の根本方針として三位一體の教育の實現を期してゐる。即ち學校・家庭・社會が緊密に連絡し、總力を發揮して教育の効果を全からしめるにある。其の爲學校教育に於ては訓育を中心として、兒童の品性を陶冶し實踐を指導することに不斷の努力を傾けてゐる。十綱十五目に亘る「行の體系」を樹立し、師弟同行、以て實踐に邁進してゐる。然しこれは行の基本的要諦を規定したもので、總て個々の學習乃至日常生活に滲透し浸潤させることを以て理想とする。

家庭教育に於ては家庭婦人の指導に留意し、母姉會を組織し、その本來の使命たる會員の知見の開發、德性の涵養に努め、進いて家庭及社會生活の改善並に家庭教育の振興を期するのを以て眼目としてゐる。この目的を達成する爲に毎月六日を以て定例日として集會を開催し、學校教育や時局に關する事項並に婦人の修養等につき種々の計畫を講ぜし徹底實行してゐる。社會教育のために少年團の經營に努め、部落生活を本位とする生活班及び訓練を主體とする團體班の組織系統により兒童をして時局下少年としての自覺を喚起すると共に、各施設に於ては一般父兄の參加を求め、以て社會教育の徹底に犬ちしめるとに工夫と努力を費してゐる。

行踐の姿

慰靈祭

愛國訓練

志向する教育

——序にかへて——

學校經營の根本方針として三位一體の教育の實現を期してゐる。即ち學校・家庭・社會が緊密に連絡し、總力を發揮して教育の効果を全からしめるにある。其の爲學校教育に於ては訓育を中心として、兒童の品性を陶冶し實踐を指導することに不斷の努力を傾けてゐる。十綱十五目に亘る「行の體系」を樹立し、師弟同行、以て實踐に邁進してゐる。然しこれは行の基本的型態を規定したもので、軈て個々の學習乃至日常生活に滲透し浸潤させることを以て理想とする。

家庭教育に於ては家庭婦人の指導に留意し、母姉會を組織し、その本來の使命たる會員の知見の開發、德性の涵養に努め、延いて家庭及社會生活の改善並に家庭教育の振興を期するのを以て眼目としてゐる。この目的を達成する爲に毎月六日を以て定例日として常會を開催し、學校教育や時局に關する事項並に婦人の修養等につき種々の計畫を同らし繼續實行してゐる。社會教育のために少年團の經營に努め、部落生活を本位とする生活班及び訓練を主體とする訓練班の組織體系により兒童をして時局下少年としての自覺を喚起すると共に、各施設に於ては一般父兄の參加を求め、汎く社會教育の機會たらしめることに工夫と努力を費してゐる。

其の他の努力事項として、郷土の特殊性に即し水戸學を中心とする郷土教育の實現をはかり、兒童體位の現狀に應ずる體育養護の施設に留意し、科學教育、時局教育等にも最善を盡して國家の要請に應ずる眞に有爲善良なる皇民の錬成を期してゐる次第である。

志向する教育……一

第一　水戸の光……七

第二　辿りし姿……八

一、七十年の歴史……七

二、路は遙けし……一三

1、回顧一束……七　2、脈打つ傳統の華……八

1、路は遙けし……一三　2、茨城縣教育綱領……一四　3、城東教育方針……一四

4、校訓……一五　5、教訓……一五　6、月是……一六

7、創立記念日……一八　8、教室環境……一九

第三　行踐の姿……二一

一、天地正大氣（正氣歌・學級朝禮・朗誦資料）……二一

二、勤王之倡首（彰考館文庫の前にて・臨指導の遺蹟）……二五

三、先賢講話（義公さまのお話・烈公さまのお話・先賢講話配當表）……二九

四、東湖先生墓前……三四

五、農人形の歌……三九

目次

目次

六、時局に備へて（皇靈祭・時局教育部の施設・國體觀念涵養施設・其他）……四一
七、花に埋れて……四六
八、歩け、歩け（徒歩訓練・體錬體系）……五〇
九、水戸魂の氣魄「勝閧」（愛國訓練・少年團經營）……五四
一〇、興亞奉公日（朝の行事・生活訓練）……六一
一一、母の常會（常會・家庭教育講座・母姉會の設立・母姉會の常會）……六四
一二、荆を拓く……七〇
一三、師弟同行……七五
一四、貧者の一燈（自畫像・會議風景・一粒の麥・愛國公債・事務分掌機構）……八〇

第一　水戸の光

○

輝し我等は我が國の　歴史の上に輝きて
拳き光示しつる　水戸の市民の一人なり。

これは我が兒童が高らかに歌ふ校歌（佐々木信綱作）の一節で水戸市民たるの誇を歌つたものである。我等は日本人たるの感激と共に水戸人たるの誇を有するものである。然らば如何なる理由によつてかゝる誇を感ずるか。一には鄕土山水の秀麗なると、二には幾多の神明の靈驗、偉人の芳躅の燦然として輝くものゝ存するに依るのでなければならぬ。

筑波の峰の雲を凌ぎ、大利根の水の空を浸す如きは我が鄕土の山水の秀麗を代表するものといつてよい。其の他、一望十里の沃野、延長數十里の海洋等、それ〴〵に四季折々の變化に富んで飽かぬ景觀を呈してゐる。これ等山水の秀麗は自ら縣民の胸奥に映じて、文學的藝術的の長所を啓沃し、進て偉人傑士をも輩出せしめてゐるのである。

建御雷神が鹿島神宮に、日本武尊が吉田神社に祀られて在すことは鄕土の誇りである。

建御雷神は天功を草昧に亮けられた武神である。當時群臣の功績あるもの一二に止まらずと雖も勇武にして大難を艾除するもの建御雷神に及ぶものはなかつた。從つて鹿島神宮は東國第一の神社に位し、古、他邦より來たものは必ず鹿島神宮を拜して後に入つたといふことである。防人の歌として萬葉集には

あられふりかしまの神をいのりつゝ
すめらみくさにわれはきつゝも

とあつて鹿島の神を祈つて皇軍に從つたことが詠まれてゐる。我が鄕土に建御雷神の祀られてゐることは水戸の地に皇風振起の一大動因を與へられた。東湖先生に「拜鹿島祠」の詩があり、其の一節に

悠々たる世態萬變すと雖も

明神の正氣遊蕩に淪まんや。
遠雷時に人傑を出し
皇風或は常陸より振はん。
前に中郎あり後に梅里
英光共に絶代の珍と稱せらる。

とあり、古代の水戸からは防人や衛士として徵されたものが多かつたが、其の後に於ても人傑雲の如く起り皇風彌が上にあがつたのは東湖先生の豪言の通りで、いふまでもなく遠雷の然らしめる所であらう。

日本武尊が熊襲征伐の御途すがら常陸に舟をとゞめさせられたことは史上明かな事實である。それが水戸市内朝日山で、後人其の由緒ある地に社を建てたのが今の吉田神社であり、我が校の氏神がある。威公が夙に日本武尊の人と爲りを慕はれたことは弘道館記に明記されてゐる。義公の尊皇心が威公の人物、學問思想に負ふ所大なるを想ふ時、蓋て水戸學が發祥し、皇道宣揚の上に一大威力を發揮されるに至つた動因が、實に日本武尊に存することは言ふを須ひない所で、我等をして崇敬措く能はざらしめるものがある。

次に偉人の芳躅として第一に指を屈せねばならぬのは藤原鎌足である。鎌足が我が鄕土より出られた事に關し史家の間に議論があるとしても、既に一般に於てはかく信ぜられ、我等はかゝる誇を誇として來たのである。史實の考證は史家に任せてよい。ただ我等の關心事は信念である。大化の改新は鄕土の偉人たる鎌足の實績に俟つたのである。實に大化の改新の搖籃は茨城であつたといふ信念は、明治回天の偉業が水戸學によつて實現したといふことゝ思ひ併せて我等水戸人の誇とするところである。

吉野朝時代に藤原藤房卿が藤澤に謫流され、北畠親房卿が東條浦に漂着した事實は偶然な機會とはいへ、常陸に勤皇精神滋殖の好機を與へた。特に親房卿が小田に居ること四年、更に關城に居ること二年、この兵馬倥偬の間にも拘らず皇國を思ふの餘り彼の『神皇正統記』及び『職原鈔』を著はされた。當時建武以來競はなかつた南風が常陸を中心として疾風を巻き起した事實は皇風常陸より振ふの面目といへよう。

德川時代に至つては義烈藤公をはじめ、東湖、正志齋等の碩學勤王の士續出して所謂水戸學を發祥せしめたことは周知の通りである。其の他二宮尊德も縣下に幾多の事蹟をとゞめ、熊澤蕃山も古河を終焉の地としてゐる等、偉人の芳躅は擧げて數ふに遑なき程である。

要するに我が水戸の地には天地の生氣の靄然たるものがあり、それが迸つては山水の秀麗となり、現れては偉人傑士を生んだといふべきである。これ我等をして無上の誇を感ぜしめる所以である。

○

水戸學は德川光圀が明暦三年彰考館を建て大日本史の編修を計畫したことに始まり、其後年數にして二百五十年、藩主の代數にして十二代といふ恐ろしい長い間に其の藩主と其の下にあつて修史事業に參畫した學者との間に、其の形を備へた一種の教學である。然らば如何なる教學かと云へば人により其の說を異にするも或る人の「歷史主義に基き大義名分を明かにして皇室中心の國家生活を高潮する教學である」といふのは頗る適切であると思ふ。歷史主義とは過去の中に現在の生活の指導理念を求める立場である。一切の事物は歷史を持つてゐる。されば現實が過去の繼續であり延長である限り歷史はこれを重視せねばならぬ。これ蓋し輝かしい歷史を持てる我等國民の特權でなければならない。この點現實の指導理念を歷史に求める立場は妥當である。近時水戸學が有識層の間に一大關心を惹きつゝある理由の一つはそこにある。

かゝる水戸學は時代の推移と共に幾多の變遷を經て烈公時代に其の花を咲かせ光りを放つた。卽ち天保年間弘道館の藩學が創始されたのがそれである。弘道館が建てられた理由や其の他は弘道館記に明瞭に記されてある。弘道館記は水戸學の結晶とも見るべきもので、水戸學研究上缺くべからざる文獻である。

水戸學の學的特質の一は神道を崇んだ點に存する。他の藩學は大抵儒教を本位としたのに對し獨り水戸藩に於ては何處迄も神道を本位とした。こゝにいふ神道とは我が國固有の大道を指すのであつて、之を扶ける爲に儒教を取入れた。「神州の道を奉じ、西土の教を資り」といふのは夫れである。この點は弘道館が他の藩學と大いに其の趣を異にする所で注目に價する。次に實學を本位とした。光圀公が水戸學を創業した頃には主として朱子學を奉じたが、これは當時の情勢上已むを得ないことゝ言はねばならぬ。それが第六代治保公の時代に古學と陽明學とを攝取した結果、この時代（烈公）に至つて大層實行性を具へて來て、獨り水戸藩の人士のみならず、天下の志士俊傑の多くに依つて實際政教の上に適要されたのである。以上は弘道館建學の精神若しくは水戸藩教育の上に重大な關係を持つてゐる。卽ち弘道館學則の第一に

一、凡そ學館に出入する者は、當に親製の記文を熟讀し、審か

に深意の在る所を知るべし。神道聖學其の旨を一にする、
忠孝の其の本を二にせざる、文武の岐つ可からざる、學問
事業の其の效を殊にす可からざる、皆宜しく記文の意を奉
承し黽勉服膺すべし

と述べられて、弘道館記中の教學綱領を敷衍詳述されてゐる。

○

弘道館と國民學校

弘道館建學の動機及び其の教育綱領は今回實施された國民學校のそれと符節を合する如く一致してゐる。

國民學校今回の改革の由來を尋ぬるに、大正以後の教育改革の必要は朝野に喧傳せられ、之に對する幾多の試案が提出された。是等の試案には單に諸外國の制度を模倣せるもの、又は主觀的なイデオロギーに基いたもの、極端にして到底實現し得ないもの等が少くなく甲論乙駁、未だ歸一するに至らなかつた。然るに近時殊に滿洲事變後我が國力と文化が躍進日本の名にふさはしい一大發展を遂げ、我が國の世界的地位が頓に向上するに伴ひ、教育に於ても從來の歐米模倣の域を脱し、我が國の獨自性と世界的地位に顧み、確乎たる指導理念の下に教育全般に亘り根本的改革を

行はうとする機運が澎湃として起つたのである。

これに對し弘道館設立の動機は非常によく似てゐる。即ち當時水戸藩に於ては文武相剋して、藩士の思想が漸く對立するやうな事情が見えて來た。爲に遂に弘道館を建て、文武の融和、思想の統一を圖ることになつたのである。元來水戸は昔から大層學問を重んじた所であるに拘らず藩學は他藩よりズット遲れてゐた。それは水戸藩に於ては明暦三年彰考館が建てられると共に毎月六回學者の講筵が開かれ、水戸の士分及びそれ以上の人達に聽講させた。この故に彰考館が或る程度まで藩學の役目を果してゐたのである。更に他の方面に於ては經濟上の事情もあつたであらう。兎に角それを敢へて藩學を創めるに至つたのは當時の社會情勢上根本的な改革を必要としたからであつて、兩者其の揆を一にするのは不思議といふべきである。

尚教學の綱領に至つては全く一致してゐる。即ち國民學校が皇國の道を修練せしめ國體に對する信念を深からしめるのに對し、弘道館は神州の道を奉じ國體を重視し皇運扶翼を以て最高眼目としたのである。水戸藩の君臣が修史事業を中心として種々唱道し實踐してゐる所のものは結局皇運扶翼に歸着する。

更に國民學校が教學の根本指標として心身を一體として教育し

教授・訓練・養護の分離を避け、各教科並科目は其の特色を發揮せしむると共に相互の關聯を緊密ならしめ國民錬成の一途に歸せしむるなど一體觀の教育原理に基かんとするに對し水戸學は忠孝无二、文武不岐、學問事業其の效を殊にせざる建前に立つて所謂實學を唱道し實踐した。要するに弘道館の教育主義は飽くまで日本主義に立脚し、我が肇國の精神を昂揚し皇國の眞姿を明示し、徹底した國民的自覺の下に尊皇報國の實踐を眼目としたものであつて、國民學校の要旨もこの外に出るものでないであらう。

かく考へて來る時水戸學の體系中には現代的意義を具へてゐることが少からず見出される。勿論水戸學の全體を今日の日本に施さうとすることは無理である。然し水戸學の中には今日の我等の缺くべからざる認識乃至信念がある。否皇國に取つて第一義的なものが呼吸して居り、萬古不易の大道が掲げられてゐる。これを今日と雖も大いに汲み取り實踐することが水戸學を現代に生かす所以である。

○

茨城縣に於ては、昭和十四年茨城縣教育綱領を制定し公布された。少しく頗はしい感じがするが、參考の爲に全文を掲げ概要を

說くことゝする。

我ガ茨城ノ地タル、山水秀麗、人情樸直、肇國ノ古ヨリ皇風夙ニ振ヒ、正氣凜然トシテ存シ、神明ノ靈蹤、偉人ノ芳蹟、燦然トシテ千秋ニ輝ク。

教職ヲ此ノ地ニ奉ズル者、虔ミテ歴世ノ聖訓ヲ仰ギ率リ、古ニ稽ヘ今ニ徵シ中外ノ事勢ニ鑑ミ、大中至正、勇往邁進以テ教育報國ノ道ヲ完ウセザルベカラズ。

一、神州ノ道ヲ奉ジ、内外本末ノ辨ヲ明カニシ、以テ皇運扶翼ノ至誠ヲ效スベシ。

一、國體ニ率由シ、惟レ忠惟レ孝、以テ至仁至愛ノ聖恩ニ報イ奉ルベシ。

一、日新以テ皇國文化ノ宣揚ヲ期シ、興亞ノ大業ヲ贊スベシ。

一、敬神崇祖、感恩報德ノ念ニ徹スベシ。

一、名ヲ正シ分ヲ明カニシ、私情偏見ニ囚ハレズ、大義ヲ謬ラザルベシ。

一、寛容ヲ尚ビ、相剋ヲ戒メ、和協推讓、好ンデ人ノ美ヲ成スベシ。

二、實學ヲ尊ビ、躬行ヲ旨トシ、以テ有爲有能ノ皇民タルヲ期

スベシ。

一、文武不岐ノ眞義ニ則リ、柔弱ヲ排シ、粗暴ヲ斥ケ、文ヲ修メ武ヲ練リ、以テ剛健不撓ナル身心ヲ養成スベシ。

一、學問事業ノ一途ヲ念トシ、空論ヲ排シ、實踐ヲ重ンジ、實力ヲ養ヒ、努メテ學識ヲ世務ニ活用スベシ。

一、天分ニ順ミ、能力ノ發揮ニ努メ、以テ生ヲ厚ウシ、世ニ處スルノ基ヲ立ツベシ。

一、模倣ヲ戒メ創造ニ勗メ、研鑽工夫ヲ愛スル風尚ヲ長養スベシ。

一、時勢ノ進運ヲ看取シ、進取不息ノ氣象ヲ振起スベシ。

惟フニ、水到リテ渠成ル。誠心一タビ徹セバ機ニ中リ、實ニ處スルノ方途自ラ生ゼム。戮ニ育英ニ在ル者、夫レ豈ニ努メザルベケンヤ。

概觀するに前文は鄉土茨城の歷史的地理的人文的な特色を述べ教育者が教育道を完うする爲の心構を概說してゐる。謂はゞ序文である。中の綱領は神州の道と實學の二大綱で括り、各綱とも五小目を配し以て大綱を明かにしそれを助けてゐる。要は約せば二大綱領となり閉けば十項目となる。後文は最後に教育者の決心覺悟を固め、實踐を促してゐる。二大綱領につき其の內容を檢覈すれば第一綱「神州の道」を率ずるは日本教學の根幹であり、特に水戸學を有する本縣教育綱領の大根幹となるべきは當然である。第二綱の「實學」を尊ぶは水戸學の特質であり、國民學校否日本教學改善への指標である。要するに前者を體とすれば後者は用をなし兩々相俟つて一層の關聯を保つ組織になつてゐる。

かゝる鄉土の特殊性に卽し、水戸學に淵源する教育綱領が制定され實際教育への確固不拔の指標と指針とが與へられたことは茨城教育の特色といへよう。今後の問題は一に繫つてその實踐と具現にある。その日の速かならんことを期するのみである。

我が校教育方針の一項目に

我が鄉土茨城の自然並に水戸傳統の文化を了解せしめ、眞に之を愛好し、進んでその建設創造に堪ふる善良有爲なる水戸市民の錬成に努むべし。

と規定してある。要は鄉土の特殊性に卽し、先人の遺産を繼承すると共に更に之を伸展向上せしめ得る市民の養成を眼目とする。これが具體的の指導としては教科及科目の授業に於ては勿論、其の他の機會に於ても水戸學の精神に基いて實施し、特に水戸學文獻の朗誦資料を制定し、先賢に關する講話の系統案を樹立して先人の思想にふれ、精神を理會することを期してゐる次第である。

第二　辿りし姿

一、七十年の歷史

1　回顧一束

誕生……「光輝ある歷史に鑑み諸子は深く本校を愛せよ」と學校長の訓しに續いて「我等はよく學びよく勵み健全なる校風を發揚し一層我が校の名譽を輝かさん」と、全校兒童が力强くも唱へる誓詞が五月の三日、城東の學び舍から聞える。しかも其の聲は明治六年この方、唱和する兒童そのものに變りはあるが年々歲々此の宣誓は繰返されて來たのである。遙けくも七十年の昔、明治六年五月三日こそ、本校が蒼龍學校といふ名稱のもとに建てられた記念の日である。

創立後十年下市大火の災難を受け、當時の記錄を辿るに由もないが水戸城の天空に聳える姿を映して靜觀そのものゝ千波湖の東寄り、彼の偉大なる義公の生地三木氏の宅近い根積町が本校の生地である。「消魂橋ヨリ根積町ヲ望メバ北極ノ直下ニアリテ坎隅ニアタルヲ以テ子隅町トイヘルナルベシ」との大いなる氣慨から命名されたであらう町中に、雄大にして而も明日の飛躍を約束した蒼龍といふ校名を以て創立されたことを思へば、當時の有樣がまざ〳〵と目に浮んで來るのを覺えるのである。

星霜七十年……長い歷史を顧みれば有爲轉變の蓄積である。人生五十年の謂を以て本校の半世紀半を眺める時、實にめまぐるしい發展と變轉とが想起されるのである。卽ちその間に學制の改正學級の增加等の爲に校地の移轉、校名の變更、男女兒童の離合が屢々繰り返されて來た。今その後を一瞥して見るならば

一、明治六年五月三日　根積町ニ開校、蒼龍學校ト稱ス

一、明治六年十一月十三日　橫竹隈町ニ竹隈女學校ヲ開ク

一、明治六年十二月二十二日　鍛冶町ニ分校トシテ鍛成學校ヲ設ク

一、明治七年九月八日　蒼龍學校ヲ下市小學校ト改稱ス

第二 辿りし姿

一、明治十年一月二十一日　横竹隈町ニ下市小學校ヲ移轉ス
一、明治十九年十一月　竹隈女學校（下市）ヲ下市小學ニ併合シ下市尋常小學校ト改ム
一、明治二十二年五月　水戸市下市尋常小學校ト改稱ス
一、明治四十三年三月三十一日　水戸市下市尋常小學校分離シ水戸市下市男子尋常小學校ト水戸市下市女子小學校トナル
一、大正五年六月二十六日　男女兩校ヲ合併シテ水戸市下市尋常小學校トナル
一、昭和二年四月一日　男兒童ヲ濱田小學校ニ收容シ下市尋常小學校ハ女兒童ノミヲ收容スルコトヽナル
一、昭和八年四月一日　下市尋常小學校ヲ竹隈尋常小學校ト改稱ス
一、昭和九年四月一日　學區變更シ男女共學トナル
一、昭和十二年四月一日　川崎町ニ移轉改築、學區變更、竹隈尋常小學校ヲ城東小學校ト改稱ス

以上のやうな特殊的な歴史をもつ本校は一見誕生に當つての雄大な企圖も、傳統となることが出來ずに今日に至つたと思はれるかも知らないがそれは單なる外面的臆測に過ぎない。變轉は傳統精神を古きになづませず、之に清新の息吹と再發足の意氣とを與へて與れたのである。七十年の五體の何處を切つて見ても赤い血潮が脈々としてゐたことは學校全般の事實が立派に證明してゐるのである。而も最大の幸福は、移轉校地の總てが何れも我等の先賢の跡であつた。即ち維新の黎明に當つての大義明分尊皇精神の原動力として不滅の光を放つ大日本史編纂に關係した學者の屋敷跡であり、文武錬成、武士道實踐者の生地であり愛國の情已まれずして國事に奔走した志士の棲家の跡であつたのである。此の點文教の地水戸は、全く惠まれた教育環境であることをつく〳〵感じさせられる。我等の先賢は地下に冥して今、教職に在る我等に無言の激勵を惜まず、我等も亦代々その感激に浸りながら聖職に敢然として邁進して來たのである。

2　脈打つ傳統の華

歴史に盛衰の跡を尋ねると、其處には必ず中心者、即ち指導者の適、不適如何が最も大きい影響をなしてゐる。「勇將のもとに弱卒なし」である。今七十年の本校の跡を顧みる時我等の先輩が如何に運營し、如何に努力して來たかを反省して見ることも強ち無駄なことでもないであらう。然しその全般に就いて回顧するには餘りに困難である故、本校教育の最も隆盛期とも云ふべき最近の歴史に就いてそれ等を反省してみよう。

固成……昭和の聖代となつて間もなく昭和二年三月、市内小學校首席訓導より拔擢されて、當時の下市小學校に榮轉された石橋校長は、至誠、温厚にして實直なる人であつた。當時、本校は女兒のみを收容し、一部に市立女學校を併置してゐた爲に、校舍全く狹く、特別教室としては唱歌室と裁縫室位であり、教育上非常なる支障を來してゐた。種々な設備も難然として居たのであるが、先生の悲願は居を正すにありと考へられ、專ら校舍内外の整備に盡力せられたのである。居を正して始めて心も正しくされる謂か。而して教育の方針は飽迄實直、當時華かであつた何々主義の流行に墮せず、何處迄も眞面目なる方針に則つて教育に專念した爲、兒童の實力の向上は素晴らしき域に達したのである。その陰に在つて現校長の方針を實踐した職員の姿。默々として日々の要職に專念し、兒童をおいては他に何物もなく、而も温順、和氣常に滿つと云ふ感があつた。此の中心より生み出された化育は本校獨自の兒童態度をつくりあげ、上品にして貞淑な全く女兒校のみの校風が樹立されたのである。此の風格は市内小學校と比較して一目瞭然たるものとなつたのである。が更に此のバトンは昭和五年十月次代校長大津桂一先生に繼がれたのである。先生は本縣女師附屬首席訓導を振り出しに二、三地方町村の校長を經、既にその經營的手腕を認められ、若くして本校に迎へられたのである。前校長の温厚さに加へて明朗發溌、而も明晰なる感一杯といつた性格である。和協一體の本校職員の傳統的性格はこゝに明るさを持つ洗錬されたものへと向上し、職員室の空氣は至極なごやかな樣を呈して來た。嚴肅な處であつて而も和氣に滿つといつた職員室、そして學校教育の最中樞ともなるべき職員室が我等の理想とする職員室なのである。當時を顧みる時、相當にその理想に近かつたことを思ひ出すのである。この雰圍氣の漂ふところ兒童教育の實際は推して知ることが出來やう。

傳統として出來上りつゝある校風は先生の卓越した教育實踐の努力に依つて益々その輝きを增し、今や搖ぎなき校風が樹立されて來たのである。時恰も滿洲事變勃發し、内外頓に緊張した一大轉換の時機であるが學校教育にそれが如何に盛られて來たかを一瞥すると、從來ともすれば末梢的なことに捕はれ、根本的なものを忘れられて居たにも關はらず本校に於ては、水戸傳統の精華此

の秋とばかりに一意教育勅語の御趣旨を率體し、眞に我が國の使命を體現するに足るべき實力と强固な信念を有する國民の養成に大眼目を置き、一歩々々其實績を擧げつゝあつたことは我等の先輩に滿腔の感謝を捧げねばならぬことである。又に忘れることの出來ないことは鄉土への關心であつたらうか。恐らく鄉土愛好の精神涵養の聲まさに教育界を風靡せんとするに先んじ、鄉土水戸への關心を深めんとした着眼はまことに先見の明ありといつても過言ではない。教授上の方法、施設並に設備等に對しては飽迄、系統的、具體的に而も有機的に計畫され研究され、實施省察を忘れず、その改善に意を注がれた結果、學校の整備は完全にまで達した感があつたのである。其の上家庭との連絡は學校通信によつて緊密さを深くした點今日の礎石ともなつたことを疑はない。

こゝに於て本校の教育は磐石の構が出來、次への飛躍が約束されたとも云ひ得る。

魁……かくして昭和八年四月「訓育」の先覺者とも云ふべき山崎校長を迎へたのである。先生は夙に訓育の重大さを痛感せられて前任校に於て既に縣下に最初の訓育研究會を開かれ、訓育上の著書もあつて特異の存在を持つ大校長であつたのである。本校に赴任せられたのは先生の晩年にして最も圓熟の境地であり、過去三十年の體驗の總決算を本校教育に求めたのである。而も當時の本校は最早や前任者に依つてその礎地は築かれ將に發展を豫約されてゐた矢先、先生を迎へたことは此の上もない幸福である。

先生は組織化され、整備された學校各般の上に立つて、先生の奥深き信念から、眞の人間を育成せんとするは訓育にありと云ふ持論を提げて學校經營の一大根幹とされたのである。當時の教育は主として教授訓練、養護主義であつたのであるが、眞實の教育はこれ等を一丸とした訓育でなければならぬといふ觀點から未だ「訓育」の言葉すら寥々たる當時大膽に而も熱烈に叫ばれて一途に精進の道を歩まれたのである。此の勇將のもと職員の研鑽と實踐は校長を信望し同行者として師道磨勵にいそしんだのである。

二年の星霜は流れた。狹隘にして古色蒼然たる校舍に魂の息吹は通ひ、燦々たる光が輝き出したのである。先生は此の間、竹隈教育の實相を世に問ふべく「小學校訓育細案」(第一出版協會發行)なる著書を出版されたのであるが、非常な好評を博したことは、此の頃全國より本校に來られる參觀者の言を俟つ迄もない。かくして精進の成果が報いられる日が來た。卽ち東京第一出版協會、訓育研究會古閑侍先生の御努力により本校を背景とする教育雜誌『眞實の教育・訓育』が昭和十一年二月を卜して創刊される

こと丶なつたのである。

さゝやかな月刊雜誌ではあつたが、竹隈同人の理論と信念と實踐が一體となつて誕生し、而も其の內容の淸新にして類なきは確かに當時の教育雜誌界に異彩を放つたことを誇りとするものである。一度これを世に問ふや、全國の同志の反響は非常なものであつた。深き人間育成を信念とし之が實踐に眞摯な教育を行踐して來た各地の同志には群書山の如き當時にあつてすら其の意を滿たす書籍の僅かであつたことを遺憾として居たことであらう。「訓育」は斯くして既に生るべき運命にあつたとも云へるのである。

殆んど一ヶ年、竹隈同人の編輯は全く容易なものではなかつた。內に日々の實踐をより深く反省し、之が充實を圖ると共に、外に之を公開しつゝ歩んだ同人の生活は全く言語に絕するものがあつた。

國民訓育聯盟誕生……かくて昭和十三年盛夏、鎌倉第一小學校において、「第一回の教育と行の講習會」が開催され、全國よりの熱烈なる同志の參加裡に終始眞劍なる講習會が行はれたのであるが、其の席上訓育研究會の强化、全國的團體結成の要望が起り、こゝに於て「國民訓育聯盟」が亙然として成立したのである。

靜かに惟ふに、この聯盟の誕生は決して荊棘の過程なくしてあり得たものではない。山崎先生の生涯を貫く訓育的貢獻に加ふるに竹隈同人並に同志の多年に亘る獻身的研究と實踐との結晶であることを忘れることが出來ない。

偉大なる生涯　昭和十二年四月を期し本校にとつては歷史上意義ある一頁が繰り擴げられることゝなつた。校地狹隘、校舍の腐朽甚しき爲に移轉、改築の議起り、土地の買收、起工と目まぐるしい活動が繼けられたのである。先生は此の間全く文字通りの東奔西走、多忙な生活を送られ、新校舍の殿堂も愈々其の偉容を川崎町の一角に現はす間近、遂に病魔の襲ふところとなり、昭和十二年四月二十九日、遂に新校舍の姿を見ずして偉大なる一生を終られたのである。享年五十有二。然し先生の遺された業跡は竹隈同人の胸に祕められ、次代校長に繼承されて益々その眞價が發輝されたのである。昭和十五年盛夏「教育と行の講習會」が本校を會場として開催されることなるや、眞先に先生の墓前に報告されたのである。先生の蒔かれた種子は風雨にも撓まず生長して、今や大樹たらんとしてゐるのである。地下に冥せる先生の靈は如何ばかり滿足されることであらうか。

傳統を承く……昭和十二年五月、山崎校長の後を繼いで本校に來任されたのは、甲斐豐先生であつた。先生は山崎先生と因緣淺

からず、先生の衣鉢を繼承し、先生の遺業を完遂するに最もふさはしく、加ふるに眞摯敢闘型、明敏にして卓越せる手腕力量を具へ、若くして錚々たる大校長であつた。先生は暫し默考されて、一つには今迄の本校經營の大小となく或は亦自他共に標榜する訓育に就いて充分なる研究を遂げられ、一つにはそれ等を今後如何に運營し如何に發展的ならしめるかに苦心をされたのである。誠に用意周到なる經營者とも云ふべきか。

そして先生は十二分の確信を把握し、不退轉の決意を以て本校經營に着手せられたのである。此處に於て傳統は單なる傳統に流れることなく、その根本を大磐石の安きに置き、採るものは採り、改善するものは大いに改善して、清新なる意氣も高らかに再發足を續けることゝなつた。

然るに天何ぞ無情、昭和十三年は何たる厄年か、梅雨期の降雨は田園に歡喜の慈雨であつたが日ならずして之が天明大洪水以上の氾濫を而も一度ならず二度ももたらすとは神ならぬ身の知る由もなかつた。六月二十九日朝來よりの豪雨は三十日に至るも止まず遂に那珂川及千波沼の大增水を來し、全學區泥海と化したのである。越えて八月三十一日、箱根附近に上陸した颱風は關東一帶に大豪雨を見舞ふ。非常訓練の實踐此の秋とばかり、無事に兒童を歸宅せしむ。夕刻より復々增水甚だしく、宿直員の發する非常召集に應じた全職員は學校長の指揮に從ひ徹宵避難防水作業に當る。增水の激烈さは以前の比でなく、加ふるに夜半停電し、暗黑のさ中腰まで泥海に沒して困苦と闘ふ職員の姿。やがて減水となるや、その慘狀は全く言語に絕す、全學區亦此の慘狀であつた。早速、復興の對策は講ぜられ、空前絕後の大作業は開始せられたのである。疲勞と心勞は容赦なく我等の身に迫るが躊躇、逡巡は敢て取らず、敢然として、天の試錬に抗したのであつた。全復興に一ヶ月餘を費したのみで、以前に增して校舍内外は淸掃されたのである。これこそ多年我等が行じて來た訓育の賜物であつて、蹤を沒する泥土と抗し、糞尿を處理する等、あらゆる困苦の中に無言の大いなる行を自ら行じたのである。試錬を經た本校訓育は内に一層の深みを蓄へつゝ次に備へたのである。そして昭和十四年二月、本校にとつては最初の大公開訓育發表會が開催されたのである。銘して「皇民錬成の訓育」として本校訓育の全貌を公開し、特に水戸魂の錬成行を世に問ふたのである。先生は間もなく縣視學に榮轉せられたことを附記する。

本校教育が將に固め成されて來た時、圓熟の境地を歩む山崎先生によつて訓育が標榜せられ、甲斐先生によつて發剌性を加へら

れた本校教育は、昭和十四年四月、阿内現校長の手に承け繼がれたのである。先生は過去に於て縣視學の經驗を有し、縣下有數の學校長を歷任し、學校經營の最高潮期とも云ふべき時、本校に御出でになつたのである。先生は夙に佛教に造詣深く、豐富なる體驗の持主にして、常に慈愛に滿ち圓滿の相は接する人をして無言の中に和ぎの感を與へる。圓融無解の境地とも云ふべきか。悠々迫らず、淳々として信念を貫徹するの氣慨がある。本校の教育が今將に圓熟せんとする時、實に其の最中樞に人を得るは誠に幸福といふべきである。それあらんか。校長を慕ふ職員の一致協力は益々城東教育の眞價を發揮しつゝあるのである。

由來、水戸は義公以來の傳統の精神が脈々として今に生きてゐるのである。我等は先賢の遺された此の偉大なる精神を誇りとせず身に體し、實踐を通して之が體現に努めてゐるのである。本校の現在が一朝一夕に成就したものではなく、永い傳統をもち、而もそれが更新され、改善され、批判され實踐されて現在に至つたのである。故に一つの些細な施設と雖も、それには先輩同人の血が通ひ、深い根源から生れた所産であることを誇りとするものである。

二、路は遙けし

1　路は遙けし

七十年の旅をつゞけて辿りついたのが、城東校の今の姿である。人生に於ける七十といへば古稀を祝ふ目出度い年で、血につながる人々が集つて、心からなる祝をなし、歩み來つた今までの人生行路に對して感謝を捧げることが習はしとなつてゐる。學校の七十年も祝福せらるべきであるが、只古いといふだけでは、格別取り立てて祝ふほどの意義がないかも知れない。而し今、自分達が歩んでゐるこの教育行の一筋道は幾多の先輩が營々として築き上げてくれた尊いものであることを思ふ。そこには大きく深く殘された足跡の幾つかゞ見出されるであらう。そして、それ等の一つ一つは血と汗と涙に色どられてゐるのである。眼をあげてその七十年の永い路を見やる時に、はる〳〵と來つるものかなとの感が深く湧く。幾十人、幾百人の手に受け繼がれたであらう手脂に光るバトンを握りしめて立つ同行二十九名の前に開けた路は果

しなくもつゞくのである。行けども盡きぬであらう、その多難の前途を見つめた時に、ともすれば失はれやうとする力に襲うつてくれるのは、七十年遲ばれ來つて、今自分達の手にあるバトンである。これをしつかりと握つて走らねばならない。而も後れずに進まねばならない。日暮れて、路傍の石に枕して明かす旅の夜も、明日の輝かしい陽光を望みつゝ只、ひたすらに、築かれた路に、更に築き足しつゝ續ける教育行の旅路がある。今、歩みつゞけてゐる自分達の姿が、決して至上のものとは思つてゐない。滿ち足れりとは自負してゐない。ありのまゝの姿を旅しつゞける道しるべを、此處に書いてみようとしてゐる。その姿、その行手、只、道は遙けし。

2 茨城縣教育綱領

昭和十四年の秋、本縣の教育綱領が定められた。初等教育も、中等教育も、社會教育も一切の教育道の行手を明示するために樹てられた指標であり、燈臺である。前文と二つの綱領と跋文とより成つてゐて、鄕土茨城の香り高い而も力强いものである。

本文省略（五頁に掲ぐ）

3 城東國民學校教育方針

全國的なる教育の方針は法規に明示せられてゐるので、そこに少しの遲疑もなく、法文の眞精神を身に體して雄々しく往けばよいのである。而も同じ皇國の民であつても、その生活する環境には差があり、住む鄕土の傳統には異がある。乃でその土地の、その學校に卽應する教育方針が樹てられるのは必然である。我が校に於ては昨年度始め、從來あつた方針に檢討を加へ、次のやうに定めた。これによつて皇民として又市民としての錬成に進む方向を明らかにした。

教育ニ關スル勅語ノ御趣旨ヲ奉體シ 國民學校令第一條ニ則リ、我ガ肇祖以來涵養セラレタル水戸教學ノ眞精神ニ鑑ミテ、兒童ノ心身ヲ陶冶シ以テ健全ナル皇民ノ基礎教養ニ努メンコトヲ期ス。

一、我ガ建國ノ本義ヲ闡明シ、皇國ノ國際的地位ヲ確認セシメ以テ忠君愛國、敬神崇祖ノ念慮ニ燃エ、體力、氣力旺盛、識見高邁ニシテ眞ニ興亞ノ大業ヲ翼賛スルニ足ルベキ實力ト堅固ナル信念トヲ有スル皇民ノ錬成ニ努ムベシ。

一、我ガ鄕土茨城ノ自然並ニ水戸傳統ノ文化ヲ了解セシメ、眞ニ之ヲ愛好シ、進ンデソノ建設創造ニ堪フル善良有爲ナル水戸市民ノ錬成ニ努ムベシ。

4 校訓

至誠 勤勞 親愛

環境を考へ、兒童の實生活を見つめて昭和七年十月に制定したものである。三ヶ條の並列になつてゐるが、之は勤勞と親愛との二つの實踐德目を擧げ、それを至誠を以て貫くといふ意圖の下に定められたものである。當時は女兒のみの學校であつたので特に、女らしい躾として親愛といふ項目を設けたのであるが、男女共學になつた現在でも、そのまゝ變更を加へずに掲げてゐる。それは、ともすれば粗暴になり易い市内の場末である本校の男兒に必要な訓育目標であり、又、何か頑なゝ、人と融和しない、それでゐて直ぐに行動にうつすと見られてゐる鄕土精神の缺陷を是正するのにも大いに役立つてゐると思はれるからである。この校訓より兒童の宣誓が生れ、職員信條も亦之に一脈相通じてゐる。

之を書いた大きい額を各學年毎に廊下に掲げて常に兒童の目に觸れさせるやうにしてゐる。又、全校兒童が集つて嚴肅なる式を擧げる講堂正面にも掲げる。（但し之は、揮毫依頼者の都合によつて、未だに實現の運びに至つてゐないが、二千六百年の記念事業として計畫したものである。）

校訓を日々の行踐に如何に取り入れてゐるかといふに、全體訓練等の際に之を力强く唱へて意識を昂めることにつとめてゐる。又、學校全體の訓話や、學級訓話に之を取入れ、修身の教材に關聯させてその實踐をはかつてゐる。施設に於ても毎日の清掃作業土曜日の校外清掃奉仕、日曜日の朝行ふ神社奉仕、休暇中の勤勞作業等に勤勞の精神を養ひ、毎日仲よく二列行進の登校に、學級内の班別による學習や作業に、家に歸つては町内の子供として常會に、部落の修養會に、樂しみ睦み合ふ固い團結の中に親愛の心が培はれるのである。而も、それ等は皆、至誠より出でたものでなければならない。すべてに通ずる德目は至誠である。

5 級訓

學校の教育方針に則り、校訓の實踐をはかり、健全なる級風を樹立するために級訓は定められる。年度始に、學級擔任者が、學級の個性と發達程度とを充分に考へて立案するものであつて、學級の長所を更に伸展させるためのものもあり、短所と思はれるものを矯正する場合もある。只一ヶ條を掲げるのもあり數ヶ條を掲

げて置くのもある。校務會の席上發表し、全員の承認を得て成立するのである。級訓は校訓に到達する一段階でもあり、校訓を實踐する一項目でもあるが、受持教師の印象と共に卒業後も永く兒童の頭に残るものは、この級訓であらう。

次に本年度の級訓を掲げる。

一年	一組	ヨイコドモ
	二組	タヾシイシセイ ホンキニベンキヤウ
	三組	同
	四組	同
二年	一組	すなほ なかよく がまん
	二組	同
	三組	同
	四組	同
三年	一組	本氣に勉强 進んで働く 友達仲よく
	二組	同
	三組	同
四年	一組	努力
	二組	强い體 明るい心 本氣に働く
	三組	眞劍
	四組	眞劍
五年	一組	誠實
	二組	誠
	三組	眞劍 協同 健康
	四組	感恩 勤勞 健康
六年	一組	眞劍
	二組	努力 感謝
	三組	感謝
	四組	誠實
四組	同	

6月 是

月毎に一つ宛、德目を定めて訓育の實踐指標としてゐる。之は、その月に又は月の行事に最も關係の深いもの、或は各學年を通した修身の德目等より選んだものである。例へば九月の沈着は、關東震災記念日、關西風水害記念日があり、又修身書三年の「物事にあわてるな」、四年の「沈着」等があるので、それ等を考へて選んだ。

一ヶ月に只一つの德目を選んでその徹底をはかつてゐるがこの月是を更に分けて各週毎に週是が定められる。それは學年の程度に應じて具體的に、わかりやすい言葉で表はされる。月是を身につけて行踐にうつすために之に相應はしい明治天皇の御製を一首づゝ選んで毎日の朝禮に奉誦してゐる。

四月 規律協同

千萬の民の力をあつめなばいかなる業も成らむとぞ思ふ

五月 勤勞

大空にそびえて見ゆる高嶺にも 登ればのぼる道はありけり

六月 奉仕

おのが身はかへりみずして人のため つくすぞ人のつとめなりけり

七月 親愛

もろともに助けかはしてむつび合ふ 友ぞ世に立つ力なるべき

八月 鍛錬

年々におもひやれども山水を 汲みて遊ばむ夏なかりけり

九月 沈着

あらし吹く世にも動くな人心 いはほに根ざす松のごとくに

十月 勤儉

物學ぶ道に立つ子よおこたりに まされる仇はなしと知らなむ

十一月 開發

いかならむ事にあひてもたわまぬは 我が敷島の大和だましひ

十二月 精進

世の中の人におくれをとりぬべし すゝまむときに進まざりせば

一月 敬虔

小山田の畔のほそ道細けれど ゆづりあひてぞしづは通へる

二月 信念

おごそかにたもたざらめや神代より うけつぎ來たるうらやすの國

三月　報恩感謝

照るにつけくもるにつけて思ふかな　わが民草の上はいかに

と

7 創立記念日（五月三日）

新緑の香り漂ふ朝の校庭である。戯れ遊ぶ一千三百の兒童の面も、この日は殊に輝やいて見える。我等の學校の誕生日だ 走る足どりも自然と輕く、友を呼ぶ聲も五月の陽光のやうに朗らかである。と、ベルが鳴りひびく。騒然たる世界は一瞬にして深山の靜けさになる。朝禮と同じやうに、やがて奏でられるレコードの行進曲につれて、整然と並ぶ。學校長が登壇する。兒童の代表者が三歩前進して、

「お早うございます。」

と、凛とした聲がひゞく。全兒童は一齊に禮をする。それに答へて學校長も温顏を以つて

「お早うございます。」

と禮を返へすと同時に、前に並んだ職員の禮。

「これより創立記念式を行ひます。」

と指揮者の宣言がある。校旗が入場する。學校長は、全職員、兒童を率ゐて奉安殿の前に參進し恭しく最敬禮、全員之に倣ふ。揭揚杆高く國旗が揭げられる。學校長の式辭がある。明治六年の今月今日、蒼龍學校として創立せられて以來の本校歷史の大要を述べ、現在の校舍に學ぶ者に一段の覺悟を促すのである。校長再び登壇して力强く

「光輝ある歷史に鑑み諸子は深く本校を愛せよ。」

と宣すれば兒童は口を揃へて

「吾等はよく學び、よく勵み、健全なる校風を發揚し、一層我が校の名譽を輝やかさん。」

と誓ふ。次に創立五十週年記念に制定せられた佐佐木信綱作歌、青柳善吾氏作曲の校歌が歌はれる。

（一）

嬉し我等は　我が國の
歷史の上に輝もきて
尊き光示しつる
水戸の市民の一人なり
努め學ばんもろともに
つとめ勵まんいざ共に

（二）

朝夕仰ぐ　筑波山
高き理想に向ひつゝ
流れ豐けき那珂川の
たへせぬ努力續けばや
努め學ばんもろともに
つとめ勵まんいざ共に。

（三）

義公烈公次々に
興しまつれる後うけて
好文亭の梅の花
清き香を世にあげん
努め學ばんもろともに
つとめ勵まんいざ共に。

これで式は終り校旗は退場する。

8 教室環境

二十坪の同じ大きさ、そして向きも造作も全部同じ普通教室である。そこに統制をもつた室內環境がある。全校を通じて一定の部分と、學年に應じ學級に應じて工夫せられた部分とがある。教室內の環境といふと正面も背面も側面も只べた〳〵と作品やら何やら所狹きまで貼りつけて、何時、如何に活用するのか分らぬ展覽會場か、緣日の玩具店のやうなのもあると思ふと、反對に淸淡といふ美名の下に何物もなくて病院の廊下か監房のやうな感を與へるものもある。而もそれが同一の學校でその兩極端を見せられることがある。一人の校長によつて經營せられる學校ならば、そこにある統制は當然行はれるべきである。今、自分達のやつてゐる方法が最上のものとは思つてゐないが、次のやうなことを申合せて實施してゐる。

掃除用具の置き方は學校備付の箒木、塵取、はたきは背面の右側にかけ、バケツは學年所屬の水道流しの下に、ふせて置き、各個人の雜巾は机の右側の脚にかける。寒暖計は、冬季は背面塗板の左側に、夏季は右側にかけて、その室が、いかに寒いか、どの位まで暑くなるかを見る。正面の塗板の上には中央に皇紀を揭げて我國の悠久二千六百餘年に亘る誇りを抱かせ、その右に、偉人の肖像、左に級訓を揭げる。偉人は一年生に日本武尊（之は產土の神、吉田神社の祭神である）二年は東鄕元帥、三年は二宮金次郎、四年が義公、五年が烈公、六年が藤田東湖である。

更に塗板の兩側の壁には世界全圖と日本地圖とを揭げて、世界

第二週りし奏

に於ける日本の位置、日本に於ける郷土の位置を知らしめることに努めてゐる。背面黒板には月是、御製、週是の他に、行事解説や、學習の參考資料や、補充問題等を記す。その上の作品貼布板に圖畫、習字の作品を貼る。

その他は、各學級によつて工夫された環境が構成せられるのである。

第三　行踐の奏

一、天地正大氣

1　正氣歌

學校生活での最初に行はれる、團體的行であり皇民としての自覺を興へる目的の下に實施された朝禮を終つて、兒童は奉仕作業に依り淨められた校庭を、さわやかな朝の陽光を浴びながら、四列或は六列と學年毎に隊伍を整へ、擴聲機より流れ出る勇壯な行進喇叭の曲に合せて、堂々と正常歩の行進が各自の昇降口へ受持職員と共に進んで行く。正しく履物を整頓して教室へと順次に入場する。教室に入つた兒童は、受持先生との間に、今日一日をしつかりやりますといふ意氣を眼にこめ挨拶が靜かに交され、無言の裡に着席して默想を始める。しばらくすぎると朗々と響く藤田東湖先生作の正氣の歌、

第三　行踐の奏

天地正大の氣
秀でては不二の嶽となり
注いでは大瀛の水となり
發しては萬朶の櫻となり
凝つては百錬の鐵となり
蓋臣皆熊羆
神州誰か君臨する
皇風六合に治く
世汚隆なきにあらず
乃ち大連の議に參じ
乃ち明主の斷を助け
中郎嘗て之を用ひて
清鷹嘗て之を用ひて
忽ち揮ふ龍の口の劍
忽ち起る西海の颶
志賀の月明かなるの夜
芳野の戰酣なるの日
或は鎌倉の窟に投じ
或は櫻井驛に伴ひ
萃然として神州に鍾まる
巍々として千秋に聳ゆ
洋々として八洲を環る
衆芳與に儔ひし難し
鋭利鋒を斷つべし
武夫盡く好仇
萬古天皇を仰ぐ
明德太陽に侔し
正氣時に光を放つ
倪々瞿曇を排す
餓々伽藍を焚く
宗社磐石安し
妖僧肝膽寒し
虜使頭足分る
怒濤胡氣を殲す
陽に鳳輦の巡ぐるとなし
又帝子の亀に代る
憂憤正に悁々たり
遺訓何ぞ慇懃なる

或は天目山に殉じて　幽囚君を忘れず
或は伏見城を守りて　一身萬軍に當る
承平二百歳　斯期常に伸ぶるを獲たり
然れども其間屈するに當つては　四十七人を生ず
乃ち知る人亡しと雖も　英靈未だ嘗て泯びず
長へに天地の間にあり　凜然彝倫を叙す
孰れかよく之を扶持する　卓立す東海の濱
忠誠皇室を尊び　孝敬天神に事ふ
修文と奮武と　誓つて胡塵を清めんと欲す
一朝天歩艱み　邦君身先づ淪ず
頑鈍機を知らず　罪戾孤臣に及ぶ
孤臣寡薄に困しみ　君寃誰に向つてか陳べん
孤子墳墓遠かる　何を以てか先親に謝せん
荏苒二周星　獨り斯の氣の隨ふあり
嗟予萬死すと雖も　豈汝と離るゝに忍びんや
屈伸天地に付す　生死又何ぞ疑はん
生きては當に君寃を雪ぐべく　復た綱維の張るを見ん
死しては忠義の鬼となり　極天皇巷を護らん

それは永久に朽ちることのない國民的詩歌であり、藤田東湖先生の日本精神を藝術的によく表現して居るものである。此の漢詩は先生が隅田川の邊にあつた小梅の別邸に幽囚の身となつて居られた時に、水戸に在す老母を偲び故郷の山河を想ひ、流れの豐かな那珂川や、老杉聳える御城、梅花馥郁と香る梅香の住宅、南に靜かな仙波湖、緑ヶ岡等と次々に水戸の里に思を馳せ想を巡らしてゐる中に、天地自然の間にうごめく大偉力、即ち天地正大の氣を感じて一氣に此の清麗雄大な一大漢詩を作り上げられたのである。

雄大にして正義に滿ち、強く明るくして柔和、而も熱と愛とを兼ね備へた力、此の正氣の集る所は即ち神國日本であり、正大の氣が滿ち溢れて日本の威力は永遠に輝き續くといふのである。此の正大の氣は即ち秀でては不二が嶽となり、注いでは大瀛の水となり、發しては、萬朶の櫻となつて其の香を誇つて居り、一度褒れば百錬の鐵となつて露ほどばしる秋水は蕊を斷ち、人に宿れば古來より忠勇義烈なる武士を生んだと歌つてゐる。此の正氣をあくまでも護り通して國家永遠の發展に盡力する者は即ち水戸の地、齊昭公であるといふ考の中に國事を憂いて居る樣な感じに打たれる。これは初等科六年兒童の學級朝禮に際して朗誦する水戸學文獻の全文であるが、此の全文を毎朝朗誦するのではなく、數節に分けて一年間を通し全文の朗誦を終り、郷土先賢の殘された文獻に親しみ、其の思想に觸れて郷土の認識を深め、水戸人としての誇を高く持ち續けさせることを期してゐる。

次に本校に於て實施して居る學級朝禮の型を示してみる。

2　學級朝禮

目的　學習を始むるに當り、師弟一如郷土の傳統的精神を體し、剛健なる級風の樹立を圖る。

方法　毎日行ふ。授業前五分。

(一)　敬禮
(二)　默想
(三)　水戸學文獻朗誦（朗誦資料後記）
(四)　訓話　週是　反省　一日の出發として
(五)　敬禮後授業開始

3　朗誦資料

水戸學文獻の朗誦資料は勿論學級朝禮の場合にばかりに止めるものではなく、少年團訓練の際の曉天修養會、興亜奉公日、愛國訓練等の場合其の他機會ある毎に朗誦するのであるが、學級朝禮の場合に於ける學年配當を左に掲げて見よう。

★初等科一年　烈公作　要石の歌

行末もふみなたがへそあきつ島
大和の道ぞかなめなりける。

★初等科二年　佐久良東雄の歌

大君につかへまつれとわれを生みし
わがたらちねぞたふとかりける。

★初等科三年　烈公作　弘道館の梅花に寄す

弘道館中千樹の梅
清香馥郁十分に開く
好文豈威武無しと謂はんや
雪裡春を占めて天下の魁

★初等科四年　義公作　梅里先生の碑陰並銘

先生は常州水戸の産なり。其の伯父病み其の仲夭す。先生夙夜膝下に陪して戰々兢々たり。其の人と爲りや物に滯らず事に著せず、神儒を尊んで神儒を駁し、佛老を崇めて佛老を排す。常に賓客を喜び殆んど門に市す。暇ある毎に書を讀めども必ずしも解するを求めず。歡びて歡びを歡びとせず、憂へて憂へを憂へとせず。月の夕花の朝、酒を汲んでは

意に適し、詩を吟じては情を放にす。聲色飲食其の美を好まず、第宅器物其の奇を求めず、有れば有るに隨つて樂胥し、無ければ無きに任せて晏如たり。蚤くより史を編むに志あり、然れども書の徵すべき稀なり、爰に搜り爰に聘ひ之を求め之を得。微遷するに稗官小說を以てし、實を摭ひ疑はしきを闕き皇統を正閏し人臣を是非し、輯めて一家の言を成せり。元祿庚午の冬累りに骸骨を乞うて致仕す。初め兄の子を養うて嗣と爲し、遂に之を立てゝ以て封を襲がしむ、先生の宿志是に於てか足れり。既にして鄉に還り、卽日飲を瑞龍山先塋の側に相し、歷任の衣冠魚帶を瘞め、載ち封じ載ち碑し、自ら題して梅里先生の墓と曰ふ。先生の靈永く此に在り。嗚呼骨肉は天命終る所の處に委せ、水には則ち魚鼈に施し、山には則ち禽獸に飽かしめん、何ぞ劉伶の餅を用んや。其の銘に曰く、月は瑞龍の雲に隱ると雖も、光は暫く西山の峯に留る。碑を立て銘を刻する者は誰ぞ。源光圀字は子龍。

★初等科五年　烈公作　弘道館記

弘道とは何ぞ。人能く道を弘むる也。道とは何ぞ。天地の大經にして、生民の須臾も離る可らざる者也。弘道の館、何の爲に設くるや。恭しく惟るに上古神聖極を立て統を垂れ、天地位し萬物育す。其の六合に照臨し、宇內を統御する所以の者、未だ嘗て斯の道に由らずんばあらざる也。寶祚之を以て窮り無く、國體之を以て尊嚴に、蒼生之を以て安寧に、蠻夷戎狄之を以て率服す。而して聖子神孫尙肯て自ら足れりとせず、人に取りて以て善を爲すを樂しむ。乃ち西土唐虞三代の治敎の如き、資りて以て皇猷を贊く。是に於て斯の道愈大に愈明かにして復尙ふる無し。中世以降異端邪說民を誣ひ世を惑はし、俗儒曲學、此を舍て彼に從ひ、皇化陵夷し禍亂相踵ぎ、大道の世に明かならざるや蓋亦久し。我が東照宮撥亂反正尊王攘夷、允に武允に文、以て太平の基を開き、吾が祖威公實に封を東土に受け、夙に日本武尊の人と爲りを慕ひ、神道を尊び武備を繕め、義公繼き述べ嘗て感を夷齊に發し、更に儒敎を崇び、明倫正名以て國家に藩屛たり。爾來百數十年、世々遺緖を承け恩澤に沐浴し、以て今日に至れり。則ち苟も臣子たる者、豈斯の道を推弘し、先德を發揚する所以を思はざる可けんや。是則ち館の設けられし所以なり。抑も夫の建御雷神を祀れるは何ぞ。其の天功を草昧に亮け、威靈を鹵土に留むるを

以て、其の始に原き其の本に報い、民をして斯の道の繇つて來る所を知らしめんと欲すれば也。其の孔子の廟を營めるは何ぞ。唐虞三代の道此に折衷せらるゝを以て、其の德を欽し其の敎を資り、人をして斯の道の益大に且明かなる、偶然ならざる所以を知らしめんと欲すれば也。

嗚呼我が國中の士民、夙夜懈らず斯の館に出入し、神州の道を奉じ西土の敎を資り、忠孝二无く、文武岐れず、學問事業其の効を殊にせず、神を敬ひ儒を崇び偏黨ある無く、衆思を集め群力を述べ、以て國家無窮の恩に報ぜば、則ち豈徒た祖宗の志鑒ちざるのみならんや。神皇在天の靈亦將に降鑒したまはんとす。斯の館を設けて以て其の治敎を統ぶる者は誰ぞ。

權中納言從三位源朝臣齊昭也。

★初等科六年　藤田東湖作　正氣歌（前揭）

二、勤王之倡首

1　彰考館文庫の前にて

皆さんは五月十二日に常磐神社の例祭で學校代表として參拜致しました。あの時仙波湖畔からもはつきり見えた大職について、よく見ておくやうに話しておきましたが、あれに大書してある字を覺えてをりますか。

「洵是勤王之倡首」他の一旒には「實爲復古之指南」

と、ありましたね。

今日は此の幟の言葉を中心として水戸藩の勤皇のことについて話を進めて行きませう。

此の文字はおそれおほくも、明治天皇の詔から出たものです。明治三十三年十一月、明治天皇常陸笠間に行幸あらせられた時、特に勅使を瑞龍山なる義公の墳墓に遣はされ正一位を贈らせ給うたのであります。其の時の詔に

夙ニ皇道ノ隱晦ヲ慨ヒ深ク武門ノ驕盈ヲ恐レ名分ヲ明ニシテ志ヲ筆削ニ託シ正邪ヲ辯シテ意ヲ勤懲ニ致セリ洵ニ是レ勤王ノ倡首ニシテ實ニ復古ノ指南タリ朕適々常陸ニ幸シ追念轉々切ナリ更ニ正一位ヲ贈リ以テ朕ガ意ヲ昭ニス

と、仰せられました。

誠に義公樣こそ勤王の倡首復古の指南でありました。

義公樣は、皆さんも既に承知の通り十八歲の時、史記の伯夷傳

を讀んで感奮し「後の人を感動させるのは史書があるからだ、我が國民の精神を奮ひ起させるのにはどうしても我が國の歴史を編まなければならない」と、固い決心をしました。それ以來火の出るやうな勉强を續けられ、此の氣持は、年のたつにつれて强くなつて行き、三十歳の年に江戸駒込の邸内に史局を設けました。此の時、確かな歴史を作りたいといふ事を學者達に話しました所、學者達はその仕事のむづかしいことを知つてゐますから、誰一人賛成しません。しかし、立派な日本の歴史をつくつて、お國の爲に盡さうといふ考へは、そんな反對に遭つてもびくともせず、すぐ作ることにとりかゝつたのであります。

寛文十二年、義公樣が四十五歳の春には、史館を小石川の邸にうつし、彰考館と名づけました。此處にある彰考館といふ額の文字は御自分でお書きになつたもので館の規則なども自分で作りました。館は屋敷の中で一番眺めのよい所に建て、又版下を書くものは、特別に手を大切にしなければならないからといつて、雨の日も傘を持たせなかつたと傳へられてゐます。此の仕事に從ふ學者は、勝れてゐるものなら、どこの者でもかまはずに召抱えて、出來るだけのもてなしをして調べさせたのでありました。水戸家は三十五萬石の大藩でありましたが、其の三分の一を大日本史をつくる費用に當てたのであります。

なぜ義公樣はこんな熱心さを持ち、色々の困難に堪へ、澤山の費用をかけて大日本史をつくることに力めたかといひますと、それは正しい歴史を作ることによつて、日本の眞の姿を世の人に知らせ、くもつてゐる日本を正しい姿にかへさうとしたからであります。即ち大義を明かにし名分を正す爲です。大義とは、天皇に對し私共國民がつくさなければならない義務であります。名分とは天皇は天皇として上におはし、私共國民は國民として下にあり、天皇の恩澤を受けてゐるのであるから其處の分限を間違つてはならないといふ事です。德川幕府のやうに國民であつて天皇に絶對服從しなければならないのに、政治上の實權を握つてゐるといふやうな事は、我が尊い國體に反するものでよくない事であると、それとなしにわかるやうに書かれたのであります。

この尊い精神は代々の藩主にうけつがれ、三百五十年後の明治三十九年に、三百九十七卷といふ前古未曾有の大歴史が出來上つたのであります。

大日本史は出來るのに從つて全國の人々に讀まれ、義公樣の心は人々の胸に生き、尊皇論をよびおこし、明治維新をなす大きな力となつたのであります。

實に義公樣こそ勤皇の倡首、復古の指南役と申すべきでせう。

義公樣はかうして王政復古への源ともなる、立派な大日本史の基を御つくりになりましたが、更に其の尊皇の精神を、水戸家累代の覺悟として子々孫々に傳へる方法をとられたのであります。而し、それは一子相傳とも言ふべき極祕のものでありましたから、容易に他に知られなかつたのでありますが私達水戸にすむものとしては是非知つておかなければならない大事な事です。

それは「武公遺事」や「德川慶喜公回顧錄」等によつて其の事實を知ることが出來るのです。

順序として武公遺事の方から申しませう。

武公樣は七代目の水戸藩主ですが、平生殊の外朝廷を御尊敬なされた御方です。或時景山公(烈公)を御呼びになり、「たとへいつ方の養子になるとも御譜代大名へは行かぬやうに心得るがよい何事か天下に大變が出來たならば譜代は將軍家に從つてゐるので、天子樣に對し奉り弓をも引かぬともかぎらぬからである。我が水戸藩は將軍家に如何程御尤のことがあつても天子樣に對し奉り弓を引くやうな時には、少しも將軍家に從ふことはせぬ心得である。いか程將軍家の方に道理があつても、天子樣に向はれては不義のことゝなるからである。」とさとされた。之を聽かせられた景山公は「それでも公には常に將軍家を御敬ひ遊ばされて毎月の登城も缺かせられないのはどうしたわけでありますか」と質問せられると、公は答へて「將軍は天下の政を執り日夜御心のひまがないから、下民も其の德に服して背かないのであるが、實をいへば若しも漢土であれば將軍家に革命の起るべきであるが、天子樣を敬ひ遊ばされてゐるから我等も將軍家を敬ふのである」と申されました。

又、「開國五十年史德川慶喜公回顧錄」の中に次のやうな一節があります。

『公(慶喜)二十歳の時、父の齊昭卿密に諭さるには、「我が水戸家には義公以來の祕訓あり。萬一他日幕府の天朝と事を構ふる不幸あらば、我が子孫は大義滅親といふ語を能く〳〵考へて、覺悟を定めざる可らず。是れ水戸家代々の遺訓にて、男子の丁年になりし時に諭す法なり」と仰せられしとなり。』

慶喜公は此の傳統の尊皇精神から、獨斷で大政を奉還し、國内の亂を一部分に止め、歐米諸國の手を出すすきを與へず、皇國を實際に護つたのであります。

慶喜公の大政奉還に就いて伊藤博文公が次のやうな質問をいたしました。

「維新前、德川家が恭順の事を決するに當つては中々容易の事ではなかつたらうと思ひます。しかも天下の諸大名の中には佐幕論者も少くなく、殊に旗本八萬騎の中には祖先以來十五代も繼承して來た政權を、むざ〳〵投げ棄てるべきではないといふ論もかなり多かつた事と思はれます。其處へ他の一方の薩長土肥の聯合は其れ程強い團結ではなかつたのであります。從つて幕府の勢力が昔の樣に強くはないとしても、之を倒すことは容易の事ではなかつたのであります。然るに此の時に當つて閣下は其の威力を示さうとはせず、大阪から江戸に歸るや謹愼して恭順の意を示し、更に水戸に閑居したのは如何なる意見があつたのでありますか。」

此の時慶喜公は事もなげに之に答へました。

「拙者に於ては別に深い意見があつたのではない。拙者幼年の頃、一橋家に養子に行かうとする時、父齊昭が拙者を膝下に招いて、さても追々むつかしい時勢となつたから、今後開國、鎖國の議論などで、朝廷と幕府の間に如何なる事端が生ずるかも知れない。併し我が水戸家は祖先以來一意勤王を以て本旨として居るのであるから、假令朝廷に御無理の事があつても其の命令には何でも背く事は出來ないのである。若しも宗家が朝廷に對し奉りて矛を向けるやうな事があれば、我は朝廷の爲に宗家を滅ぼすの決心がなくてはならないのである。是れ我が水戸家の家法であるから、このことは斷じて忘れてはならない。と吳々も申渡された事が肝に銘じて常に忘れたことがなかつたので、あの當時に於ても唯父の訓言を體して、只管恭順したまでで別に其れ是れと思慮を勞した次第ではない」と。

義公樣が提唱し、水戸家の家訓である勤王の精神がどこまで徹底してゐたかは之で十分にわかるでせう。

2　臨地指導の遺蹟

（イ）弘道館　德川齊昭公が紀元二千五百年記念事業として設立した文武の修養道場。弘道館正廳、鹿兒神社、孔子廟、要石、弘道館記碑、種梅記碑、學生警鐘。

（ロ）偕樂園……之も齊昭公が造られたもので、衆と偕に樂しむために景勝の地を卜して營んだ庭園である。偕樂園記碑、好文亭、吐玉泉等

（ハ）常磐神社……義公、烈公を祀る別格官幣社。大砲、陣太鼓、彰考館文庫。

（ニ）水戸城跡……天守閣、武德殿、大手橋。

（ホ）笠原水源地……光圀公が作られた水道の水源地で、水道の出來方、浴德泉碑。

（ヘ）神勢館趾……齊昭公が砲術の稽古をされた所。神勢館、五丁矢場。

（ト）太田町……義公隱栖の地。西山莊、瑞龍山（水戸家累代の墓所）久昌寺。

（チ）湊町の反射爐。

三、先賢講話

同じ土地に生れ合はせたといふことによつて、鄉土の偉人は本當になつかしまれ、又親しまれるものである。殊にその人が偉大であればある程。

私たちの鄉土の偉人義公烈公お二人の輝かしい業績は、水戸の梅の香と共に、美しく强く人々の心を動かしてゐる。それはどんなものにも動かされない、尊重の大義によつて固められた心であつて、水戸にとつて、否日本の國にとつても何時までも忘れられない存在である。そしてそれは義公以來數百年の間、水戸の人々によつて受繼がれて、水戸學と言はれ、水戸魂と呼ばれて、今も我々の體の中に脈々として流れてゐる。

我々は義烈兩公の亡くなられた日にあたつて、この兩公の言行を語つては、その昔を偲ぶと共に、この大先輩の偉大な人格に觸れさせ、その心を子供等の魂に喰ひ込ませて、胸の中に眠つてゐる魂を目覺めさせ、心の糧とし、更にこの偉人に對する感謝と景仰の心を培つてゐる。それによつて賀實剛健、祖先に恥ぢないよい水戸人になると一しよに、よりよい日本人となつて、お國に役立つ人になるやうにしたいものであるといふ念願から、先賢講話として毎月の命日（義公樣は六日、烈公さまは十五日）に、朝禮後全校兒童に指導者が交代で、講話の配當表によつて、その生前の業績を語ることにした。講話は時間も短かく、內容もほんの一部分に過ぎないが、それでもこの偉人に對する兒童の關心は相當大きなものである。

1　義公さまのお話（六　日）

今日は義公さまの亡くなられた日です。

今まで先生方から義公さまの事について、いろ〳〵なお話を、御うかゞひ致しましたね。私たちが義公樣からうけた御恩は、數

へきれない程ありますが、今日はその中の一つについてお話致しませう。

下市と呼ばれたこの邊一帶は今ではりつぱな町になつてゐますが、義公さまのお父さまの頃は大てい田や沼で人が住めない所でした。そこで、この低い田や沼に土を入れて埋立てて町を作つたので、今のにぎやかな本町も昔は田町と言はれたのです。そんな風に、低いじめ〳〵してゐた所ですから、井戸を掘つても飲水になるきれいな水が出ませんでした。そこでやむを得ず、吉田の溜地を使つて小さな水道をつくりましたが、それは水が少ない上に、大雨が降ると、千波湖の泥水や、近ぐの下水等が、水道の中に流れこんでしまつて飲めなくなつてしまふので、その頃の人々は本當に水に苦しみました。

義公さまは、この事をおきゝになられて、何とかしてこの人々の苦しみを除いてやりたいとお考へになつて、お殿さまになられた次の年に、望月五郎左衛門といふ人に言ひつけて、下町に水道をつくることを御命じになられました。そこで望月五郎左衛門は平賀勘右衛門を選んでこの計畫を立てさせることになりました。さうして、笠原不動谷の水を引くのがよいといふことにきまりました。

その年のうちに仕事は始められました。今から約二百八十年前のことで學問もまだ進んでゐないその頃にとつては、本當に大工事でした。

いろ〳〵な苦心に打勝つて次の年に出來上りました。笠原から十町目まで水道の長さ約三千七百九十五間（七二四五米）これにかゝつた人數は二萬五千三百人、お金は約五百五十兩でした。

今のやうな鐵管もなく、電力もないその頃のことですから、さうしたものの代りに、岩樋を使ひました。備前堀を越えるところには青銅管を用ひ、町の中は木樋と竹樋とを使つて、各家に水を送ることにしたのです。そして各家ではそれを汲上げるやうになつてゐました。

この樣にして、二年間の日數と、二萬人の人の力と數百兩のお金とによつて、義公さまのお考へが、實際に出來上りました。今の世の中のものと比べると、りつぱではないかもしれませんが、それから後、水戸の下町一帶の人々は飲み水に不自由をすることがなくなりました。旱天にもまた、大雨があつてもその爲に泥水を飲まねばならぬといふ樣な事はなくなりました。

これから後二百數十年の間下町の人々はこの水によつて育てられて來たのです、この義公さまのありがたいお情の水によつて生

きて來たのです。

この水道は昭和七年全市水道が出來てそれと合同してしまひましたので、今では那珂川の水と一しよになつてしまひました。しかし笠原不動谷の清水はなほ今も湧きつづけてゐます。この清水のわき出る近くに今、「浴德泉碑」が建つてゐます。皆さんも大てい、御存知でせう。この碑は水戸の人たちがこの水によつて何時までも義公さまの御德に浴してゐることを感謝して建てられたものであつて、この字を書かれたのは烈公さま、文は幽谷先生の撰です。

このやうに私たちの生活にまで、いろ〳〵と御心配して下さつた義公さまのお心に對して感謝すると一しよに、この御恩がへしの爲にも、私たちはます〳〵よい人になる樣一生懸命につとめなければなりませんね。

2　烈公樣のお話（十五日）

私たち水戸の人にとつて、他の人等に自慢してよいものの一つは、義公樣と烈公さまでせうね。皆さんは烈公さまが何時でも人々に儉約をすゝめ、又どんな時にも決して油斷なさらず、急に甲の檢査をしたり、また色々と忠義をつくす事を、常に教へてゐられたお話を、今までいろ〳〵おきゝしましたね。

今日はその烈公さまのお小さい時の事を、お話し致しませう。丁度今から百三十年程前の三月、暖かい春の光を受けて、野も山も美しい櫻の花が、一ぱいに咲きこぼれてゐました。この美しい江戸の春、小石川の水戸のお殿さまのおやしきでは、りつぱな男の赤ちやんが、お生れになりました。丁度三月の十一日で此の方が名高い烈公さまでした。お父さんは武公樣と申し上げ、烈公さまはその三男で、お小さい時のお名前は虎三郎と申上げました。

烈公さまが丁度四歳になられた時の事でした。お父樣の武公さまは可愛いい虎三郎樣の爲に、乳母をやとふことにしました。そのことを聞いた虎三郎樣は、お父さまに向つて、

「私はおつきの乳母は無くてもよろしうございますから、その代りどうぞ、武士のおそばつきがほしうございます。」

と申されました。

普通の人とは變つたりつぱなお考へを小さい時から持つてゐられたといふことが、この一つのことによつても考へられますね。

その頃からもう虎三郎樣（烈公さま）は、武公樣に連れられて、お鷹がりのお供をなされました。毎朝、毎朝まだ暗い中に起きられて、提燈をお持ちになられて、お出かけになり、夕方空にお星

さまが一ばい輝く頃に提燈を持つてお歸りになられました。霜の眞白に置いた夜明け方や、骨の中まで沁み込む樣な冷たい風の吹く夜等は、手や足のあかぎれが大きく割れて、眞赤な血が流れ出ることもありますし、霜やけの出來た年は冷めたい風のためには れ上り、それが破れて、血の滴り落つることも一度や二度ではありませんでした。それでも烈公さまは、どこまでも文公樣と一しよに歩かれました。

どんな寒い朝でも必ず暗い中に起きて、氷を碎いてその水で顏を洗ひ、うす明るくなつた頃にはもう障子をきれいに開けて、勉强をなされたといふことです。

そんな風でしたから、大人になられてからお側の人々に

「子供の中に、こたつにもぐり込んでゐるやうでは大きくなつてからも、とても役に立つ樣な人にはなれない」

とよくおつしやつたさうです。

りつぱな殿樣が……どんなぜいたくもする氣なら出來る殿樣が、こんなにして暮されたことを思ふと、私たちは本當に恥かしい氣がしますね。

四歲におなりになつた頃から、お勉强をお母さまから教へて戴く事になりました。大へん學問がお好きでその上、一生懸命にはげまれましたので、驚く程學問も進みました。丁度五歲になられた或日の事です。お父さまの武公樣が「お歌の會」を開かれました。その時烈公さまも、お父樣のお側に來ていらつしやいましたので武公さまが、

「虎もよまぬか」（虎は虎三郎君のこと）

と申されました。烈公樣はそれを聞くと、丁度「ほたる」といふ題でしたので直ぐに、

お庭の西行の月は光りけり
水にうつりて螢なりけり

と詠まれたさうです。西行といふのは小石川後樂園内にあつた西行堂のことです。四歲の頃に學問をはじめられて、五歲の時にはもう此の樣なりつぱな歌をつくられたのです。お生れつき學問にもすぐれていらつしやつたと共に、どんなに勉强にも骨を折られて熱心であつたかと云ふ事が、しみ〴〵と考へられますね。

そんな風ですから、七八歲になられた時には、會澤正志齋等の立派な先生について、益々熱心に學問をされました。

烈公さまはこんな風に熱心に勉强をされましたが、唯勉强たけでなく、武げいについてもすぐれてゐたお話がたくさん殘つてゐます。ですからお殿さまになられてからも、學問も武藝もよく出

來る立派な殿樣でした。だからこそ弘道館といふ學校を建てて、文武の道をはげまされたり、外國の船が來るときくとすぐに七十門もの大砲を幕府にさし上げることが出來たのです。小さい時のこの立派な行が大人になられて立派になれるもとになつたのですね。どうでせう、皆さんの中には烈公さまに負けた人があるでせう。私たちの祖先には、此の樣におえらいお方がいらつしやつたのです。私たちも烈公樣の樣に、そして烈公樣にもまけない樣な强い子供、よい子供になつて、お國に役立つ人になれる樣に心がけませう。さうする事がお國の爲でもあり、また烈公さまへのお禮にもなるわけです。

3　先賢講話配當表

（イ）義公講話配當表

月	題目	要項
四月	幼年時代	義公の誕生 幼年時代の風格 幼年時代の逸話……三歲の頃 七歲の時代の贈力……六七歲頃の才智
五月	少年時代 襲封	義公の武勇 乘馬、射撃の練習……十二歲の頃 義公の學問と襲封についての義理
六月	孝子節婦の表彰	孝子彌作　節夫やす 武文德門夫婦
七月	敬神崇祖 文武	靖定夫人の法要　神社に對する改革 源家の祖先を祀る 孔子の廟を造る
九月	殖産奬勵	久慈郡大野村海藻、魚類、貝類の繁殖 紙漉、殖林、水戸領内の並木
十月	笠原水道	水道設營の理由 水道の規模 水道設備についての逸話
十一月	節約	紙の節約 尾州侯の感激 衣服調度の質素
十二月	尊王	正月元旦の京都遙拜。家來を戒めた言葉 動使下向の時の事。 海川の建碑について
一月	大日本史	編修の動機　編修の目的 三大特筆について 編修の苦心と國民への影響
二月	西山莊	西山莊 西山莊に於ける日常
三月	薨去	其の日限りのお覺悟　凶兆現はる 哀傷の和歌 瑞龍山について
備考	詳細は郷土讀本義烈兩公略傳による。	

（D）烈公講話記事表

月	題目	要項
四月	幼年時代	誕生 公の學問才智 公の鍛錬
五月	武藝	少年時代の意氣 射撃練習
六月	倹素	綿服着用の令 烈公のお召物と夫人貞芳院 奥向の女中の奢侈遊を戒む 烈公の倹素　自ら馬を飼ふ
七月	武道の廢弛を一掃	近臣の大小刀を檢分した 甲冑の整備
九月	弘道館	弘道館創立の理由 弘道館に於ける文武の教 明治天皇皇后兩陛下の行幸と弘道館記
十月	追鳥狩と身體の錬磨	兵馬の野外調練 神太鼓 八景巡り
十一月	仁政	偕樂園　農人形をつくる 天保七年の飢饉の際の仁政 貧人堂……醫療
十二月	尊王	山陵の荒廢をなげく 元旦の京都遙拜 大日本史の校訂
一月	烈公と國防	當時の國の内外の情勢と烈公 反射爐の大砲鑄造　神勢館 蝦夷地の開拓
二月	安政の大獄	安政の假條約と公の反對 公の幽閉
三月	常磐神社	義公及び烈公の贈位神號 義烈兩公の功績の概略 神社について
備考	詳細は烈公略傳による。	

四、東湖先生墓前

秋とはいへ殘暑去りやらぬ九月二十三日、水筒を肩に五年生一同は受持先生を先頭に默々として學校の北一里の常磐原共同墓地に向つて歩む。谷中の新道を北に進んで十字路を右より北に入ると「藤田東湖先生墓入口」といふ指導標、こゝが常磐原共同墓地で多くの水戸藩士の墓碑が並んでゐる。そこを通りぬけると安積老牛（澹泊）の墓が見え最も北端に東湖先生父子の墓がある。一同は近くの老杉の下に少憩して後、襟を正し東湖先生の墓前に整列する。向つて右が幽谷、左が東湖の碑である。幕末の英傑、大義を明らかにし、人心を正すを以て任とせられた東湖先生の靈に花を手向け香を焚き恭しく合掌。そこで先生は次の様な講話をなされた。

「皆さん、今日は此の墓前で東湖先生のお話をいたします、東湖先生は今より百三十年前皆さんと同じく水戸下市の地に生れ名を彪、俗稱虎之介といひ後誠之進といはれました。これはその至誠を烈公様がお認めになつて賜はられた名です。六歳の頃から漢籍を勉強し又劍道も修業しました。水戸では義公様以來武士の子弟を集め考査をして學問を奬勵になつたのですが東湖先生は十歳の時から二十歳まで毎回此の考査を受け一回も休まなかつた程學問に熱心でした。又武藝も學問に劣らず上手で十四歳の時江戸に出て立派な劍道の先生について學びました。後二十歳で再び江戸に出て、前に習つた道場に行つて見ると門人中東湖先生に敵するものは一人もなかつたといふ程上達してゐました。先生は又槍術も立派な腕前でした。幽谷先生は常に東湖先生に「學問しても腐れ儒者になるな、武藝を勵んでも只の劍術遣になるな」と戒められてゐました。

二十四歳の時史館總裁代役といふ大日本史を編修する重い役目になられました。其の頃の藩主は烈公様で東湖先生を重く用ひられ水戸藩の種々な政治の改革をなされました。先生は烈公の信任が厚いのに感激し、一身を烈公に捧げあらん限りの力を振つて政治をなされたので水戸藩の軍備も風俗も他の諸藩の手本とも言はれる程になり、水戸の風は天下を動かすといふ様になりました。先生はあの肖像で見られる通り男らしい立派な容貌と一目で人の胸中を見拔く様な鋭い眼をもつてゐましたが、人と交つては至つてやさしく心に隔てを設ける様な事がなく少しでもすぐれた者があれば賞め、時には打とけてから〳〵と笑ひながら話をしたり詩などを作りかはしたりすることもあつたさうです。當時水戸の東湖といへば天下に鳴り響いてゐたものであるから、天下の志士などは大てい東湖先生をたづねて、意見を聞いたさうでかの有名な西郷隆盛公も東湖先生に學ばれたのだといふことです。」

先生はこゝで言葉を切ると生徒達は今更の様に東湖先生の墓碑を見つめ深い感銘の色を現はすのでした。先生は尙言葉をついで「其の頃烈公様は盛んに尊王攘夷を唱へ隨分變つた思ひ切つた政治をなされたので、世間ではこれを誹る者もありました。そして遂に烈公様は幕府から謀叛の疑を受け江戸に召されま

した。其の時東湖先生は病氣で休んで居られたのですが直に公に從つて水戸を出發しやうとしました。多くの醫者たちは今度の旅を危んで引留めようとすると先生は『私は死さへ避けようとはしないのだ、まして此の位の病氣は何でもない』

と病をおして母や妻子に別れを告げ道中四日の間わづか二三椀の飯を食したきりで江戸に着いたのでしたが、その日から東湖先生は烈公樣と別れ〳〵に舊慣の身となつて仕舞つたのでした。先生は感慨無量の餘

「明らけき君にたぐへて徒に世を思ひ來し身ぞおほけなき」

「思ひ來しそのあらましは空しくて君をかきはに祈る世ぞうき」

と詠まれました、又皆さんの知つてゐる回天詩史は此の間に書かれたのです。さあ一緒に朗誦いたしませう。

三たび死を決して而して死せず　二十五回刀水を渡る
五たび閑地を乞ふて閑を得ず　三十九年七處に徙る
邦家の隆替偶然にあらず　人生の得失豈徒爾ならんや
自ら驚く塵垢の皮膚に盈つるを　猶餘す忠義骨髓を塡むるを
縹渺定遠期すべからず　丘明馬遷空しく自ら企つ
苟も大義を明かにし人心を正さば　皇道奚ぞ興起せざるを患へん
斯の心蒼穹して神明に誓ふ　古人云ふあり艱れて後已むと

朗々と高く低く唱和する聲は老杉にこだまして、東湖先生の面影を髣髴たらしめる、尙先生は言葉を續け、

「忠臣は孝子の門より出づ」東湖先生は君に仕へて忠愛の誠を捧げたばかりでなく父母に仕へても亦孝養を怠らなかつた。江戸にあつて文武の修業の時父幽谷の病危篤の報を受けると晝夜兼行で水戸に歸られた。歸つて見れば幽谷は既に亡くなられてゐたのです。先生は悲しみの餘り殆ど氣が狂つたやうであつたといひます。安政二年十二月二日の夜江戸に突然大地震が起つて忽ち火事を起し死んだ者が二十萬人も出た事があります。此の時先生は小石川の家に居られたが壁が崩れ棟が落ち鳴動がはげしいので母をたすけ庭に出られた。母は『火の用心』が惡いといつて再び家に入られた。先生は『あぶない』と云つて母を助けようとしたが時既に遲く鴨居が落ちかゝつた。そこで大力の東湖先生は兩手をつき肩で鴨居を支へ、母を庭に投げ出されたが又もや一きは強い震動のため先生は遂に最後をとげられたのでした。此の地震であの戸田忠太夫先生もなくなられたので烈公樣は左右の手を失つた樣であると悲しまれ又

孝明天皇も「朕も亦之を惜む」と仰せ遊ばされたといひます。東湖先生は時に年五十歳でした。

皆さん東湖先生の身はなくなられても其の尊王の精神は永久に燦として皆さんの胸に輝いてゐますね。さあ正氣の歌を朗誦して先生の墓前に私達の覺悟をお誓ひいたしませう。」

天地正大の氣……

以上は崇祖週間に於ける先賢展墓東湖先生の墓前に於ける行の大要であるが本校に於ては秋の彼岸七日を崇祖週間として敬神崇祖の觀念を涵養しその實踐を强調してゐる。卽ち週間行事として伊勢神宮遙拜・率安殿淸掃・學校揭示・佛壇淸掃・秋季皇靈祭講話・近親の命日調・各自墓參・戰歿將士墓參・年度內物故學友の展墓・先賢展墓等を行つてゐる。尙先賢展墓は藤田東湖先生の外に戸田忠太夫・安島帶刀・佐野竹之介・會澤正志齋・武田耕雲齋等について左の如き實際案によつて行つてゐる。

★先賢展墓のしほり（第四學年）

(一)　行く場所　酒戸村共同墓地、酒戸村にあつて藩主より賜つたもので水戸藩士の共同の墓である。學校から一、四粁、方向、東南……地圖を附す。

(二)　お詣りする先賢　戸田忠太夫、安島帶刀、佐野竹之介

(三)　戸田忠太夫　水戸の人で祖先は藤原氏である。父は忠之母は安島氏水戸第八代の殿樣哀公樣が御病氣が重くおなりになつたのであとつぎの御子樣がないので幕府から養子を迎へようとしました。忠太夫は大いに怒り哀公樣の御弟烈公樣が居られるのに他から養子を迎へる事がいけないことを申しのべました。又よい政治を行ひ特に學校を建てられたことやアメリカの軍艦が來た時海防の事などで本當に苦心なさいました。以下略

(四)　安島帶刀　戸田忠太夫の弟で、兄と共に烈公のお世つぎの問題で死を覺悟で骨折られました。時の幕府の大老井伊直弼と意見が合はず、安政の大獄にとらへられ切腹を命ぜられました。勤王の志が篤く烈公樣が殿樣になられてから共に尊王攘夷の事を御相談申し上げ實行しようと骨折つた人です……

(五)　佐野竹之介　烈公の小姓役、櫻田烈士の一人です、萬延元年三月三日同志と事をしとげてから幕府に「何の爲に櫻田で變を起したか」といふわけを書いて出した人です。重傷のため其晩死にました。お墓石のわきに歌が彫つてあります。竹之介の作つた歌です。

「櫻田の雪にかばねをさらすとも　何たゆむべき日本魂」

★先賢展墓のしほり（第五學年）前出につき略

★先賢展墓の栞（第六學年）

(一)　會澤安先生　綠岡村千波原本法寺墓地

會澤安先生は水戸の藩士で、字は伯民、恒藏と言ひ、正志齋又は愈齋と號して烈公樣に仕へた大學者でした。先生は天明二年約百五十年前五月二十五日に水戸の南、谷に生れ父は泰敬と言ふ方でした。幼時より非常に落付いた又豪氣な人で平常遊ぶ時にも他の子供と異り、戰を好んで又自分はいつも其の大將となつてゐた。先生は十歲の時其の頃有名な藤田幽谷先生の門に入づて學問を修めた。その間にも先生の才氣のひらめきは人々を驚かした。――或時の事である、幽谷先生の所に藩生君平が訪ねて來たことがある。其の時君平は安を見て非常に驚いたといふことである。――幽谷先生の所で努力すること數年遂に彰考館の寫字生となつた。かうして段々出世すると一緒に父母の孝行もよくした。

文化元年（百三十五年前）二十三歲で水戸藩主の侍講となつて藩士の子弟の教育に當られた。此の時に烈公さまも會澤先生の教をうけられたのです。其の時烈公さまは五歲でしたが、會澤先生を非常に尊敬しておいでになられました。他のお子樣も同じでしたが烈公樣は特別でした。そうして會澤先生はこれから十七年間烈公樣の教育に當られました。かうして學問上大功があつたのですがそればかりでなく政治上にも大手柄を立てました。

○英國人がひたちに來たとき　○弘道館記を作るとき。

其の後藤田幽谷先生がなくなつてからは、天保二年に彰考館總裁となつて大日本史編纂（大日本史を作ること）の事に從事して非常に努力されました。其の後文政八年四十四歲の時に「新論」といふ本を著して自分の考へを世の中に出されました。この本は會澤先生の考をのべられたもので尊王、國防の事を書かれたもので全國の志士は爭つて之を讀みました。更に恐れ多いことに　孝明天皇の天覽の榮を賜りました。また　明治天皇に此の原稿をさし上げました。こんな偉い學者でしたから藤田東湖先生でさへも先生の前では凡て遠慮されたそうです。文久三年七月十四日八十二歲でなくなられました。その後明治四十二年四月、正四位をおくられました。

（二）武田耕雲齋　市外綠岡村見川

武田耕雲齋は跡部正續の長子として享和二年生れ（約三十年前）大きくなつてから宗家の武田正房のあとをついで、本名を武田彦九郎正生と言ひ、後に伊賀守となり耕雲齋と號した。二十九歲の時藩主相續問題が起つた。此の時彦九郎は同志の者と相談して骨を折り齊昭公が藩主となりました。さうして烈公に仕へて烈公の志をうけ、尊王愛國・尊王攘夷の精神の非常に強い武士でした。天保九年に烈公樣が弘道館をおつくりになつた時には彦九郎は非常な苦心をして計畫を作つたりしました。そして出來上つてからは此處の武場係として學生に武術を教へることになりました。弘化元年烈公樣が幕府から謹慎を言ひつけられた時に、何とかして之を許していたゞかうと骨を折つたがかへつて自分が幽閉されて仕舞つた。而し又許されて政治にあづかるやうになつた。安政六年幕府は烈公樣が尊王攘夷を言つたので幽閉して仕舞ひました。其の時には藩主の慶篤公の命で水戸藩が亂れないやうに守りました。其の後烈公樣がなくなられてから後も尊王心は益々固く何とかして之を實行しやうと思ひました。文久三年には慶篤公に從つて京都に入つて御所をお守りする役をつとめました。その頃水戸では尊王攘夷に贊成する人と幕府につく人と二つに分れました。

尊　王……武田耕雲齋、藤田小四郎等……天狗派

幕　府……市川三左衛門……諸生派

そして藤田小四郎達は幕府のやり方や諸生派のやり方を怒つて筑波山で軍を起しました。此の時耕雲齋は江戸に居りましたが水戸に居た諸生派の市川はこれを滅すと一緒に小四郎と同じ考へを持つた耕雲齋を捕へて水戸におし込めてしまひました。その後耕雲齋は兵を起して市川方と戰をしましたが敗れたので京都に居られた慶喜公に訴へやうと京都をさして出發しましたが途中加賀の國で捕へられ敎賀で首を斬られることになつて仕舞ひました。誠忠の志を大君におしらせすることも出來ず、時に年六十二歲。辭世に

咲く梅も風にむなしく散るとても
にほひは君のそでにうつらむ

後朝廷から正四位をおくられました。

五、農人形の歌

朝な夕な飯食ふごとに忘れじな
惠まぬ民に惠まるゝ身は

農人形の歌は水戸藩主烈公德川齊昭卿（第九代）が、或時侍臣に對し、「古より賢君は民を見ること、猶慈母の赤子におけるが如しと言へり。されどわれらの見る所はこれに異り、百姓は却つて我が乳母なりと思ふ。われらは百姓に向ひて何等の憐を垂れざる

に、百姓はわが爲に命を繋ぐべきものを與へる。其の恩や乳母と何の擇ぶ所あらん」と、仰せられ、且つ其の述懷として示されたものであるといふ。農人形は、烈公の創作した農夫の人形であつて、別に御百姓碌と呼ばれる處のものである。烈公は自ら黃銅に依つて農夫の像を鑄造し、常に之を食膳の上に置き、食事毎に必ず最初に初穗の意味で椀中の御飯を其の像に供へ、後に箸を下すのが例であつたといふ。之は農を勸め、民を愛し、兼ねて五穀の恩を謝する心より出たものであらう。けれ共農人形は神體でも佛體でもない。又何等信仰の對象でもなく、然も一般社會に公表されたものでもない。只だ僅かに逸話的に傳つて居るに過ぎない。文久元年に成つた「烈公行實」の中にも更に載錄してないので、其の創作が烈公の何歲の頃であるか判然としない。最も信頼し、準據せねばならない資料は烈公の第十八子昭武公（第十一代）の母君に當る萬里小路ちか子刀自の手に成つた農人形記である。其の全文は左の樣に書かれてある。

いはまくもかしこき、

我が烈公の御うへはよにあまねくしられ給へるが中に、まだいとわかう、おはしましゝほどより、ことに民のなりはひを深く御心にしめておもしけるより、銅もてこれなるみたからのかたを鑄さしめ給ひ

朝な夕ないひくふごとにわすれじな
めぐまぬ民に惠まるゝ身は

かくよませ給ひて、御ものの基にすゑさせたまひ、まづはつほをば是に給ひて後にぞ、御みづから物したまひき。斯くして君たちの生ひいで給へるごとに、御ものまゐりそむる日より必これを御敎のはじめとはし給ひしをおのづから世にも聞えていとかしこき御いつくしみのほどを慕ひたまへるおんかたがた、又下がしもに至りてもおなじ心にしたひまつれる輩らの、多くなりもて行くにつけても鑒山の君銅の形を其のまゝすゑものに、御手づから調ぜさせ給ひ、をりにふれて、たまはすことの屢々なるに此の故よし記るしおかずば後の世に至りて、もて、遊び物の如くなりなむも、はかり難ければ、このみたからにそふべきことをと人々のぜちにいはるれど、おふけなきわざなれば、あまたたびいなび聞ゆれど、ゆるしなければ、つたなき詞もて書いしるすはまつ戸定山の常磐の蔭に年經てすめる。

萬里小路ちか子

之は最も信頼しなくてはならない農人形の由來記であるが、之に依つても農人形の創作が烈公の何歲頃であつたかは判然してゐない。唯「まだいとわかうおはしましゝほどより、ことに民のなりはひを深く御心にしめておもしけるより、銅もてこれなるみたからのかたを鑄さしめ給ひ」とあるばかりで、何歲位の時とも何年頃とも明示してはないのであるが、水戸藩資料（別記上）に依つて見ると、大體本年（昭和十六年）より約百十餘年前烈公の襲封前二十八九歲の頃の創意であることがうかがはれる。此の農人形を製作された烈公の精神は前にも述べた樣に、天下に公表されたものではなく、謂はゞ家庭的私的感恩の對象物であつたらしく考へられるが、それは烈公自身が國家國民に對する謝恩の發露と見られやう。萬里小路ちか子刀自の農人形記の中にも「此の故よし記るしおかずば後の世に至りて、もて遊び物の如くなりなむも、はかり難ければ」とある樣に、單なる、もて遊び物でない事は事實である。烈公が私かに、當時の國民が遊惰安逸に流れる惡風を矯正し、國民をして我が建國の大精神に甦らせ、國民的信念を強固にする爲の垂範實踐であると思はれるのである。今日の敎育では稍もすると生活の多忙にまぎれて、食事に對する作法感謝を忘れ勝ちの傾向がないとは言へない。此の弊風を矯正し、報恩感謝の念を涵養し、烈公の意圖の存する所を充分に發揮する事、言ひ換へると建國日本精神の根底を培ふことであり、國民學校の進むべき道であると信ずる。本校に於ては、左に掲げる樣な型に依つて食事訓練を實施して居る。

★食事訓練

目的　師弟晝食を共にし食事の作法を敎へ、食物への感謝の念を高める。

方法　（一）口を嗽ぎ手を洗ふ。

（二）食事用意……包紙を四つ折にし其の上に辨當を置く。箸は手前、湯呑みは右向側へ。

（三）默　想……心を落ちつけて食前の感謝。

（四）朗　誦……「朝な夕な飯食ふ毎に忘れじな
めぐまぬ民に惠まるゝ身は」

（五）挨拶「戴きます。」蓋を取り向ふ側に置き箸を取る。左手は辨當にそへる。

（六）攝　食……無言、充分に咀嚼。辨當箱は下に置いたまゝ左前よりいたゞく。全部終るまで靜かに。

（七）挨拶「御馳走樣でした。」

（八）說　話……靜かに話して聞かせる。

（九）默　想……食後の感謝。

（一〇）退　出……靜かに順序よく。

學校生活では僅かに一日一回の會食ではあるが、此の機會を捉へ和やかな雰圍氣の中に兒童を直接に指導し、吾々の生命を繋ぐ米粒は一粒一粒でも、其の源は皆天祖の賜であり、豐受大神の御惠に依るものであることを知らせる。更に之を學校ばかりの食事訓練に終らせず、丁度烈公が御子達近侍の臣奥女中等まで教訓の例を示されたやうに、之を家庭教育に及ぼし、兒童を通して家庭に居らるゝ父兄母姉達にも是非共留意すると同時に、勵行して戴きたいとつとめてゐる。

六、時局に備へて

1　慰　靈　祭

「本日茲ニ學區内今事變戰歿勇士並ニ物故職員兒童ノ英魂ヲ請シ慰靈ノ祭典ヲ執行スルニ方リ敬ミテ白ス」

阿内校長の莊重な祭文、滿場寂として聲なく、祭壇中央に安置された勇士の面影はさながら生けるが如く千餘の參會者たゞ嚴肅敬虔なる瞑折、祭文は續く、

「故陸軍中尉飯島進殿初メ十八柱ノ諸命ニハ今事變ニ際シ大命ヲ奉ジ勇躍征途ニ上リ困苦ニ耐ヘ寒暑ヲ凌ギ各地ニ奮戰セラレシガ不幸敵彈ニ殪レ或ハ疾病ノ犯ス所トナリ、遂ニ興亞ノ人柱ト化サル、痛惜奚ゾ堪ヘン……（中略）……山崎先生、先生ハ教職ニ在ルコト三十有餘年、卓越セル識見ト豐富ナル經驗ニ基ヅキ、日夜教ヘテ倦マズ爲ニ教化大イニ揚リ兒童父兄景仰ノ的トナラル。夙ニ訓育ノ重大性ニ着眼シ、眞實教育ヲ標榜シ、訓育ノ刷新改善ニ努メ傍ラ天下ニ呼號シテ訓育聯盟今日ノ發展ノ基礎ヲ築カル。然ルニ惜シムベシ齡五十有一有爲ノ身ヲ以テ不幸二豎ノ犯ス所トナリ白玉樓中ノ人トナル。然レドモ先生ノ遺志ハ城東校傳統ノ精神ト施設トニ生キ昭和十五年八月訓育講習ニ於ケル施設發表ニ全國ニ訓育行ノ進ムベキ方向ヲ示シタル等永ク教化ノ源泉トシテ渇クル所ナシ。乞フ英魂永ク校運ヲ扶助セラレンコトヲ。　飯島君等九柱ノ君達ハ幼キ身ヲ以テ此ノ學ビ舍ニ入リ文机ヲ並ベタル友ト榮シキ明暮ヲ共ニスル中不幸病魔ノ襲フ所トナリ其ノ花ヲ見ズシテ神ノ國ニ散ル、何タル天ノ無情ゾヤ唯冥福ヲ祈ルノミ。護國ノ英靈ヲ想ヒ、山崎先生ヲ偲ビ、兒童諸君ニ思ヒヲ馳スル時感交々至リテ殆ド言フ所ヲ知ラス、在天ノ靈尚クハ髣髴トシテ來リ饗ケヨ。」

遺族參列者中より起る嗚咽の聲。春光麗らかに晴れ渡る昭和十六年三月十八日、學區出身支那事變戰歿勇士並物故職員兒童の慰靈祭に於ける祭主校長の祭文である。祭主の真情の情こもる祭文についで祭詞が市長、軍部代表、官衙代表、後援團體代表、最後に兒童代表の順に朗讀される、可憐な聲に眞心こめて、

「……前略……あの古い建物の竹隈校時代の最後の校長先生山崎先生には新裝なつた此の城東の新校舍にお迎ひすることも出來ず神去りまし、日頃慈しみ深いお父様ともお慕ひ致した先生を失ひ無情の天をうらんでも悔み盡されぬ思ひでありました。今先生の温容その儘の御寫眞の御前に立つとあのやさしいお言葉、朝禮毎に御訓示の數々が思ひ出されて今目の前に先生の懇なお論しを受けてゐる樣な氣がいたしてなりません。……中略……飯島君外八柱のお友達あれ程契り深き城東の學友として希望に滿ちて入學し雨の日風の日互に手をとつて助け合ひ、あの校庭で、此の講堂で共に學び共に遊び卒業の曉は皆手を携へて皇國の爲に御奉公を捧げんと堅く約してゐましたものを……中略……私達は必ず御勇士の遺志をついで勤王發祥の地水戸のため、大日本帝國のため一死報國の誠を捧げますことをお誓ひいたします……又山崎先生、先生には何時もおだやかに諄々としてお躾の手をのべ下さいました。そして竹隈校をして世に名ある學校にして下さいました。其の後代々の校長先生並に諸先生の撓まぬお骨折り、また私達の努力によりまして益々成績が上つてゐると聞いてゐます。全く先生の日頃の御努力の花が實を結んだと云へるでせう。先生どうぞお降り遊ばしてお喜び下さると共にこれからの城東をお守り下さいませ。……學友在天の靈よ私達は今後益々健康な心身の鍛錬に努め亡きあなた方の分まで働いてこの未曾有の非常時を突破する覺悟です。どうぞ私達を勵ましてお護り下さいませ。お願ひします。……下略

この純情こもる一言一句に遺族は勿論參列者一同唯感激の涙に暮れるのでした。次いで玉串奉奠あり感激裡に慰靈祭は終了するのである。

以上は今春擧行した慰靈祭の狀況の斷片であるが、本校に於ては昭和十二年度より毎年定期（春の彼岸入）に三月の學校行事として在郷軍人分會、兒童後援會其の他學區内各種團體の後援の下に學區内支那事變戰歿勇士並物故職員及現在々籍兒童中の物故兒童の慰靈祭を行ひ勇士の靈と亡き師友の靈を慰め、國民としての感謝の眞心を表し兒童の情操を醇化せんと企圖して施行してゐる

尚昭和十五年度に於ける慰靈祭の準備進行狀況を述ぶれば先づ

時局教育部主體となりて計畫の大體を決定しこれを原案として各種團體代表と協議會を開き期日及時間を決定し、慰靈の範圍卽ち今事變戰歿勇士並に物故職員兒童の調査を審議し、經營の大要及支出の方法、招待者の範圍、各係等について協議し此の決議に基いて具體的な各係の活動が始まるのである。各係は左のやうなものである。

事前		當日	
係名	任務	係名	任務
係員		係員	
庶務係	辨當、徽章、寫眞等、庶務一切	庶務係	庶務一切、寫眞撮影、禮狀
連絡係	遺族及神官各種團體との連絡一切	受付係	受付一切
文書係	案內狀、招待狀起草發送	案內接待係	案內接待一切
祭文係	祭文、祭詞の作製	祭壇係	祭壇作成及整理
會計係	會計一切	會計係	會計一切
名簿係	戰歿勇士、物故職員、兒童、遺家族及招待者の名簿作成	會場係	會場作成整理一切
		進行係	進行一切神官との連絡
		記錄係	會務記錄一切

右表の如き各係及其の仕事が決定すれば各係員は主任の下にそれ〴〵分擔の詳細な準備計畫をなし全校一體、否全町一體となつて當日に當るのである。尙當日の順序を左に揭ぐ。

慰靈祭次第（昭和十六年三月十八日於水戸市城東小學校）

一、一同着席
二、擧式挨拶
次　修祓
次　降神（一同起立磬折）
次　獻饌
次　齋主祭詞ヲ白ス（一同起立磬折）
次　祭主祭文（同　）
次　祭詞朗讀
市長
軍部代表
官衙代表
後援團體代表
兒童代表
次　玉串奉奠
祭主
遺族
軍人遺族（參列員列拜）
軍部代表（參列員列拜）
官衙代表（同　）
議員代表（同　）
學校長代表（同　）
新聞社代表（同　）
隣校學區代表（同　）
一般參列員代表（同　）
後援團體代表（同　）
職員代表（職員列拜）
兒童代表（兒童列拜）
齋主
次　昇神（一同起立磬折）
次　撤饌
次　祭主挨拶
三、閉式挨拶
四、一同退場

以上述べた點は時局に關する施設の單なる一項目に過ぎないのであつて、之を以つて時局教育の全統とするものではない。時局に處する教育とは活きた教育であり、凡ての教育活動の上に東亞共榮圈の確立、八紘一宇の精神が脈々と波打つてゐる教育が時局に對する教育であり、科學教育の振興も皇道歸一の教育も凡ては時局卽應の教育であると思ふ。換言すれば皇國の道の明示されてゐる教育勅語の趣旨に基づいて生々しい變動極りない時局特に戰時下の國民生活の上から教育がそれに卽應して行く教育活動が時局教育であると思ふ。此の故に本校に於ける時局教育は科學教育の重視、自發活動創造意慾の啓培に、國民精神の涵養に、旺盛なる體力の練磨に特に留意するものである。然してそれは施設とか經營とかの表面に現れるまでもなく教育活動全體を透してはつきりと其の精神が滲潤してゐるものでなければならないと思ふ。尙本校に於ける時局教育の施設として擧げるならば、

2　時局教育部の施設

（イ）時局室――1 時局に關する資料を蒐め（特に支邦事變に關するもの）之を陳列閲覽に便ならしめ、兒童の時局調査認識に資す、2 特に本學區出身英靈の肖像を全部揭出し常に報恩感謝の誠をいたさしむ。　主なる揭出物、教育勅語、宮城、神宮御寫眞、戰局地圖、寫眞ニュース、事變暦、戰地よりの便り、支那及東亞の繪畫、繪葉書、兵器類其の他世界の大勢に關するもの、尙時局に對する揭示は週單位に行ふ。

（ロ）時局講話――1 學校に於て每學期一回時局講話會。朝禮に於ける時局講話。3 學級朝禮に於ける時局講話。4 紙芝居による時局認識　主に童話會及時局室訓話に。

（ハ）映畫――1 講堂映畫會（每月一回）に於ける映畫は時局に關係あるものを選擇して行ふ。2 常設館に於けるニュース映畫の國策的な映畫鑑賞。

（ニ）繪畫・揭示・ポスター・標語――1 繪畫は東日寫眞特報及讀賣寫眞ニュースの購入揭示。　各學級の背面黑板揭示。學校揭示板の活用。4 學年揭示板の利用。　新聞及雜誌の切拔利用。6 標語並ポスター募集を年一回行ひ一層時局に對する認識を深め日常生活の規範たらしむ。

（ホ）時局認識調査――每年時局認識の調査及貯金調査を行ひ教育上の對策を研究す。

（ヘ）各教科授業に時局材料の活用。

3　國體の尊嚴を體認せしめ、尊王愛國敬神崇祖の精神涵養の施設

（イ）宮城遙拜・神宮遙拜――家庭に在りては毎朝之を行はせ學校に於ては月曜日朝禮に宮城遙拜。一日・十五日の朝禮に神宮遙拜を行ひ國體に關する信念を深め臣道實踐を誓はせる。

（ロ）率安殿率拜――1 朝禮時（全校）　終禮（學級單位）3 登下校時（個人）。

（ハ）國旗掲揚――定期（一日・十五日）祝祭日、記念日。

（ニ）御製率誦――毎朝禮時。

（ホ）愛國訓練。

4　堅忍持久、困苦缺乏に堪ふる旺盛なる體力、氣力を養成する施設

（イ）興亞率公日、（ロ）報練行軍、（ハ）運動日、（ニ）武道奬勵。

5　勤儉貯蓄・節約利用・工夫創作精神涵養施設

（イ）貯金日、毎月第一、二金曜日、（ロ）時局下物資節約資源愛護利用の習慣を養成せんが爲學校にて之が强調實踐事項を定め勵行す、（內容略）。（ハ）廢物利用、工夫創作展覽會の開催。

6　防空に關する認識を深め防空訓練施設

（イ）學校特設警防團の設置（內容略）、（ロ）防空演習及避難訓練、（ハ）防空展覽會。

7　銃後援護に關する事業に參劃せしめ國民としての責務を一層自覺せしむる施設

（イ）戰病歿英靈に對する施設――1 弔慰及墓參へ春秋彼岸に職員並兒童代表）2 慰靈祭。

8　傷痍軍人慰問に關する施設

1 學藝會、運動會招待、　赤十字病院慰問（學藝、映畫、慰問作品。

（ロ）戰地への慰問文及慰問袋（隔月一回）

（ハ）銃後愛國資金の募集、銃後活動一切に要する費用は日常節約したる尊き兒童の一錢を興亞率公日に募集し之に充つ。

（ニ）職員の時局教育、銃後事務分擔――1 時局教育研究部を設け時局教育一切の調査研究を行ふ。　銃後事務分擔を定め時局教育銃後事務の圓滑を期す。

企畫、連絡、記錄整理、會計慰問、貯金、文書、軍人援護、廢品回收等の係を設く。

七、花に埋もれて

氣象特報が發せられて東南の空にはせわしく雨雲が低迷し何かしら不安にかりたてられるやうな八月二十六日午前十時、こゝ下市病院病舍×號室のテーブルには藥瓶が無氣味に白く反射し、室內にこめる重苦しい空氣は憂愁に凝結してゐるかのやうだ。ノックの音。やがて潰されるやうに大きな花束を抱いて入つて來た少女。病床に呻吟する患者は一面識もないこの可憐な突然の訪問客に重たく瞼をひらいたが、その樣子からは十分うろたへた樣子が窺はれた……。しばらくしてその病室には美しく咲き競ふ花の芳香がむせかへるやうにひろがり健康な明るい生彩を與へた。それをじつと見つめてゐた患者の瞼には大粒の涙が溢れ、胸は感激にふるへてゐた。丁度同時刻頃水戸の陸軍病院を始め各種病院及び各官衙にはそれ〴〵同樣城東國民學校六年生の子供達が、美しい花束を「さびしい病氣の人の爲に」「社會のために御骨折御苦勞さん」と感謝の涙で贈つて歩いたのである。花の齎す潤澤、否このやうな「うるほひ」が東に西に世界の新秩序を立てんとしてゐる過渡期の動搖に生きる人間にもつともつと必要缺くべからざるものである……。と、市內のいばらき新聞はその日の夕刊に報じてゐた。

この花こそ、年度始各自が家庭の一隅に或は學園に播種し、雜草しつゝ哺み來つたいとしき草花なのである。此の花を盛夏の一日（夏季心身鍛錬の行の一つ）講堂に陳列し爛漫と咲き誇り咲き競ふ花に埋れて心ゆくまで鑑賞し、又樂しき童話に暫し神祕の世界に放浪しつゝ自然美への憧れとやさしい心情との陶冶に役立つて來たのである。

飽かず眺めたこの花を、祖國に腕を脚を捧げし白衣の勇士の方々や酷暑に病床に惱む方々への心からなる同情の一表現として見舞の手紙を添へて訪づれたのである。

★或る年の暑問の書簡――兒童作品に添へて――

皆樣　お花を差上げます。

今日は私達の喜ばしい花の會であります。花の會、それは子供らしい無邪氣な心情の培ひ！　人間味豊かな生徒への憧れ！純眞無垢そのまゝの伸展！　かうした私達の教育に於ける考へはいつも流れてゐるつもりです。花の會もそうした境地に兒童を導き、思ふ存分自然美、人情美にひたらせたい念願から年々催してゐるので御座います。

今年も本日、永い間愛らしい可憐な子供の手になつた草花を持ち寄つて盛大に催しました。花そのものは誠に粗末で御座いますが、花の春は子供の心から培ひ上げた喜びで御座います。

何卒子供達の純眞さと私達のさゝやきとを御汲みとり下さいまして御受納下されるやう御願ひいたします。

尙別紙に子供の心の奥底からの叫びである綴方、圖畫、工作が數點ございます。作品其のものは誠に整つて居りませんけれど、神のやうな純情を十分御覽下さるやう御願ひいたして止みません。

終りに一日も早く御病氣の御全快をお祈りいたします。

水戸市城東國民學校

★或る子の勵めの言葉

暑い〳〵夏がまゐりました。青々と生え茂つた草木も、暑さうにうなだれてゐます。高く輝きわたる太陽はあらゆるもの燒きつくすやうに照りつけてゐます。私達は元氣な體で此の暑さに負けず自由に清い空氣を吸つてこの夏を樂しんで居ります。

皆樣方も、きつと丈夫な身體になつて此の空氣を思ふ存分吸ひ込んでみたいとお思ひになる事でせう。又庭園を歩いて咲きみだれてゐる美しい花をごらんになつて見たいとお思ひでせう。それが出來ませぬ皆樣方のお身上を思ひまして、この花を御送りいたします。どうかこれをごらんになつて少しでもお慰め下されますやう、又皆樣のお體のお體の一日も早く御快復いたしまする事を御祈りいたします。

暑さのきびしい折から益々御養生專一になさるやう御願ひ申し上げます。ではさようなら。

初六　飯島○枝

★感激にあふるるお禮の言葉

城東校の皆樣

名も知らぬ、未だ一度もお目にかゝつた事のない未知の私から突然呼びかけられてお驚きにならないで下さい。

餘りのうれしさに失禮もかへりみず斯うしたお便りを認めました。

城東校の可愛らしい皆樣方

私は日赤病院に入院中の一患者の家族の者で御座います。こゝまでおよみになつて私のこうしたペンの原因がおわかりになつた事でせう。

昨日はあの暑さの中もお厭ひなく、ようこそお尋ね下さいました。その上永い間皆樣のお手によつて培はれた、それこそ汗と努力の結晶とも言ふべき奇麗な草花をお送り下さいまして有難う御座いました。

病人はもとより家族の一員としてどんなにうれしかつたか、どうゆう言葉で私達の此の心持を言ひ表しませうか。皆樣の可愛い患者へのお便りをよんだ時泣きました。大きなりで……みつともないやうですが泣きました。うれしかつたんです。小さいあなた方からこんなに迄呼びかけて戴ける病院の方は幸福です。醫師の力より病院の手當より皆樣のこの御言葉がどんなに病人をはげます事でせう。

千日の薬より百回の診察より、この贈物の方がはるかに遙に有効ですわ。本當に「病は氣から」と申します。皆樣のこのお心持丈でもキットよくなります。

あなた方のこの可愛らしい祈を聞き入れて呉れない神がどこにありませう。

いづれ退院でも致しましたらば、親しくお尋ねして皆樣にお目にかゝりお話も致したり、お禮も申上げ度いと存じて居ります。

そろ〳〵新學期も初まります。この一ヶ月間でうんと丈夫になつて來る新學期にはしつかりやつて下さい。

あなた方のやうな小國民がある事こそこの日本の國は世界に誇る事が出來るのです。

小さいながらもこの大きな日本の國を背負つて立つ意味でうんと頑張つて立派な日本人となつて下さい。

嬉しさの餘りつい〳〵永々と書きました。

では終りに、先生方はじめ皆樣の御健康を祈らせて戴きつゝこの手紙を終ります。では御健在に御機嫌よう、さようなら。

（日赤病院　一患者の家族より）

この後に次ぎのやうな便りが添へてあつた。

城東校の諸先生

嬉しさの餘り遂に書いて仕舞ひました。私のかうした失禮さを御許し下さいませ、拙ない手紙ですけど私の此の氣持を可愛いゝ小さい方達によくお傳へ下さいませ。

私のこの言葉は病院内は勿論この事を見聞した世間一般の人の言葉です。

私のかうしたお便りが先生方始め小さい方々の御努力に對して幾分でも御報ひ出來ましたらば幸で御座います。

城東校の先生方、皆樣の御幸福を祈つてやみません。

日赤病院第二十一號室

富田壽雄

同　登志惠

入院して居りますのは私の父であります。
生命にも代へられぬ大事な〳〵父です。
子として父母の愛以外に受けた愛、人間愛！
此の度の事ほど私の心を胸を打つた事はございません。
恐らく一生を通して忘れられぬのは此の事で御座いませう。
（原文のまゝ）

其の他、此の樣な全く感激的な熱烈なる書面、禮狀が枚擧に暇なきまでに配達される。それは私達のいさゝかなる營みによつて切花に結ばれた美くしい實である。

八、歩け、歩け

1　徒　歩

靑葉が初夏の微風にそよいでゐる。やゝ埃立つ大路を、整然と四列に並んで東を指して歩いてゐる一隊がある。運動着に白鉢卷の凛々しい姿に、さん〳〵と陽光がそゝいでゐる。汗ばんで上氣した顏、きつと結んだ口、無言のまゝ歩みつゞける。氣持よく伸ばした脚と腕、思ひ切り張つた胸。それは興亞の少年、少女のほゝ笑ましい姿態である。列の先頭に立つ白ズボンの先生も、後から行く女の先生も、同じやうな步調で颯爽と步を運んでゐる。牛車を引いた近村の靑年が目を見はつて、後を見つめてゐる。野菜賣の內儀さんが、側に道を避け、立ち止つて見送つてゐる。買物に來た奧さんが店の前に立つたまゝ、笑みを浮べて、通りすぎるまで眺めてゐる。

街を出はづれると那珂川の豐な流がある。そこにかけられた壽橋の中央まで來ると、先頭の先生が元氣よい聲で

「全體、止れッ」「左向け左」

號令通りに行動する二百二十の一隊である。

「學校の門を出て、十一分三十秒。初めに注意した、絕對無言の正常步がよく守れました。こゝで十分間休憩し、それから、今通つた道を駈步で歸ります。休んでゐる間に近くの畑の樣子殊に川岸で働く人々の仕事の仕ぶりをよく見て下さい」

思ひ〳〵の姿勢で休む。快い川風に汗ばんだ頰を撫でられ、遠くつづく村の畑と丘　森、木立の向ふに見える農家、それ等を眺めてゐる。すぐ近くには今、護岸工事をしてゐる人々の群がある。土を運ぶ者、トロに入れる者、運ぶ者、ならす者、一心に立働らいてゐる。それが皆壓のやうに只、默々と而も精いつぱいの仕事ぶりである。內原の義勇軍訓練所の生徒二百名が、雨期前に工事を完成させるために縣の懇望によつて、勤勞奉仕をしてゐるのである。その眞劍なそして規律正しい作業ぶりに兒童達は感に堪えぬやうな面持で見とれてゐる。その耳もとにピーッとかん高い號笛のひびき。休んでゐた生徒は一齊に立上つて、もとの隊列になる。腕時計を見た先生は

「氣をつけ。これから學校まで無言の駈足。前へ進めッ」

來る時とは又異つた足音が、初夏の川面にひゞく。それは氣持よい行進曲でもある。

同じ頃、それ〳〵別の方面に行進した一隊、又一隊と校門を入つて來る。

城東校鍛錬徒步の一スナップである。

2　本校の正しい步行訓練の志向點

1　上體の姿勢を正しく保つて步くこと……胸は心持張り氣味にして、腹部は折らず、臍下丹田に心氣を充實させて、腰の上に安定させ、目は前方やゝ高めの位置に注ぎ、頸筋を伸ばして顏を輕く引きしめること。

2　膝をよく伸ばすこと……振り出された前脚は地につく前に一度充分伸ばされて、幾分膝が先につき、それと同時に體重がその上に乘り、後脚で地面を押し離す時又膝が充分に伸びるやうにすること。

3　腕は肩の力を拔いて自然にたれ、脚に合せて肩から輕く前後に振ること……肘から先だけ動かしたり、腕が體の前方で交叉するやうな振り方をしないこと。

4　調子よく步くこと　服は必要以上に高く上げるやうな事なく、行動を滑らかに、リズム的に調子よく繰返すこと。

5　颯爽と步くこと……腰部から相當の推進力をもつて、一步一步と推進の喜びと强い意氣とを以て步くこと。

以上は單に理論の指導ではなく、常住步行行軍の姿に現れ、身についたものとなるやう力めてゐる。

3　團體による步行訓練

（イ）　鍛錬徒步

1　方向並に學年配當

方向	距離	第一回目	第二回目	第三回目	第四回目
五丁矢場	km 3.0	六年	三年	四年	五年
壽橋	2.5	五年	六年	三年	四年
水中下	1.8	四年	五年	六年	三年
不動尊	2.0	三年	四年	五年	六年

備考ー第六回目以後は此の表により反復

2 實施は 隔週水曜日の第六時限（他の水曜日は少年團訓練日に當てられてゐる）

3 校長又は主任の訓示を受け、合同體操を行ひ、各學年單位に出發する。

4 指導の方法は次の如き場合がある。

○各學年能力別（性別）編成により、能力別の指導をなす場合

○速度に重點を置く場合（時間を測定記錄しておく）

○正しい歩法の指導に重點を置く場合（正常歩）

○往路駈歩復路正常歩を用ひる場合

○中途で大股歩、擧股歩、踏歩、急歩等を用ひる場合

○二往復をなす場合

○規律協同互助等、特に精神訓練に重點をおく場合

こうして歩く事に興味と自信とを持たせる。

（ロ）朝 禮

毎日行ふ朝禮が終つてから、教室に入るまでの極めて短距離短時間のものであるが、嚴肅な朝禮であるから、注意は集中統一され、レコードに合はせて足並揃へ全體に融け込みきつて行進する姿は、感激溢れるばかりである。朝禮は我が校全體訓練の源泉をなしてゐる。

（ハ）愛國訓練（省略）

（ニ）健脚試錬

毎學期一回行ひ、隔週の鍛錬徒歩に準じ、只其れよりも程度を高め、學校全員參加する。

（ホ）遠 足

春秋二季に行ひ、徒歩鍛錬に重點を置く。

（ヘ）登下校時の徒歩訓練

正しい歩法で自然と二列になり、左側通行を實施させる。

★我が校の體育體系

（イ）努力點

（1）系統的合理的體育　（2）體育運動の生活化

（3）剛健不撓なる心身養成　（4）衛生思想の涵養

（5）衛生的訓練の重視

（ロ）實施事項

少年團訓練　偶數週水曜日第六時限（三級は第五時限）

鍛錬徒歩　奇數週水曜日第六時限（三年以上）

愛國訓練　奇數週土曜日第四時限（三年以上）

合同體錬　偶數週土曜日第四時限（三年以上）

（ハ）方 法

1 合同體操（十 分）　男女一緒

2 各種運動（二十五分）　男

3 整理運動（五 分）

養護協議會　毎 月

健康相談　毎月第二木曜

體力測定　隔 月

職員運動　毎週水曜

毎日行ふ事項

學校給食（約二百名）　ラジオ體操（毎朝）

朝の合同清掃作業（始業前）

（ニ）各月別配當

四月　職員體操練習開始、身體檢査開始、座席交換、體力測定開始、口腔檢査開始、結核豫防週間、トラホーム患者治療證檢閲

五月　校技大會（蹴球走技）體育祭、要養護兒童再檢査、兒童愛護週間、遠足、ムシバ治療開始、市聯合運動會、口腔衛生講話開始（學校齒科醫）

六月　ムシバ豫防デー講話、齒磨實行週間、健脚試錬、衛生週間（入梅期間）、夏季衛生心得配布、水泳希望者健康診斷、トラホーム治療成績調査

七月　體操演習會、衛生座談會、水泳開始、炎天鍛錬會、夏休衛生心得配布、武道土用稽古

八月　ラジオ體操會開始、トラホーム學校洗眼繼續、ムシバ治療奬勵、兒童召集（作業）

九月　運動場修理、講習傳達會、座席交換、夏休中罹病兒童調査、水泳參加兒童健康診斷、トラホーム檢診、トラホーム治療證檢閲

十月　遠足、視力保存デー運動會

十一月　體育週間、校技大會、要養護兒童健康診斷、歯磨實行週間、少年團體力測定、冬季衛生心得配布
十二月　健脚試錬、トラホーム治療調査
一月　相撲大會、座席交換、衛生週間、武道寒稽古
二月　雪合戰、健脚試錬
三月　校技大會、體育衛生反省會

九、水戸魂の氣魄「勝闘」

1　愛國訓練

我校少年團の行事として實施してゐる愛國訓練は、校風の現れであり、水戸魂の氣魄の養はれる集團訓練である。之によつて溌剌健なる心身一體の育成につとめ、鄕土先賢の遺風をしたひ、全校を打つて一丸とする團結心を固めて、總てを愛國への奉仕者としての修練を目指してゐるものである。

月の三日（創立記念日）十五日（努力日）の二回三年以上一、二、級生八百の兒童と三十の全職員によつて實施される。全員白鉢巻をつけて白シャツ白パンツ、女子は黑ブルーマの輕裝に何れも少年團訓練の團杖を手にして校庭に出る。やがて鳴響くベルの音に嬉々として遊び戯れてゐた全員其の場に直立不動、いよ／＼開始である。次の順序による。

愛國訓練實施順序

一、整　列　　日の丸行進、勝闘
二、敬禮、開始の言葉　　九、閲　團
三、團規・入場　　一〇、分列行進（分列行進曲）
四、宮城遙拜、默禱　　一一、校歌齊唱
五、團長訓話、　　一二、團長講評
六、朗誦、宣誓　　一三、萬歳三唱
七、團杖體操　　一四、團旗退場
八、愛國行進　　一五、敬禮終了の辭

十字行進　ゼット行進（交叉）一六、退場　行進曲

第一のベルは鎭魂のベルであり、第二のベルによつて級別旗のもと己が整列線の位置をしかと見定める。

輕快な行進曲は全員を整列線上に導いてピタリと停止する。開始宣言について嚴かに少年團旗の入場、宮城を遙拜しては心から大君に隨順の至誠を現はし、皇軍に感謝の誠を捧げる。

團長訓話「諸子のその眼、その手足に魂こめての躍動こそ、諸子の捧げる愛國の姿である」と説される言葉に、兒童の身も心も愛國者になりきる。團長再び壇上にあつて「我ガ鄕土ノ先賢、弘道館記ニ記シテ曰ク」と叫べば、全員應じて聲高らかに「弘道トハ何ゾ、人能ク道ヲ弘ムルナリ、道トハ何ゾ、天地ノ大經ニシテ、生民ノ須臾モ離ルベカラザルモノナリ。……」と館記の一節を朗誦する。

更に「少年團の宣誓」に

一、至誠以テ敬神崇祖忠孝一致ノ實ヲ擧ゲマス。
一、勤勞ヲ愛好シテ國力ノ充實ニ勵ミマス。
一、親愛協同ノ道ヲ守ツテ、住ミヨイ社會ノ建設ニ努メマス。

と團員たるの自覺を固め心に誓ふ。團杖體操は本校體操主任の創案になるもので團杖操法と建國體操其他の型よりとる全員一體の緊張と力の發露で獨特の體操である。號令と氣合との中に一齊に打振られる團杖の動きも美しい。

次に愛國行進の體形に集合すれば、級別旗と職員を先頭に、男子は撃へ杖、女子は薙刀の如く抱へ杖にて堂々行進に移るのである。行進は見る間に全員十字形を構成し、十字行進は寸時にしてZ行進となる。東する列、西する列互に交叉して亂れず、日本海の戰に於けるZ信號を思ひ浮べる中にいつしか次の日の丸行進になつてゐるのである。日の丸こそ我等祖國の姿であり、大和の發現である。

足並いよ／＼揃つて大地をふみ鳴らす步調も高いその時、全員停止、日の丸の中心に向つて鞠躬し、古武士の意氣をその儘に團杖高く擧げて

勝闘「エイ、エイ、ヤー」

の歡聲が、高らかに叫ばれるのである。之ぞまつろはぬものへの大和の發現であり、日の本の感激である。日の丸行進が解かれて次、閲團に入る。

「一級生二百二十五名、團長先生に對し頭―右ッ」

と元氣一杯な少年隊長の指揮に一級生より順次、團長の閲團を受け、團員の意氣、日本少年の姿を見て頂く。次は更に靜より動へ分列行進である。三級少年まで堂々と祖國の大地を踏みしめ、御馬前に進むの氣概もての行進。「頭―右ッ」の敬禮に壇上高く微笑ましく團長の返す擧手の禮、分列行進曲の豪壯な曲がどこまでも微風に乘つて響いて行く。

最後は歌ふも懷し鄕土をたゝふ我等が校歌である。

「嬉シ我等ハ我ガ國ノ歴史ノ上ニ輝キテ、
尊キ光示シツル水戸ノ市民ノ一人ナリ……」

團長の之亦感激こむる講評を受けて奉安殿を拜し、萬歲三唱に心から皇國の榮榮を壽ぐ。國旗は降納され、團旗退場についで終了の辭あつて玆に總てが終るのである。

この間四十分、次から次、靜より動へ、動から靜へ國體に歸依し隨順し奉仕して皇國の道を行幸し、臣節を竭すべき心身一體の修練である。

2 城東少年團經營

我が校に於ける少年團訓練は

「義烈兩公並に鄕土の先賢によつて興されたる、水戸敎學の傳統的精神を汲み、皇國日本の少年少女たるの信念を培ふを根本義と

少年團訓練細目

訓練班指導細目

月	行事	三級	二級	一級	要項	生活班指導細目 指導事項
四月	入團式 役員任命式 表簿作成 交通訓練	宣誓唱和 敬禮法 少年團ノ話 登校訓練	同 同 地圖ノ讀ミ方 登校訓練	國旗取扱法 班員指導法 分團ノ教練 交通訓練	祭例 服裝	1、左側ノ通行 2、ムダ遣ヒセヌコト 3、飲食物ニ注意 1、正シイ身ナリ 2、衣服ノ修理、手入
五月	端午節句 遠足 市聯合運動會 勅語下賜記念日	野外遊戲 奉仕作業 團杖操法	同 急救法 手旗訓練 地圖訓練	上 手旗訓練 行軍 步測訓練	晨作物 動物愛護	1、苗代、麥畑ヲ荒サヌ 2、一坪晨作ノ實施 1、飼育動物ノ世話 2、ムヤミニ殺生ヲシナイ
六月	衛生注意 時ノ記念日 武道祭 清潔法	時間勵行 手旗アッピ 野外遊戲 長サ測定	使ノ仕方 (復唱、返リ返事) 方位訓練 早起會	使ノ仕方 (復唱、復命) 高サノ測定 部隊教練	時ノ記念日 衛生	1、時刻ヲ守ル 2、時計ヲ正時ニ合ハセル 3、時間ヲ大切ニスル 1、雨期衛生心得ヲ守ル 2、住居ノ清潔
七月	七夕祭 水場開き 防空訓練 盂蘭盆	七夕祭 水泳ニッイテ 防空ニッイテ 橋しらべ	水難ノ心得 避難訓練 野營ノ話	水難救護訓練 同 戰鬪遊戲 野營準備 防空訓練	水泳 防空訓練	1、水泳修練 2、水場ヘ往復ニ注意 3、水場以外デ泳ガヌ 1、大人ノジヤマニナラヌ 2、防空知識ヲ養フ 3、家ノ護リニ助力
八月	水泳大會 鄕土研究 野營 花ノ會	水泳 鄕土しらべ 慰問作品作リ 朝顏展	水泳 飯盒炊事 天幕ノ張リ方 花ノ會準備	水泳 野營訓練 花ノ會準備	夏休生活 鍛錬ト躾	1、休中心得ヲ守ル 2、ラジオ體操ヘ出ル 3、家事ノ手傳 1、早起早寢 2、神社奉仕

し、社會生活に即する實際的訓練を施し、併せて體位の向上を圖り、以て興亞の大業を翼賛し奉る皇民の錬成をなす」

ことを方針とし、之が訓練の編成には鄕土生活と訓練の一致を考慮して學區内に八ヶ分團を設け、一分團は男子隊、女子隊の性別に分ち、更に隊中には、兒童の生活區域によりて自然に出來る兒群を考慮して八九名を一ヶ班とし、その中の上級生を班長に任命しておく。この編成を生活班とし、他に學年に應じて、縱に一級(六年)二級(五年)三級(三・四年)と三分し、學校教育の進度及智能體力とに應じて訓練し、やがて校外自治の素地を培ふのである。この編成を訓練班と言つてゐる。愛國訓練はこの後者の編成に依つて實施してゐるのである。訓練細目を次に、

月				
九月	非常訓練（風水害）	夏休作品展覽會	同上	那珂川大洪水記念日
	彼岸	史蹟巡り	部隊教練	彼岸
	先賢展墓	非常訓練	方位訓練	
		先賢展墓	同上	
		夏休生活發表會	同上	
		紙芝居		
		同上		
十月	運動會	手遊訓練	景仰會	集（班舍ノ集ヒ）
	吉田神社祭（神社清掃）	勅語謹書	運動會役員活動	野外ノ遊
	遠足	神社奉仕作業	野外綜合訓練	
十月	體育週間	測量（歩側）	繩とび	野外遊戯
	秋徳祭	兵隊ごつこ	野外綜合訓練	奉仕作業
	健脚試練	野外あそび	部隊教練	課外讀物
		分列行進	傳令訓練	
			强行軍	
十二月	防火日	相撲ノ會	自治會	防火訓練	校外風紀
	非常訓練	防火ポスター作リ	耐寒强歩	長距離走法	冬休ノ心構（自治會）
	冬休計畫	校外風紀ヲヨクスル話合	共同作業	相撲ノ會	
			校外風紀	校外生活しらべ	

1、當時ヲ偲ビ辛抱强ク
2、洪水ノ心得
1、祖先父母ニ對スル孝養實踐
2、墓參
3、戰死者遺族慰問

1、街道清掃
2、家ノ畠ノ手入
3、分團遠足
1、圖書ノ廻覽
2、讀書傾向調査

1、口ヲ結ンデ早ク
2、隊長ヲ中心ニ仲ヨク
1、果物・作物ヲ荒サヌ
2、魚釣デ危險ナ所ヘ行カヌ
3、班單位アソビノ善導

1、路上ノアソビ注意
2、遊ビ場ノ考慮
3、言葉其ノ他
1、休中心得ノ相談
2、休中ノ行事ヲ打合ハセル
3、生活豫定表ノ作製

月				
一月	寒稽古	耐寒競技	同上	武道寒稽古	挨拶應接
	新年會	羽子ツキ競技	方位訓練	分團新年會	
	書道祭	マスク作リ	相撲ノ會	ポスター作リ	
					1、分團新年會、學藝會
					2、年賀客ニ對シテノ挨拶應接ヲ正シク
					3、ハキハキシタ挨拶
二月	節分	言葉遣ヒ	耐寒競技	同上	路上遊戯
	建國祭	既習訓練ノ復習	戰鬪遊戯	地圖訓練	1、氷辷リノ注意
	雪合戰	行軍	紙芝居	相撲ノ會	2、路ヲ結氷サセヌ
					3、遊ビ場ノ考慮
					1、タキ火ノ注意
					2、夜警ノ手傳
三月	少年團大會	雛祭	童話會	同上	觀梅
	一級生送別會	學藝會	自治會	奉仕ノ日	學年末
	園報發行	室內遊戯	送別會計畫	謝恩會	
					1、觀梅ニ行ッテノ注意
					1、學校備品ノ修理奉仕
					2、氏神ニ感謝報告
					3、卒業生ノ指導

以上の綱目によつて訓練班の訓練は隔週水曜日第六時限に各々實施するのであるが、こゝに其の二三の實施案を記して見る。

3 手旗あそび指導案（三級少年）

○目的　手旗の作字により文字拾ひ、運手競爭等の遊戯をなしつゝ手旗訓練の初步指導をすると共に心身の鍛錬、推理力判斷力を啓培す。

○場所及時間　校庭　約二十分

○準備　手旗　文字カード　原劃カード

○指導要項

一、集合競爭（號笛の訓練を加味しつゝ全員・班別）

二、一劃一字の讀みと遊戯（ク、リ、ノ、ハ、ニ、フ、レ、（）

1、一字づゝの讀み　　2、組合はせ讀み
3、遊戯　前進遊戯　連手戯爭
三、點ある文字の讀みと遊戯（マ、ソ、ト、ソ、メ、タ、ム）
1、一字及組合はせ讀み
2、遊戯　カード拾ひ　二重連手
四、手旗の使ひ方
1、手旗の持ち方　　2、卷き方
五、原劃遊戯、手旗の處理、話し合ひ
1、正しい原劃の指導　2、相互の練習
3原劃あそび　　4、兵隊の手旗

4　野外綜合訓練指導案（二級少年）

○目的　諸訓練を綜合して實施し、先人の史蹟をたづね、鄕土の認識を更に深めるために行ふ。
○場所及時間　史蹟神勢館五丁矢場　一時間
○準備　指示用紙、先發指導員二名　想定及巡路下檢分
○想定　名君烈公の築かれし五丁矢場に賊あらはれたとの報により、吾等城東少年團は賊を追ひ拂ひ史蹟を永く保存せんとす。各班員は共同警戒しつゝ行軍せよ。

○指導要項
一、出發前の注意
イ、合言葉「正」に對して「堂」と應ずること。
ロ、田畠の路通過の際注意。
ハ、かくし文、諸記號あるに留意せよ。
二、整列　點呼
三、「野外綜合訓練の歌」の齊唱
四、想定　命令を授ける。
五、出發　各班三分間おきに出す。
六、途中の訓練（指示用紙は別紙印刷物にて配布）
第一指示　新寺橋步測　行先指示記號　伏兵
第二指示　農事試驗場まで駈步（五分）
第三指示　伏兵、距離目測、手　訓練（二五〇米の距離）
第四指示　畑作物の名七種以上
第五指示　敵兵を追ひはらひ、碑文よみ、敵の食糧分捕
七、成績講評
八、講話「烈公の國防」
九、校歌齊唱
一〇、一齊正常走にて歸校

一〇、興亞奉公日

1　朝の行事

午前五時半、興亞奉公日の朝まだき、こゝ秋葉神社の境内には少年團員の中に父兄母姉大人の姿も入混つて懸命の作業である。

何といふうるはしい情景であらう。掃く者、塵を運ぶ者、雜草を拔くもの、狹い境内を一ぱいに親も子も共に働く。殊に母姉の方もこの早朝兒童と連れ立つて參加され、打水に、除草に、兒童の洗手にかひ〴〵しく手傳はれて共同一體、神への奉仕にいそしむ姿は、興亞日本の非常時局に相應はしい情景といふべきであらう。紫紺の幔幕はりめぐらされ、すつかり淨められた境内に一同整列、嚴肅な行事が次の順序によつて行はれる。

★興亞奉公日朝の行實施順序

一、朝の挨拶「お早うございます」　　四、國旅揭揚
二、始の言葉　　五、國歌齊唱
三、神社に正式參拜　　六、宮城遙拜
七、祈願默禱　　一〇、國民保健體操
八、少年團宣誓　　一一、講　話
九、朗　誦　　一二、愛國行進曲齊唱
「行末もふみなたかへそ蜻島　一三、拜　禮
大和の道ぞ要なりける」　一四、萬歲三唱　町務委員
（德川齊昭公作歌）　一五、終の言葉

すが〴〵しい朝の境内に整列した全員それはこの區域内の城東少年團員百餘名の他に一般町内の父兄、母姉會員、中等學校の生徒もある。社殿の前に姿勢を正し心を一つに打つ柏手の音があたりにこだましてさわやかに鳴り響く。君が代齊唱と共に國旗を揭揚し宮城を遙拜しては聖壽の無窮を壽ぎ奉る。少年團宣誓「行末も……」の朗誦も力强く、ついで國民體操にうつる。元氣な子供達の姿と共に、父兄の姿、お母さん方のエプロン姿の體操も微笑ましい朝の情景である。

修養講話は分團長職員及び町務委員が輪番で擔當する。「今朝は〇〇君のお父さんのお話」と子供達は歡喜の眼で耳を傾ける。「皆さんお早うございます。實に氣持よい朝ですね。今朝は皆さんの今朗誦した『行末も……』の御歌について私のいつも感じて居りますことを申上げて……」

など〻郷土先賢の遺訓を物語る。時に市内在住の名士を聘してその修養講話を傾聴しては子供も大人も同じ感激の坩堝にひたる。

次に「愛國行進曲」又は「毒行かば」の歌を高らかに齊唱し、再び神前に拜禮して終了、解散するのである。

× ×

かうした曉天修養會が城東學區八つの分團に於て、神社に或は寺院の境内に同時刻に行はれてゐるのである。即ち

第一分團　伊奈神社　第五分團　九丁目不動尊
第二分團　寶饒院　第六分團　學校
第三分團　三ノ町廣場　第七分團　水天宮
第四分團　學校　第八分團　秋葉神社

興亜奉公日は時艱を克服して聖戰目的を達成するの意氣を高め國民各々がその職域に在つて勤勞力行、以て大東亜建設への榮譽を擔ふ歓喜のうちに奉公するの念を新たにするの日であり臣道實踐の日である。我等はかく兒童は勿論、一般父兄母姉の參加を得て嚴肅なるうちに春風駘蕩、隣保互助のうるはしき姿を現出して本校教育の目指す三位一體の一つである、教育の社會化をはかり國民學校の「家庭及ビ社會トノ聯絡ヲ緊密ナラシメ協力シテ兒童ノ教育ヲ全カラシムベシ」の要望に添ふべく努力してゐる。

2　少年團生活班訓練の二三

少年團經營に於ける校外訓練の修養的なるものとしてこの外に毎日曜の神社（氏神吉田神社、鹿島神社）參拜あり、奉仕的なるものとして道路清掃作業が毎月一回實施される。團員の融和を圖り慰安親睦を目指すものに分團の遠足及分團演藝會、班舍の集ひ等がある。地域的に自然に出來る兒群を考慮しての班員の集ひであり、上級生は下級生を世話し、下級生は上級生をしたつてそこには美しい友愛の交りが生じて來る。分團長先生の指導のもと而も次第に自治的に訓練され行く姿は可愛いゝものである。

★日曜日の神社參拜

○目的　曉天に神社に參拜し、皇軍將士の武運長久を祈願し敬神崇祖、感謝報恩の精神を涵養せんとす。

○方法　毎日曜各分團順次に行ふ。

○神社　鹿島神社、吉田神社。

○參拜次第。

一、整　列　　正式參拜、拜神の詞
二、修　祓　　四、誓　詞　少年團宣誓
三、拜　禮　　五、朗　誦

「行末もふみなたがへそ　……要なりの歌」　神官又は分團長先生
六、講　話　七、拜　禮　八、社殿を廻つて退場

★神社參拜誌より

○吉田神社參拜　指導者　松本、田崎、稻生
○參加團員　第二分團　男四〇名　女五八名　計九八名
○五月四日　日曜日、午前五時三十分出發
○集合場所　日赤病院前グラウンド
○解散場所　同　所
○神前講話「神社參拜と乃木大將」　吉田神社神官　阿久津君明氏

要點

（一）早朝規律正しく神に詣る諸君の態度は賞すべきものがある。神に奉仕するその態度こそ望ましい。
（二）乃木大將は毎月必ず二回の神詣をしたが、その態度たるや實に敬虔なものであつた。參拜が終るまでは人と話もせず、寄道もしない。
（三）各宮殿下皇族方の御參拜亦然り。
（四）神國日本は古來神を祭り神に奉仕するは非常に大切な行事であり政であり教育でもあつた。
（五）神域の清掃にも參拜にも常に敬虔なる態度を持して神へ奉仕の念を以て行ふべきものである。

○特殊な施設
（一）日赤グラウンドに集合　整列、點呼して出發
（二）途中の行進は無言
（三）早朝の自然を味はしめた。
吉田の森に吹く朝風、小鳥のさへづり、遠くより聞える蛙の聲、耕された田の面
（四）歸途　小雨降り出す、愛國行進曲を男女交互に歌つて足並を揃へ堂々の行進をして來た。

○感　想
（一）早朝の氣持は實によい。兒童も心が落ちついてゐる。整列も早く出來た。
（二）電話にて神社に連絡しおきたるため、神官阿久津氏萬事用意、講話も喜んでして下さる。

★分團演藝會

○目的　校外に於ける團員の集會を想定し、各團員が種々なる學藝を演ずることに依つて樂しき集ひの中に團員相互の親睦と團

結を强化せんとす。

○場所及時間　屋内作法室、一時間

○團員　第三分團　九十八名

○準備　プログラム、蓄音器、レコード、紙芝居用具

○指導上の留意點

（一）團員の自主、自律的活動を旺盛ならしめる。卽ち本會合に至る迄の諸種の準備は勿論、集合、會の順序、其の他出來るだけ、分團員の自治に依らしめる。

（二）時局、鄕土との連關、鄕土の誇りを持たせる。

（三）進行係、副隊長

○實施順序

（一）始の言葉……隊長

（二）演　藝

1、鄕土の偉人「藤田東湖先生の卷」

（イ）東湖先生のお話　……分團長先生

（ロ）正氣の歌の詩吟　……全　員

（ハ）正氣の歌の紙芝居　……團　員

2、童話「お月樣の兎」……團　員

3、唱歌遊戯「海」　……第三班

4、紙芝居「血の傳令使」……第一班

5、少年團歌　……全　員

6、分團長の挨拶

7、終りの言葉　……隊　長

一一、母の常會

1　常　會

乳飲兒を背負つた若い母親、中年の奥さん風、お勝手仕事を片づけたばかりで手を拭き〳〵來たといふやうな氣忙はしい足どりの婦人、眼鏡をかけたインテリ風の若夫人、お人形を抱えた孫の手を引く老婆等々――學校の門を入つて來る。言ひ合せたやうに皆ていねいに奉安殿に向つて禮をして講堂に入る。入口には上履の用意はしてない。新聞紙包から草履を出してはく者、風呂敷からスリッパを出して履く者もあるが、大半はそのまゝ入る。拭き清めてあるので、格別足袋の裏が汚れる氣づかひもないらしい。百五十人、二百人と僅か三十分位で集る。

正面の電氣時計が二時を指す。學校長が所定の席に着く。係りの訓導の號令で一同起立、敬禮、開會の挨拶があつて恭しく宮城を遙拜し、護國の英靈並に出征將兵に對して、感謝の默禱を捧げる。正面を向きピアノに合せて君が代を歌ふ。次にその日の日程に從つて、學校長の講話や、訓導の家庭教育或は時局に關する話又は協議等が行はれる。時にはニュースや文化映畫を見て樂しみの中に知識を收得する。

砂糖や米、炭等の配給の話や、公債の割當についての協議等が少しも語られないのが町内常會と異つてゐる。子供をつれた者もかなり居るので講演等には飽きてしまつて席の間や、後の方を走り廻る聲等も出て來る。さうすると女の先生が上手に、だまして外へつれ出して遊ばせる。砂場で山を作る者、ブランコにのる者臨時の托兒所が出來る。

これが毎月六日に開かれる城東母姉會の風景である。このやうな集りが、どんな經路を辿つて出來たのか。次にその發端から、前年度實施した概略を述べてみよう。

2　家庭教育講座の開設（昭和十年度）

從來も教育は學校と家庭とが聯絡、提携せねばその完成は望まれぬと言はれ、父兄が學校教育を理解し之に協力せねばならぬといふのは常識になつてゐた。而しその實際施設としては一年に一回の父兄懇話會の開催か學藝會を公開して、その席上學校長が十分か十五分教育に關する話をするか等で能事終れりとしてゐたのが多かつた。當校に於ては訓育の首唱者であつた故山崎校長が家庭教育より出發せねば訓育の徹底は望まれぬと喝破せられ自ら陣頭に立つて家庭教育講座を開かれたのが昭和十年であつた。今や之を始められた先生は既に亡しと雖も、國民學校教則に

「家庭及社會トノ連絡ヲ緊密ニシ兒童ノ教育ヲ全カラシムルニ力ムベシ」

と定められたのを見られて、我意を得たりと地下に微笑まれてゐることであらう。

五回に亘つて實施し毎回三百名位の出席があつて感謝せられた催であつた。

その時の家庭への通知は次のやうなものであつた。

○趣　旨

立派な教育をして、眞に役立つ人間に育て上げたいとは子を持つ總ての親の神かけての念願でありませう。吾々同人は、よりよい教育を致しますことについて一方ならず苦心努力して居り

ますが、學校だけで全うする事は中々難事でございます。是非とも家庭に於けるお母さまを中心としての家庭教育の振興に待たねばなりません。

茲に於て我が校では學校家庭の緊密なる提携連絡を圖りまして愛するお子樣方のために、教育向上の一路を邁進いたしたく、「家庭教育講座」を設けて左記施設を實行いたしたいと存じます。願くはお母さま方、奮つて御賛成、御出席下さいますやうお奬めいたします。

○施　設

1、期間　第一期　十一月より明春三月まで毎月一回宛、五回を以て終了す。

2、期日　毎月第三日曜、午前九時より正午まで

3、場所　水戸市竹隈小學校（後に改稱して城東校といふ）

4、會員資格　尋一、二兒童のお母さま及本趣旨に御賛成の一般御婦人方

5、事　業

イ、講話　本校訓導及招聘講師

ロ、座談　會員相互の體驗發表

ハ、映畫　教育映畫の鑑賞

ニ、その他

6、會費　徴集せず

○題目及講演者

1、日本の家庭教育　山崎力之介

2、無言の躾　久保田清

3、吾子のために　宇留野弘

4、家庭教育と兒童の健康　高田慶

5、子供の讀物　村田正博

6、子供の心と教育　永井熙

○期日並に時間配當（略）（調査、昭和十六年五月號參照）

3　城東母姉會の設立

以上のやうな婦人の集會が母胎となつて、昭和十三年の初夏、甲斐校長によつて城東母姉會が設立せられた。その經過を記錄より摘記してみる。

1、創立まで

イ、昭和十二、十二、三

城東區婦人協議會の席上、母姉會創立の議が可決せられる。

ロ、昭和十三、二、十

城東區町務委員幹部會に於て同意を得、各町務委員に創立委員の人選を依頼す。

ハ、昭和十三、四、十

全職員、町務委員を訪問して創立委員を決定。

ニ、昭和十三、四、十六

第一回創立委員會、會員募集を依頼す。

ホ、昭和十三、五、二十四

第二回創立委員會、會員約四百七十名を募集す。發會式の件會則及豫算等を附議す。

2、創立總會

昭和十三年五月二十八日午後一時より城東校講堂に開く約三百名の會員が出席す。甲斐校長議長席に着き、經過を報告し、次いで會則並に豫算案等を附議し可決。こゝに城東母姉會は成立した。續いて天野雉彦氏「蒲團も亦教場」といふ題目の下に講演あり後、映畫を鑑賞して四時閉會した。

3、會　則

第一條　本會ハ水戸市城東母姉會ト稱シソノ事務所ヲ城東尋常小學校内ニ置ク

第二條　本會ハ教育ニ關スル勅語ノ御趣旨ニ基キ會員相互ノ智德ヲ涵養シ家庭及社會生活ノ改善並ニ家庭教育ノ振興ヲ期シ以テ社會福祉ノ增進ヲハカルヲ目的トス

第三條　本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ

一、役員會、總會等ノ開催

二、小學校教育トノ連絡提携

三、講習會、講演會、映畫會等ノ開催

四、女子青年團ノ指導誘掖

五、孝子、節婦、其他模範トナルベキ婦人ノ表彰

六、其他必要ト認メタル事業

第四條　本會々員ヲ分チテ左ノ二種トス

名譽會員　特ニ本會ニ功勞著シク役員會ニ於テ推薦シタル者

普通會員　學區内在住ノ婦人ニシテ本會ノ趣旨ニ賛シ毎年會費金參拾錢ヲ納付スル者

第五條　本會ニ左ノ役員ヲ置キ任期ヲ二年トス

但シ重任ヲ妨ゲズ

會長　一名　　副會長　一名

第三　行政の委

評議員　若干名　　幹事　若干名

第六條　會長ニ城東尋常小學校長ヲ推シ、副會長ニ主席訓導ヲ推戴ス

第七條　會長ハ會務ヲ總理シ副會長ハ會長ヲ補佐シ、會長事故アル時ハ之ヲ代理ス　評議員ハ重要事項ノ協議ニ與ル

幹事ハ會長ノ命ヲ受ケ庶務會計ニ從事ス

第八條　本會ハ役員會ノ推薦ニヨリ顧問ヲ置クコトヲ得

顧問ハ會長ノ諮問機關トス

第九條　本會ハ左ノ會議ヲ開ク

總會　毎年一回之ヲ開キ豫算決算及事業ノ協議報告ソノ他但シ必要ニ應ジ臨時總會ヲ開クコトヲ得

役員會　隨時之ヲ行フ

第十條　本會ノ經費ハ會費、補助金、寄附金及ソノ他ノ收入ヲ以テ之ニ充ツ

第十一條　本會々計年度ハ　月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

第十二條　本則實施ニ必要ナル細則ハ役員會ノ決議ニ依リ別ニ之ヲ定ム

第十三條　本會則ハ昭和十三年度ヨリ之ヲ實施ス

4　母姉會常會

この母姉會の目的によつて行事をして來たのであるが、事變の進展につれて、家庭婦人に對する時局教育の要請を痛感し、銃後の女性として一段の緊張と努力とを促すために常會として活動することになつた。婦人團體であるので、地久節に因み、毎月六日を定例日とした。その實踐記錄は左のやうなものである。

1、昭和十五、五、二十八

十五年度總會を開き、第一時二時と學校の授業を參觀し後會議。參會者三百五十名。常會併置の件や見學の件を可決して、母姉會の事業として常會を設けることになつた。

終つて縣社會教育主事川崎芳之介氏の講演並に映畫の鑑賞をなす。

2、常會規約

(イ)目的　母姉會に併設し母姉會の目的を達成する爲に必要事項を申合せ實踐するを目的とす。

(ロ)事業　毎月六日午後二時より四時迄定例に開會し左の如く實施す。

○學校教育に關すること。

學校規程並に一般教育問題に亙りて懇談し學校教育の理解を深め家庭教育の振興を圖る。

○時局に關すること。

國民精神總動員施設、時局問題等に亙りて懇談し一層之が徹底に資せんとす。

○修養に關すること。

名士の講話・法話・茶道・演藝・映畫・文藝等に亙りて實施し、婦人としての修養に資す。

3、昭和十五、六、四

會員百八十五名、內原の義勇軍訓練所及び國民高等學校女子部を見學し、皇國の母としての覺悟を一層固くす。

4、昭和十五、六、六　第一回常會　出席百五十名

開會の挨拶の後、君が代、宮城遙拜、默禱等型の如く行ひ次に朗誦を入れる。鄕土の憂國歌人、佐久良東雄先生の

すめらぎにつかへまつれと我を生みし
わがたらちねぞ尊とかりける

を一同誦して講演に入る。

學校長「學校教育に對する家庭の提携」

社會教育主事補、湯澤卯吉氏「時局に處する婦人の道」

第三　行政の委

紙芝居、永井訓導

5、昭和十五、七、六　第二回常會

出席者　二百二十名

講話、學校長「訓育講習會を前にして」

兒童の讀本朗讀、及びレコード鑑賞。

6、昭和十五、八、六　第三回常會

防空演習中にて出席會員少く、懇談會とす。

7、昭和十五、九、十三　第四回常會

司法保護會より講話の申込あり、十三日に變更した。

水戸刑務所教誨師の司法保護に關する講話。

8、昭和十五、十、六　第五回常會

水戸聯隊區司令部々員鶴見鴻二中佐の軍事講演。參會者約二百名。

9、昭和十五、十一、六　第六回常會

永井訓導、紀元二千六百年奉祝大會及新營々についての講話。

學校長「物の受用について」

參會者百八十名。

10、昭和十五、十二、二十三

今日は役員會とし、常會に對する反省及び一般會員の感想希望等について懇談す。尙、一月の常會についての豫定計畫を決定。

11、昭和十六、一、十五

一月であるので常會を新年會とし時局下ではあるが、家庭婦人の生活に潤ひを與へるやうな案を立てゝ實施した。

會長の挨拶で事變下四度迎ふ新年に際しての覺悟を固め、後餘興に入り、海老三大神樂の曲藝や萬歲に、しばらくは何物も忘れて心の底から笑ひ興じた。映畫を鑑賞し、茶菓を喫しながら相互に歡談し樂しい半日を過した。會する者五百名頗る盛會であつた。

12、昭和十六、二、二十六　―　二十七

家庭教育講座を開いて二月の常會を之に充てた。

次の講演があつた。

水戸市學務課長　堀健吾氏「家庭と教化」

茨城縣女子師範學校長　野田貞雄氏「國民學校と家庭教育」

水戸縣隊區司令官　重久篤治氏「銃後婦人の心構」

城東小學校長　河内唯市郎氏「婦人と信仰」

13、昭和十六、三、六　第十回常會

地久節を奉祝して後に常會に入る。縣衞生課より映畫班の出張を請ひ、衞生に關する映畫の鑑賞を行ふ、出席三百名。

一二、荆を拓く

1　開墾に學ぶ

それは七月の盛夏の事であつた。本校の運動場東端柵外に六七十坪の屋敷跡があつた。破壞されたコンクリートの破片と石塊とが繁茂した夏草の中に散在し、見るからに荒廢の感を持たせるのがそれであつた。移轉改築の多忙さに校舍内外の淸掃と整理に寧日ない日々を送つてゐた一同には此の荒れた土地を顧みる餘裕がなかつたのであるが、段々整理されるに從つて着眼が廣い範圍に行渡る樣になり、遂に此の荒野に開墾の鍬を振ふことが協議されたのである。鄕市の學校としては校舍前の閑地に學園を作り、四季折々の草花を樂しむに過ぎなく、農耕的作業を課すには餘りに環境が惠まれてゐないのが普通であつて理想としての良案も種々な障害で到底實現されるものではないのであるが、、本校は此の點非常なる恩惠を受けてゐるといつてよい。

さて意々第一の鍬を入れる日が來た。動員されたものは本校最高學年の尋常科六年男生、各々家より持參した唐鍬と鎌を片手に烈日の太陽の光を身に浴びながら運動場に集合、整列しただけで玉の汗は頰を流れる。恐らく今迄に農耕らしい作業と名づくものは皆無といつてよい兒童ばかりである。而も此の暑、心配するものは獨り受持のみではない。然し敢然と闘ふ者には暑熱何ものか、指揮の訓導の「氣を附け」の號令は烈々の響を以て炎熱の空氣を動かしたのである。既にして意氣天を衝くの氣慨で、指揮者の甦身的氣魂と、臨機應變の運轉その妙を得ることは團體の行動を規定する最大の玉手箱である。そして恰も戰場に在る勇士の如く、荒野攻擊の訓示「皆さんは今迄に開墾を行つたことはないであらう。世の中に何が苦痛と言つても農耕程苦しいことはないのである。皆さんはその苦しみを體驗したことがない。本日は今からその尊い體驗を始めるのである。我等の遠い祖先は大木を倒し石塊を取除き、荒野に開墾の鍬を入れて瑞穗の國を築き上げたのである。我等も亦、今日祖先のその偉大なる骨折を體驗するのである。決して樂でもなく、面白くもない、只默々として鍬を打振ふだけであるが其處には開拓者としての誇があるばかりである。皆の手になつた此の土地は君達や弟や妹のやがて學習する尊い野外教室となることを疑はない。君達はその開拓者なので大いに頑張らう」

やらん哉、その苦しき體驗を、闘はん哉、開拓の敵と、の意氣も高らかに準備に取りかゝる。「鍬と鎌を置け」「シャツを脫げ」そして整然と木蔭に衣類は並べられる。やがて班毎の分擔區域は定められた。

計畫、それは如何なる作業にも先行されるべき最も重要なる仕事である。如何に開墾すべきか、如何なる方法を以てするか、如何に各自が分擔さるべきか等について班毎の相談は續けられる。計畫は密に而も迅速にをモットーとする平生の指導は此處にも遺憾なく發揮された。「作業始め」の號令もろとも鎌は夏草の茂みに挑戰する。コンクリートの破片と石塊が切取られた草の根本に現はれる。それを拾ふ手が丹念に、地味にせつせと動く。第一の鍬がかん〳〵と照りつける太陽にきら〳〵と輝く。

裸の背筋に流れる汗は、振上げた唐鍬の刄から落ちる土くれを溶かし、幾條かの線となつて見え、紅顏に湧く大粒の汗は、土にまみれた手のほこりをつけて土人とも似ない異樣な顏相を描き出す。然し默々として刈る、掘る、運ぶの作業が打續く。

やがて「休め」の號令がかゝつた。凉しい木蔭に入つた土の勇士、どつかと落す腰。「汗を拭け」凉しい風が頰を撫でて行く。第一作業の反省が開かれた。鎌の使ひ方はどうか。石塊の拾ひ方はどうか、唐鍬の入れ方はどうか。各班の協同はどうか。各自が體驗した方法を得意げに語り合ふ。凡ての所に工夫の餘地があり科學する心が必要である。一時の話合ひの中に自分の缺陷を自覺し、次の來るべき作業の方法を考案し、そして最大なる能率へと心掛ける。

「第二回の作業始め」何處となく地について來た働き振り、尙もぢつと凝視する眼、緊張する五體は何かを考へつゝ、而も一振々々が科學されていく。其處には、暑氣もない、困苦も感ぜられない、作業三昧の境地とも言ふべきか。

「作業終り」の號令がかゝつた時は、夏草の濃き綠に替り、黑々とした大地の色が恰も明確にも今迄の作業を評價する如く、くつきりとふくよかに見える。自分の勞力がもたらした此の光景にぢつくりと見入る子等。彼等は今、偉大なる開拓を學んだのだ。熱風も尊い體驗を積んだ汗肌には此の上もない凉風にしか感ぜられないのだ。

輕い體操が濟んで直ちに「道具始末」だ。道具は我等の大切な恩物だ。否、尊い生命體といつても過言ではない。道具を尊重する處に日本的な生き方が在るのだ。自己の身體を洗ふ前に先づ道具を掃除する。一點の土くれも附かず、淸められた鍬の鎌の刄に柄に無言の愛惜が感じられる。最後に「體淸め」だ。

淸々しくなつた體は心まで淸らかにされ、明朗な氣持となつて感謝の中に反省會が開かれたのであつた。

作業を單なる勞働とせず、その一部分にも偉大なる教育を實踐して行くのが本校の作業による訓育なのである。

2　無言の體得

種子蒔き　いたいけない手に土塊を持ち、之を小さく崩していく。土いぢりは子供に大好きな遊びの一つである。一つの石ころも見逃さずに之を取除き、一處に集めては赤せつせと手を動かしてゐる姿。土いぢりは子供の大好きな遊びとは云へ、その眼の輝き、眞劍な全身の緊張は大人も及ばない樣子である。今から蒔く種子の寢床を作るのだ。軟い寢床を、そして安らかに種子を寢かせるんだと云ふ、幼き純悲心は一層彼等を眞劍にするのであらうか、四人が一つの空箱を中心として仲よく働いてゐる。粉末ともなつた土が平らにされて小さな指で押した穴が點々として不規則

に並ぶ。見ただけでは何等生命を感じない、黑色の朝顏の種子がその小穴毎に一つづゝ丹念に落されていく。その種子に注がれる眼、恐らくは彼等が此の一粒に希望を祈つてゐるかのやうに。やがて輕やかに土の蒲團がかけられ、如露の先から流れ出る甘露の如き水がしつとりと希望を包む土の蒲團に注がれた。

愛兒を育くむ親心にも優れて、ぢつと見守る苗床。やがて芽を出すだらうか、若しかしたらといふ心配の心は到れり盡せりの世話に餘念がない。自分の組の名を表はす札が掲げられ、日當りのよい所に整然と並べられる。苗床の土が乾けば直ぐにも水を與へる。此の境地こそ、全く自ら心底に湧く聖なる愛でなくて何であらうか。自然に對する親しみと愛情は科學的精神の萠芽と共に彼等幼童の五體の中に伸びていく。

歡喜　學校へ來るなり眞先に苗床に走る。しつとりと潤ひある土を眺め、恰も靈の子が柿の芽を待つ心地で「早く芽を出せ」の顏付である。惡戲盛りの此の時代、苗床の前に集り來る幼童達、一人として手を出して、いたづらする者がない。自分が仕立てたもの、大事な虎の子、どうして之にいたづらの手を差延べることが出來ようか、この精神こそ生物に對する愛情への無言の訓育である。

數日の絕えざる世話が實を結んで、平らかな土が微かにもたげられた時の歡び、そして次第にそのふくらみを大きくし、無垢の芽肌が種子の皮をもたげてそつと苗床から姿を現はした時、彼等の喜びは最大となつて表はれた。何も知らぬ、唯丹念に世話して來たのではあるが、今この芽生えに歡び、何を感じたのであらうか。教師は此處に立入つて訓へを說く要もなからう。子供が無言の中に體得する偉大なる學習の芽を彼等の生活の周圍にある障害から隔離させつゝ、之が成長を見守る處に教師の眞の價値が存するのである。芽生えは次への希望を更に强め、一層之が愛撫に努めさせる。土に根ざした可憐な芽萠はやがて日の光を浴び、土に養はれて茂つて、優美なる花を咲かせる。此の成長をぢつくりと見守らせていく中に、自ら太陽と大地の惠みを感じることが出來る。

本校の科學教育は飽迄この精神で行踐してゐる。單なる科學的な知識を兒童に與へようとはしない。全生活の中に、彼等が感じ自ら創造して行く姿を健全に發展せしめていくことを本體としてゐるのである。

3　創造を育くむ

工夫する兒童　新入學生父兄會の日だつた。開會が午後一時の豫定であつたので受付を分擔する職員は晝食もそこ〳〵に早速受付用の卓子やら、名簿やらを準備し、受付場所に陣取つたのである。間もなく初等科最高學年の六年女生數名が父兄案内の爲に應援に駈けつけた。

遲ればせに書き上げた「〇組受付」のビラが卓子上に四枚、早速、これに目を着けた女生徒があつた。「これを貼るのですか」「そうです。貼つて下さい。」貼る場所を指定しないのが受付訓導の意のある所らしい。靑眼のいゝ女生徒は一枚を取上げて卓子上に、ピンで四隅をしつかと押へ、風が吹いても安全の構へ。子供としては全く、よく考へて貼つた積りであるが、肝腎なことを忘れてゐる。何の爲に貼るのか、それが最大の課題でなくてはならぬのに、卓子の上では一見父兄の目に着き難いことは不問に付した形である。先程から女生徒の行動を感心さうに眺めてゐた受付訓導は微笑をたゝへて「このビラは何故貼るんですか」と物靜に彼の女生徒に聞いたのである。突然の質問に女生徒は、それが何の爲に自分に問はれるのか意に介しない樣だつたが、やゝ暫く考へ込んでゐた。やがてにつこり微笑んで丁寧にピンを取りはづして、彼のビラを「〇組受付用卓子」の後側の壁に貼つたのだつた。間もなく、三々五々連れ立つて來校する父兄の姿が見え出した。

これは何でもない一瞬間の如き短時間の中に起きた何でもない出來事であるが、受付訓導の兒童を導く態度が如何に愼重であり如何に創造的であつたかといふことが出來ると思ふ。工夫創造の精神は何も理科の授業や工作の授業にだけ躾けるものではない。科學せねばならぬことは我等の生活全野にある。日本人の缺點と謂はれる科學する心の足りない原因は、過去の教育が餘りにも完備した指導であり、工夫創造能力を錬磨するのが理科室にのみ限られてゐたからではなからうか。本校に於ては特にかうした科學する心を兒童の全生活に亘つて指導してゐるのである。兎もすれば最近の躾が型に入れんとして識らず知らずに兒童の創造性をまで犧牲にし勝ちである。

科學する心は教育の全野から見て國民學校の所謂自修の態度と緊密なる關係があると思ふ。本校の科學教育は全科目に亘つてその精神を以て臨み、小事たりと雖も常に兒童の創造性を培ふことに思念し之が指導に萬全を期してゐるのである。

一三、師弟同行

——風紀係精進の跡をたどりて——

赤白の腕章をつけ、幼き弟妹をいたはる姿、其等は親愛（校訓の一項）の精神に育まれて來た兒童には、眞に憧憬の的であり得意の絶頂である。

風紀係！　彼等の負ふこの務こそ、我が校風紀の淨化の根源であり、善良なる校風樹立の營みの推進隊なのである。

毎月三日學校創立記念日に誓ふ「吾等ハ善ク學ビ　善ク勵ミ　健全ナル校風ヲ發揚シ一ニ我ガ校ノ名譽ヲカゞヤカサン」の誓詞は、絶えず彼等の耳朶に「進め、働け、苦行の中へ」「行け第二里を」と早鐘の如く鳴り響き、若き血潮を湧き立たせるのである。

★率先窮行

我が校の運命こそ、我等の雙肩にあるのだ。

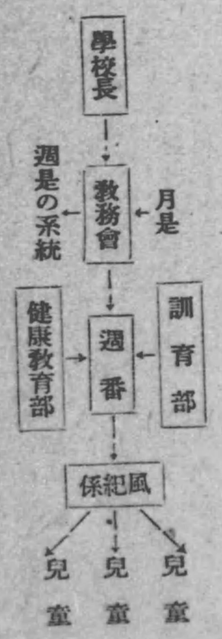
かの「七生までも國賊侍に生れ出で、國を治め申すべき覺悟、膽に染み龍在るまでに候。器量も入らず候。一口に申さば、御家も一人して荷ひ申す志出來申すまでに候」と謳された葉隱の大精神こそ風紀係の魂と言ひ得ると思ふ。

全校兒童を率ゐて進む大突擊であり、亦道を求めて遍路する巡禮の姿なのである。

先んじて苦を受けよ、それは他を愛する誠である。まづおこなへ！　先づ範を示せ！　內燃する至誠を無言で奉仕せよ！　されば必ずや我が意を汲まん、我に從ぜん、率先窮行こそ、風紀係活動の精神である。

學校生活も風紀係の指導も、何等か確立せる目標があればこそ目的實現の生活行が價値的に營まれるのである。其の目標を月是と言ひそれを各週に配當して週是或は週努力事項と言ふ。

週是は月是より派生されるものであつて左の如き機構を經て、決定され全校に行き渡るのである。



教務會は月是に基づいて一ヶ月の週是の系統を作製し、それを週番會に送る。週番會は訓育部、健康教育部の主任を加へて當番の者と共に、其の系統に基づき兒童の實相を凝視して日々の實踐事項を設定するのである。

かくて生れ出た週是

自五月十二日
至五月十八日

◎根氣よく働きます。

◎朝禮時
- ベルと共に靜止（鎭魂）
- 一心に聽き入る（目、手、口のしまり）
- 朝の自修（目的となす仕事を）

◎學習時
- 學習中の姿勢（特に書字の場合）
- 學習帳の使用（資源愛護上から）

五月の月是

業間作業の徹底

◎作業時
- 教室內の清掃
- 校庭の除草

勤勞

日々の行

月	火	水	木	金	土
12	13	14	15	16	17
（常磐神社例祭）だまつて働く	教室內の清掃	作業場へ無言無音の往復	默つて仕事をする	窓ガラスを掃く	廣板を石鹼で清掃する
		草取り	（先賢講話）業間作業の徹底	（清潔檢査）教室內外の清掃	（映畫會）學校園の手入
		校庭の一齊除草（學年合同で一本の草も拔き取る）	作業場へつき方、かへり方、作業中の休憩時等の態度の指導	ハタキの掛け方、雜巾のしぼり具合、教壇の下の整理	花壇の手入 一週間の反省

★師弟同行

風紀係の兒童と其の週の指導責任者が一堂に集ひ、週番勤務上の注意と責務について話合ひ、其の任務の重大性を十分に自覺させ、週是を生かして行踐させる最良の方法や觀察・補導の仕方をも協議する。そして各自の任務に就くのである。

弦を放れた矢の如く、歡喜と希望にあふれる兒童が教室へ運動場へと遍路の旅をつゞける修業者の尊き姿が見られる。

或は水呑場に佇み、或は砂場に憩ふ其の口から漏れ出づる言の葉、「水！　ちよつとの間も無くてならぬ水！　私達の生命を養つてくださる水！　お母樣のお乳の樣なところから噴き出す水！　あゝ、お母樣のお乳にすがりついて戴いた事の思ひ出されるこの水！　こんなに大切な水ですもの、無駄にも來ませんね、水を惡戲出來ませんね、よさう、そして廣い運動場へ行かう、元氣に…」。

托鉢こそ持たぬが、彼等の尊き巡禮の姿は教室から教室へと消えて行く、清潔を誇め、作業を賞讃し、掃除を手傳ひつゝ……。

★ある日の看護日誌

教師　兒童

五月十二日　月曜

天氣　晴
溫度　二十五度
校長印　檢印
職員印　檢印

當番印

一、常磐神社例祭について學校長より訓話あり、各學級敬行す。
一、週是の發表
根氣よく働きます。
朝禮時、學習時、作業時に亘つて此の精神を發揮するやう努力されたし。
一、朝の時間をもつと活用したい。
自修の指導案を持つて兒童に望む事を希望する。低學年は戶外運動が適當ならん。
一、作業場への往復の無言は、不首尾であつた。今日の努力事項である。もつと精一杯行踐させたい。隊列を整へること、雜巾を持つ事に缺陷があるやうに思ふ。（宮本記）

出席狀況
- 出席兒童數　一二九四人
- 缺席兒童數　一五人

當番兒童
- 記入者　荻谷忠男
- 其他　初六ノ一組

朝會訓話　常磐神社例祭日であるので校長先生から義烈兩公の事について伺つた。週是のお話。

清潔整頓
- 廊下　大變に良くなつて來た。（西側の校舍特によし）
- 教室　机の蓋の始末の惡い學級が少しある、他はよし。
- 校庭　大體良し、欅の附近に小さい草が生え始めた。
- 水呑場　水のしまりがやゝ惡い、花びら等が落ちてゐる所がある。
- 帽子掛　掛け方、整頓よし。
- 傘置場　一般に良し。
- 下駄箱　下駄の整頓大層よろしい（やゝ砂のある所あり）
- 便所　戶じまり、清潔共によし。
- 言語　まだ〳〵惡い者がある（遊ぶ時の言葉注意）

風紀
- 服裝　男生でボタンの取れてゐる者あり。名札のない者も相當にある。
- 禮儀　教室出入の禮を忘れる者がある。
- 往復途上　二列登校はやゝみだれて來た、高學年の人々がもつと注意して行きたい。

其他　六年生全體で常磐神社に參拜す。「勤皇偶首」「復古指南」の大幟を拜して歸る。

一日の遍歷を終へて日誌を中心に語り合ふ時ぞ兒童達に取つて無限の喜びであるらしい、一日の善根を顧みて打ち融かす語り草には、いづれも蟹の閃きがあり、魂の接觸が普なす。かくして反省された事どもは、看護日誌となつてあらはれるのである。

「ぎゆう」と昇降口のドアが開かれる時から下校合圖のサイレンが鳴り響きて校舍も校庭も全く森嚴其のものにかへるまで、赤白の襷章をつけた職員兒童の甲斐々々しい姿が其處此處に見受けられる。不精な場所とされてゐる便所に露の玉をやどす草花が飾られ、破損した渡板に眞新らしい模樣が織りなされて行く……。

兒童と共に精進する職員週番の守則は

○朝禮有無の標示　○國旗の揭揚　○朝禮の指揮　○授業時以外に於ける兒童の看護　○努力事項の實踐の推進力　運動器具の整理　○負傷者の處置　○遊びの指導　○兒童役員（風紀係）の指導　○校舍校具の破損の修理　○參觀人の應接　○其の他臨時の事柄の處理　以上の樣な事である。

★運路のあと

善良健全なる校風樹立の第一線に立つて活躍した兒童の反省記錄をみる。

「風紀係を終へて」　初六ノ一　○○○○

今、風紀係として勤めた一週間を反省する時、色々の事が思ひ出される。

一、低學年の世話について

雨の朝だつた。カッパを着て來た一年生がボタンをはづせないで困つてゐた。目には大粒の涙さへたゝへて。僕は急いで走り寄つた。默つてホックをはづしてやつた。ボタンを上から拔いてやつた。眞赤になつて今にも流れ出やうとしてゐた顏は次第に軟らいで來た。僕はほつとした。胸には赤い名札に組と名前とが書かれてゐた。カッパを名札に合はせて置いてあげた。一年生は嬉々として教室へ入つた。

また、二年生の教室へ行つた時である。男生は掃き方が下手で所々に塵が散ばつてゐる。一緒にきれいに掃いてやる。雜巾をしぼつたり、隅々まで掃除する樣に話しながら雜巾がけを手傳つてやつた大喜びである。額に汗を出しながら僕等に負けまいとして一心に雜巾がけをして臭れる。僕は本當にうれしくなつた。

これからも、この心持で校訓にある勤勞の人となりたいと思つた。

二、室内の清潔について

教室の掃除は床に魂が入り込んだのか、どの室も皆光り出して來た。雜巾をかける人に床までが御禮を言ふのでせう。掛ける床の中から笑顏が表はれ出て來る。特に十五日作業徹底日に

廻つて調べると、覗せてもらふ僕等がきまり惡くて近よれぬ位眞劍に作業をして居た。

教室の隅々、教壇の下、戸棚の廻り等、手の屆きかねるところまで美事に清掃された室内は巡視する度に目頭が熱くなる程であつた。

三、學園について

學園はどの組のも元氣よく生々と草花が伸び出して居て「よく手入して臭れます」と御禮を言つてゐる樣だつた。

特に低學年の人達が赤い小さな手で草花を植ゑてゐる樣子は尊いものであつた。

以上の樣に暮したこの一週間を反省すると、定められた週是や日々の實踐事項が十分に生かされ、實行されてゐるやうに思へてうれしい。然しそれに較べて僕等風紀係は係として本當に働けたかどうかを案じられ、それが恥かしくなつて來る。

全く飾らぬ赤裸々なこの反省のうちにも、兒童等は子供なりに自己の責務を自覺して「身を持つて範を示さう」と言ふ樣な心の萠芽を認める事が出來るのは無上の喜びである。

最後に結びにかへて此の週々番として活動され風紀係と同じ巡視をされた職員の感想を記してみる。

○

國民學校の發足と共に躾・躾の聲は高い、この時兒童風紀係と言ふ重責を卒業生よりタッチされた年齒僅かな六年生が、溌れ勝ちの學年始めに如何に下級生を指導誘掖して行くか、少なからず心配してゐたのであるが、いざ其の衝に立つや、かゝる杞憂を一掃し、其の堂々たる武者振ひには一點の疑念さへ感ぜぬ活動に只々感激の他ない。登下校の訓練、室内の歩行訓練、作業訓練、低學年作業の補導等々數へ來れば限りなき其の周到なる御世話、微に入り細に亘つての拔目なき指導、全く校風作振の源泉であり推進力であつた事を衷心より喜ぶ者である。（○○訓導）

○

前週の週是「だまつて働かう」に續いて「根氣よく働かう」を目あてに行踐して來た。朝の自習に、學習時の書字に或ひは教室内外の清掃に師弟共に默々と行ずる、その靜中動の境地こそ、行ずる者のみ知る三昧境だ。

腰板窓ガラスを一點の曇りなきまでに掃き清め、校庭の周りの草取りに一本一本根を殘さずに引拔いてゐる姿こそ「根氣よく働く」週是の實踐の姿だ。かくするうちにやがて自律的に「考へて働く」性格の錬成へと導かれて行く、氣力あり公に奉ずる精神の

持主たる皇民ばならんが爲に。

兒童のかへつたひつそりした教室に、赤白の腕章の兒童が「風紀係ですが、教室を拜見させて戴きます」といともていねいに挨拶して隅から隅まで調べ、その記錄は責任を持つて詳しく日誌に殘されて行く、この姿に兒童ながら職域奉公の精神を見出す。かくて週是の徹底へ、善良なる校風の建設へと向上の一路をたどるのだ。（〇〇訓導）

〇

始めて初等科のみの學校に赴任して果して兒童風紀係の活動や如何にと案じてゐたが、其の發想は全然裏切られ過去に於ける私の高二風紀係指導以上の活躍振りに感心せざるを得なかつた。

やゝもすると風紀係は下級生の缺點のみを見て姉心、兄心としての指導が見られぬ場合が多いのであるが、本校兒童には、その懸念は少しもなく實に立派な指導的態度である。

兒童は男女、其の觀察點を異にしてゐる。女兒は女兒として細かい點への觀察眼を持ち又下級生に對し姉心としての指導力を持つてゐるものである。かゝる點から見て男女兩方から係を構成したならばと言ふ考へも持つた。

とまれ指導者が嚴重に共に行ずる姿に於て始めて十全の効果を擧げ得るものである。今後とも大いに俱行の實を擧げて行かうと考へてゐる。（〇〇訓導）

◎週是！　校内各所に見られる兒童の週是に對する眞剣な態度に感謝せずには居られない、名譽なく利念なく、只管勤勞への精進兒童の全身全靈の伸展は勤勞の汗の中に培はれるものでなからうか。根氣よき勤勞に教室は、學校は、淨化されて、それで更に彼の魂は、よりよきものへの伸展をつゞけるのである。根氣强き勤勞！　もつと〳〵續けて行き度いと感ぜられた。（〇〇訓導）

一四、貧者の一燈

1　自畫像

以上書いた所までが、水戸學に立脚し皇民として城東の兒童を如何に錬成してゐるか、行踐の大要を述べた。そこには、率先して垂範する姿も、兒童と共に歩む姿もあるが、主として教師が或る意圖の下に兒童を導く部面であつた。それらの姿の源泉はどうなつてゐるのか、それを記さなければ龍を畫いて睛を點ぜぬ憾があるやうに思ふ。而しさう言つても自分達の指導の姿が決して、龍であると自惚れるわけではないが學校長を中心として、力ない足どりではあるけれども、明日への望を抱いて、旅しつゞける教育行脚の同行二十九人の姿をそのまゝ書いてみたい。つまり教師自身の部面を描いた自畫像である。教育は結局、人の問題だと言はれてゐる。いかに國民學校の制度が法文の上では完全なものであつても、それが發令されたゞけで、直ちに全日本の教育が格段の向上をしたとは思はれない。その精神を眞に理解し、之を生かして運營する教育者の如何によつて、向上も停滯も退歩もあることを思ふ時に、自分達の旅姿を見つめて、これでよいのかと慄然とせざるを得ない。國民學校の教師として自分自身が眞に錬成されてゐるだらうか、兒童を德化するに充分な師表としての資質を備へてゐるだらうか、興亜教育の陣頭に立つて大業を翼賛し奉るに足る精進をしてゐるだらうか、それらに思ひを致す時に、短夜の夢も破れて、明日の旅路の嶮しさに心痛むのを禁じ得ない。我々二十九名が一つ心になつて歩む行路ではあるが、それがいかに遲々たるものであるか、その足あとのいかに淡いものであつたかを顧みて慚愧に堪えない。研究と名づけ、精進と言ふにはあまりにも抽ないもので、全國三千萬の同志のそれらに比べたならば、それは文字通り、貧者の一燈に過ぎぬものであらう。

2　會議風景

どこの學校でも、定期的に又臨時に月何回かの會議が行はれるであらう。そこで兒童教育に必要な討議も行はれ、思索もめぐらされるであらう。本校では毎月一日の校務會、毎週月、木の總會が職員全體の定期會議になつてゐる。それらは、常に午後四時すぎに開かれるので、兒童がまだ學校に居る間に全部の職員が會合することは、管理上支障を來す惧れがあるので、全兒童退校後に行ふことを原則としてゐる。

定めの時間になる。教室で明日の授業案を練つてゐた者も、その日提出させた作品を丹念に見てゐた者も、學園の手入れに忙はしかつた者も皆、仕事半ばであつても止めて職員室の席に着く。早めに來て紫煙をくゆらしてゐた者は火を消して會議後の一服を樂しみにパイプを片づける。學校長が立つと一同起立、

「これより總會を始めます。」

と宣し、禮をする。宮城に向つて恭しく、最敬禮。別に號令はかけないが揃つて出來る。正面を向き學校長が力强く

「職員信條」

と言へば、全職員聲を合せて

「一、我等は日本人たるの感激を以て一意奉公の誠を効さん。

一、我等は師道を唐勵し教育報國以て大業翼賛に邁進せん。

一、我等は敬信愛を行踐し以て皇民錬成に專念せん。」

と唱へる。終ると一揖して着席する。すぐに週番が立つて、

「今週の週是である工夫して働くことについて、特に、用具の使用方法について一段の御指導を頂きたい。出來得る限り、自分達の手で破損の小さい中に修理すること、帚木の壽命を永持ちさせることに注意したい。次に今朝の登校時の様子を見て○○町方面より通學する者は上級生が、よく一年生の世話をして立派に歩いて來たので、ほめてやつた。」

映畫部長の先生が

「今週は映畫會がありますが、その豫定及び指導上特に留意せられたい點を申上げます。……」

と、時間配當や、概概について説明し、事前の指導について注意があつたりする。或時は運動部の主任よりその週の職員運動の豫定が發表せられそれについて討議せられたら、會計狀態の報告があつたりする。更に學校長より、通牒の傳達やら、注意事項等がある。

「これで總會を終ります。」

との挨拶で一同立つて禮をする。あとは教室へ行つて授業案の殘りを書く者、ノートの檢閲を續ける者、理科室に閉ぢこもつて、明日の實驗の準備をする者、そのまゝ席に居殘つて、喫ひ殘りの金鵄に火をつけてはしばらく天下の大勢を論ずるもの等々樣々である。

3　一粒の麥

(イ) 故山崎力之介校長

これからの教育は訓育中心でなければならぬ。訓育によつて眞の日本人は錬成せられると說かれて、學校經營の根本を訓育に置かれた故山崎先生の識見の高邁さに今更ながら頭の下るのを覺える。まだ全國の教育界でも、あまり訓育について評議してゐない時であつたので、その波紋はかなり大きかつた。雜誌に著書に、訓育を說かれ、その實績が見られやうとする時に忽焉として逝かれた。昭和十二年四月二十九日であつた。先生の播かれた訓育の種は今の訓育聯盟なり、訓育は教育の常道と考へられるやうになつた。

「一粒の麥、地に落ちて若し死なずば只一粒にてあらん。死なば多くの實を結ぶべし」

とある聖書の句が、そつくり當てはまるやうに思はれてならない。先生は亡くなられて今日、全國に見られる訓育といふ多くの實を結ばれたのである。

(ロ) 「訓育」の發行

昭和十一年二月、城東校の移轉前の名であつた竹隈校の機關誌として雜誌「訓育」を發行した。それまでには何回か會議を重ね、討議をくり返し、悲壯な決意の下に全職員一丸となつて畫み出した。地方の名もない一尋常小學校のボロ校舍より全國相手に雜誌を出すなどとは、無謀に近いものであつたが、日頃考へてゐる訓育と、その行踐の實際とを廣く世に問ひ、隱れたる同志を求めて止まぬ、熱意とによつて行はれた。それからは、かなりの苦難の路を歩んだが今日、聯盟の手に移り第六卷を見るやうになつて感無量なるものがある。

(ハ) 本校職員の著書

書名	著者
計畫實行事項 學校經營細案	山崎力之介
三十年の體驗に立脚せる 小學校訓育細案	同
魂を培ふ 訓育行事の實踐	同
學校家庭校外 日本訓育の實相	同
學級經營細案（高學年篇）	久保田清
體驗を反省 魂の教育實踐	同
親心師心 私の訓育手帖	同
週間單位 尋一の學級經營	同
教壇實踐二十年 魂の國史教育	同
學級經營細案（中學年篇）	篠田軍三
週間單位 尋五の學級經營	同
週間單位 學級經營細案	村田正博
週間單位 尋三の學級經營	同

湖間取位	等二の學級經營	宇留野 弘
湖間取位	等四の學級經營	大島 誠
湖間取位	等六の學級經營	永井 熙

以上は何れも第一出版協會よりの發行である。

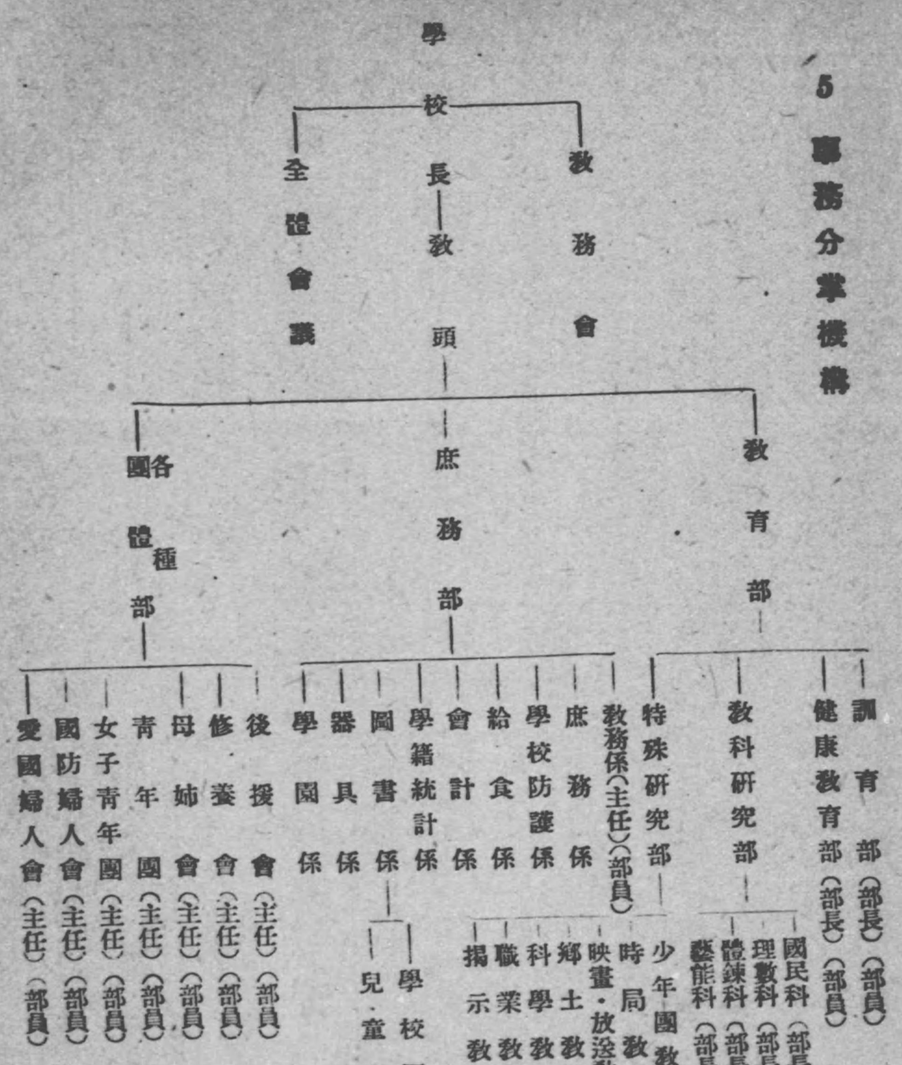
4 愛國公債

學校の實績如何は職員の和によつて定まるものである。その和を實す一つの泉として親睦の催は各學校ともいろ〳〵な形で行はれるであらう。本校では春秋二季に職員旅行をしてその一つとしてゐた。春は日歸りで、徒歩をかなりとり入れ、秋は一泊して旅心を味うことが、かなり前から行はれてゐた。その費用にあてるために旅行貯金として各自毎月一圓づゝ出金し、之を係が代表して郵便貯金にしてゐた。それが支那事變が始つてから、苟も教職にある者が遊山的な旅行をすることは率先して之をやめねばならぬと全員一致して之を取止めることにした。その代りに、この貯金だけは更に繼續し、額も二圓宛とし、その金で愛國公債を購入することを申合せた。それは昭和十二年十一月三日であつた。毎年幾人か宛の轉退職等があつても、新らしく來られた者が皆この趣旨に賛成して加入してゐる。但し、事變前の三倍にも騰つた物價のために一ヶ月の掛金を特に一圓にしてゐる者も出來たが、それは止むを得ぬことである。この組織と、行績がいつか當局に知られて昭和十五年二月十一日に全國の優良貯蓄組合として中央貯蓄奬勵會より第一回の表彰にあづかつた。

昭和十六年五月現在の狀況は左の通りである。

貯蓄額累計	同上中國債購入額	同上中貯蓄債券購入額	全員同上中延人員	現在會員
一八五一・〇〇圓	五三九・〇〇圓	八〇〇・〇〇圓	四四	二九

5 事務分掌機構



★事務分掌部員並内容

部・係	部長	部員	内容
訓育部	宇留野	永井、小林、雨谷、檜山、太田、大島、清水、鬼澤、青木、伊藤、石塚、朝野	朝禮、儀式、自治會、遊戯、各種記念日、行事、體育施設、一般、協議會、調査、ソノ他
教育部	松本	中山、安藤、稲生、郡司、中村、宮田、松井、宮本、小瀧、蕨枝、高橋、田村	身體檢査、衛生室經營、運動日、榮養、齲齒、掛否、校醫、ソノ連絡、運動、處理、器具、體育、衛生ニ關スル一般
少年團教育	宮本	大島、小瀧、松本、小村、高橋、伊藤、郡司、蕨枝	少年團施設ニ關スル企畫及指導
時局教育	大島	小林、松井、清水、小瀧、宮本、中山	時局室經營、就後施設並事務、時局ニ關スル研究調査、ソノ他
映畫・放送教育	永井	稲生、檜山、大島、松本、蕨枝、石塚、青木	映畫及放送ニ關スル教育ノ企畫並ニ實施
郷土教育	宮本	中山、安藤、太田、鬼澤、青木、各科目主任	郷土室經營、郷土觀察ノ實施案作製、ソノ他郷土教育ニ關スル一切
科學教育	永井	理科及工作部員	環境ノ科學的整美、自然觀察實施案ノ作製及指導、ソノ他科學教育ニ關スル一切
職業教育	石塚	郡司、高橋、稲生	職業指導ニ關スル照會、回答、連絡、ソノ他
掲示教育	中山	小瀧、松井、雨谷	掲示板ノ活用企畫、掲出物ノ整理、ソノ他
教務	松井	松本、宇留野、伊藤、大島、永井、宮本	公簿ノ整理保管、行事豫定ノ作製並ニ運營、兒童賞罰授業時間表及ビ塡補、儀式及諸會合、研究授業、ソノ他教務ニ關スル一般事項
庶務	門井	永井、石塚、朝野、松井	豫算作製並ニ運用、物品購入、來賓應接、職員室整美、名札、日宿直割當、ソノ他
學校防護	學校長	全職員	別ニ規程ヲ設ク
給食係	松本	宇留野、朝野、田村	給食ニ關スル計畫、獻立、調理、會費徵集及支拂、ソノ他
會計係	伊藤	門井、松本、宇留野、松井、朝野、鬼澤、清水	後援會集金（門井）、手當、旅費、加俸（伊藤）、給食、公債（宇留野）、松本）榮養劑（松井）、互助會（朝野）、貯金（鬼澤）、共濟會（清水）、ソノ他
學籍統計係	石塚	中山、安藤、郡司、伊藤、中村	入退學、兒童ノ處理、月末、學年末ノ統計、學事報、ソノ他學籍、統計ニ關スル事項

教科	部長	科目	主任	部員
國民科	宇留野	修身	大島	永井、稲生、雨谷、松本、伊藤、宇留野
		國語	中山	檜山、安藤、中村、大田、小瀧、宇留野
		國史	石塚	檜山、小林、宮田、大田、蕨枝
		地理	宮本	稲生、雨谷、鬼澤、大田、青木
理數科	永井	算數	松井	小林、鬼澤、郡司、蕨枝、宮本
		理科	永井	松井、大島、郡司、青木、石塚
體錬科	松本	體操	郡司	中山、稲生、松井、大島、小瀧、宮本
		武道	小瀧、蕨枝、稲生	永井、中山、松井、安藤、宮田、郡司、青木、高橋
藝能科	伊藤	圖畫	松本	永井、檜山、宮田、伊藤、石塚
		音樂	小瀧	小林、雨谷、鬼澤、清水、石塚
		習字	中山	安藤、大島、松本、伊藤、高橋
		工作	檜山	中山、稲生、中村、清水、伊藤、高橋
		裁縫	朝野	小林、雨谷、中村、清水、青木、高橋
文書係	宇留野			中山、雨谷、鬼澤、宮田、小瀧、各種案内狀起案並ニ作製、校務會、終會記錄、ソノ他
圖書係	大島			（一）圖書、掛圖、購入及記帳、整理、新聞、雜誌ノ整理保管、（二）兒童圖書室ノ經營、ソノ他
器具係	檜山			中山、鬼澤、太田、藤枝、宮本、掃除用具ノ整理、保管、備品配當及修理保管
學園係	小瀧			永井、大島、太田、石塚、檜山、學園配當及整理指導、ソノ他
修養會	郡司			永井、青木、鬼澤、田村、職員慶弔、親睦、ソノ他修養ニ關スル一切
母姉會	雨谷			宇留野、安藤、高橋、宮田、母姉會ニ關スル企畫及事務一切
青年團	伊藤			宮本、連絡、協力、指導等
女子青年團	鬼澤			同
愛國婦人會	清水			松井、青木、中村、連絡並ニ協力
國防婦人會	朝野			松本、稲生、小林、同

昭和十六年八月二十日印刷
昭和十六年八月二十五日發行

定價金七拾錢

著者　國民訓育聯盟
代表者　古閑停
發行者　古閑停　東京市神田區一ッ橋二ノ九
印刷者　堀內文治郎　東京市神田區三崎町二ノ二二

東京市神田區一ッ橋二ノ九
發行所　第一出版協會
電話九段二四〇五番
振替東京四八九五五番
日本出版文化協會々員番號一一六〇三六番

東京市神田區淡路町二ノ九
配給元　日本出版配給株式會社

112
125

鎌倉第一校長　池上敏郎著
教行手記　**始業の鐘**（一・八〇／一〇）

茨城香取校長　久保田　清著
皇民錬成　**村の訓育**（一・〇〇／一〇）

調育優良學校叢書
興亞學村　**大久保教育の形態**（一・八〇／一四）

調育優良學校叢書
教行一體　**鎌倉の教育**（一・八〇／六）

調育優良學校叢書
求道錬　**東金の教育**（一・八〇／六）

於東金、教育と行の講習會速記錄
皇民錬成　**師道行**（一・五〇／一〇）

長谷川喜三郎著
國民學校　**國史教育の形態**（・五五／一〇）

菊池知勇序・平井太平著
國民學校　**綴方教育の形態**（一・八〇／一四）

廣島縣西條校長　檜高藏三著
皇民錬成　**西條教育**（二・五〇／一四）

小西博士序・宮瀨睦夫著
母の叢書　**野口英世の母**（一・〇〇／一〇）

第一出版協會版
領布價・七〇